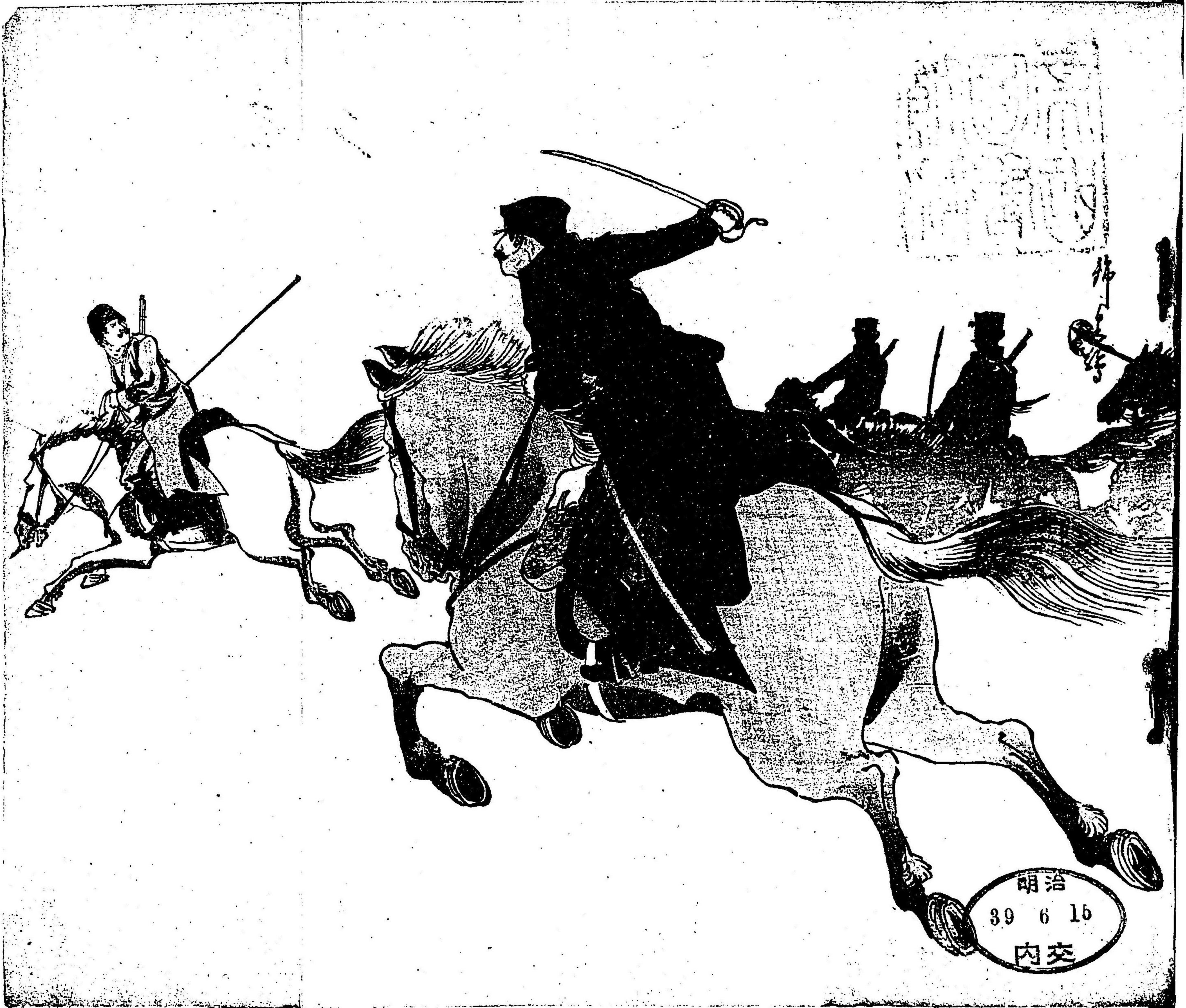


美一調譜



此村飲英堂發行





明治  
39年6月16日  
内交

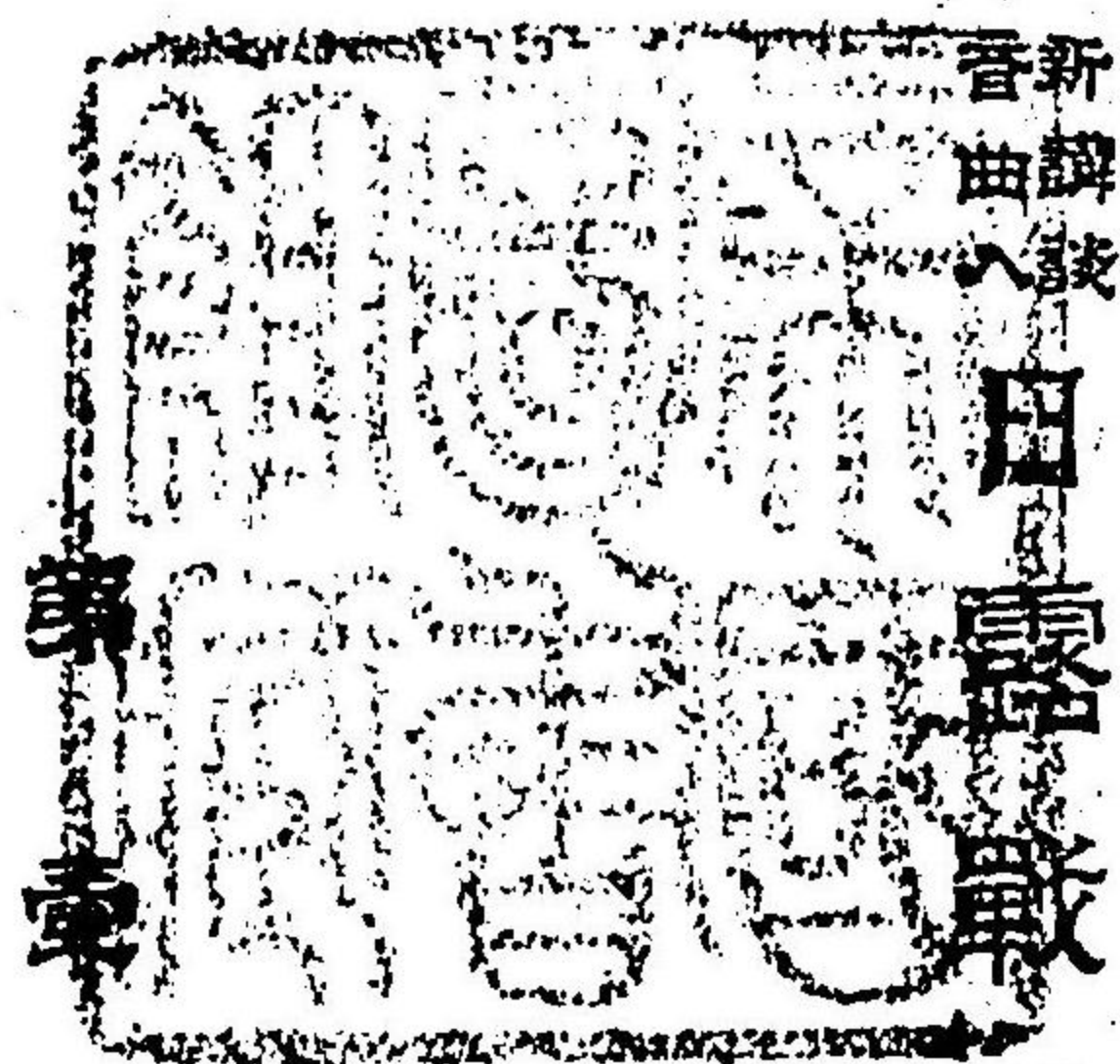
明治  
39 6 16  
内交



特 11  
800

編 貳 談 争 戰 陸 四

軍旅 げ 國 陸 四  
 北順 歸 古 には 方  
 韓の へり 今 には 海  
 に出 戦 舌 豪 傑 とも て 國  
 會ひ 是 舌 奈 翁 たり。 大  
 し時 卷 奈 翁 たり。 和  
 勝 一 時 驚 遂 には 反 して 露 西 亞 列 強 無 比 の 陸 軍  
 利 時 奇 活 け 一 敗 血 にも あり 本 國 指 して 逃  
 は 必 勝 活 け 一 敗 血 にも あり 本 國 指 して 逃  
 ら ず 露 國 の も の と、 知 る も 危 知  
 知 る も 危 知



四

新 譯 談  
 日 露 戰 争 談  
 (第 貳 編)

美 當 一 調 講 演  
 柳 佐 彦 記

明治  
 39 6 10  
 内 交



らぬは信じ居たりしが、一朝國に難あれば、義を泰山の重きに比べ、死を鴻毛の輕きに比するは、日本男子の常なるに、何せうサ  
 ル事のあるべきや、世界無比ぞと誇るなる、哥薩克騎兵の奴隷に  
 日本騎兵の技倆を見せ、一泡吐かし呉れんぞと、時しも去ぬる  
 卅七年、頃には彌生の末ッ方、鐵蹄勇しく平壤城を乗り出し、北  
 へと進みしは、加瀬中佐の騎兵聯隊、端なく敵騎と衝突し、北  
 に數刻の血戦あり。日露戦争の手に始めなる、定州城の占領談、サ  
 ラば之れからじやお話に及ぶ。  
 探て我國の海軍は、愈々露國との國交断絶したれば、何時なり  
 とも進撃開戦して然るべし、大命を拜し、時は去ぬる卅七年の  
 二月六日、東郷中將は五十餘隻の堅艦を指揮せられて佐世保  
 軍港を振盪し、東郷中將は第一、第二、第三の艦隊を指揮の  
 正午の聯合艦隊に推しかけ、二月八日夜の逐艦隊の襲撃、九日  
 正午の聯合艦隊に推しかけ、二月八日夜の逐艦隊の襲撃、九日

將は第四艦隊を率いて仁川港に向ひ、敵の警備艦ワリヤーグ、  
 レーッの二隻を美事撃沈して、木越少將の引率せられたる一  
 個旅團の陸兵は、何事なく上陸を了へられたが、其後海軍の  
 方では、敵の軍艦を一隻なりとも旅順港外に出さすまいぞと、  
 勢なる艦隊を以て見張り遊ばす計りか。時偶には驅逐艦隊を指  
 し向ける夜襲など仕て居られます間に、陸軍の方では黒木大將配下  
 の第一軍が續々御上陸に相成り、二月の末ッ方には、歩騎砲工大  
 分の第一軍が京城に集中せられましたが、探て露軍の方では如何致  
 して居りますものやら、一向に敵情が判然と致しませぬ。たゞ二  
 月廿八日の事でムいます、後方には百餘騎を控へ其尖兵とも申し  
 ませうか、十七騎より編成せられましたる哥薩克騎兵の偵察隊が  
 南下して参りまして平壤城の北方七星門外にテラリ姿を見せまし  
 たが、我守備隊の射撃に達ふて一目散に逃げ歸へつた後は、何  
 の音沙汰もムいませず。大部隊の敵騎が安州迄南下して来たとか



イヤ前衛の主力を定州に集中して居るとか云ふ、何一ツと止  
めどもなき士人等の風評を聞く計り。コゝに愈々前面の敵勢を  
偵察するの必要が生じ、前編お伺ひ致しました如く、丸尾騎兵中  
尉一行の將校斥候隊が、三月九日に平壤を出發して北進せらるゝ  
事と相成りました。  
處で丸尾中尉の一行は警戒オサく、懈らぬうちにも切りに行手  
を急ぎ、名にし負ふ清川江の流れをうち渡りて、一夜を差壯里と  
云ふ戸數十軒計りの小さな一部落に明かされましたが、翌けての  
日は早朝に身仕度を終りて北進の途に就き、約そ一里半餘りも駒  
を進めて名も知れぬ山の麓をクルリ廻はられました所、思ひが  
けずもパツタリ敵の騎兵と出會されました。然るに敵は直ぐと馬  
首をひき廻らし、逸足出して逃げ出す。夫れ追へ逃がすなど丸尾  
中尉はマツ先きに馬をたてゝヒタ追ひに追はれましたが、四五丁  
行かれますと同じく敵の騎兵廿騎餘りバラバラと現はれて走せ加

はる、味方の小勢をさどつたものが再び馬首を立て直し、今にも  
追撃ちにかゝらんづ氣配に見へましたから、敵は多勢味方は無勢  
任務は大事の偵察にある事なれば、血氣にはやりて討死なすの時  
ではないと。「サア退却」の一聲に丸尾中尉は配下と共に、モト來  
し路に引きかへされます。之れを見たる敵の騎兵は得たり賢し  
と追蒐けます。漸つこの事にひきあけて、安州を通り過ぎ肅川  
にかゝろうとして少しは駒の足をゆるめ中尉は先刻の衝突の話な  
ど仕て行かれます。思ひも寄らずバラバラと小銃をうちかけ  
ましたのは、左程餘計では無いが、十騎以上の敵兵と覺はし  
く。「此處で戦闘するのは我々の任務ではない。退却だ、退却だ」  
と。此處で戦闘をかけるは、一行拍車を入れて南に向ひましたが、  
不運にも一行中の騎兵一等卒田所清熊氏は、其折り敵の一彈に足  
部を貫通せられ、現在目の前で敵手に委する事は丸尾中尉宛然胸も  
田所一等卒を、現在目の前で敵手に委する事は丸尾中尉宛然胸も



はり裂く思ひではありまするが敵情偵察と云ふ公の任務には代へ  
られませす、駒を一散に驅けらせながら後振りかへりて見られま  
すると、無惨、敵の騎兵十餘名は早や戦鬪力盡きたる田所氏を、  
前後左右よりオツ取り圍み、突く斬る果ては遂に其首をウチ落し  
ましたので、之れを見たる丸尾中尉は、今に始めぬ謀助の蠻行に  
無念の涙を呑み込みつゝ平壤指して急がれしは、實にも無念の極  
みなる。

陽曆にては早や彌生の聲を聞けども、陰曆にては此時未だ二月  
上旬、見亘す左右の峰には残んの雪積みて、吹く風いと々寒しと  
雖も、長途を飛ばせし其爲めに、駒は汗して鞍を濕はし、丸尾中  
尉の一行は、喘えぎ平壤に馳せ歸へりて、偵察の模様逐一聯隊長  
加瀬中佐に報告し、併せて田所清熊戦死の情況を物語られます  
と。中佐は一方ならず田所一等卒の戦死を憫れみ、露兵の野蠻に  
憤慨せられました。扱て斯くてあるべきにもあられば中佐は直

ちに全隊の將校を召集して、いろく戦争の評議を凝らされま  
する。

丸尾中尉は猶ほ一應偵察の一伍一什を報告し、軍議はいろく  
に分れましたが、稍々終りに近き頃、聯隊長加瀬中佐殿は併み居  
る將校達にうち向ひ。

「一同は丸尾中尉が今の報告に依りても、略ぼ鑑定はついたであ  
らうが、ソモく定州城は平壤と義州との中央に位わし、東  
北、西の三方は山を負ひ、南の一方のみが平野に連なりて平壤  
に向ひ開き、加ふるに四方城壁を以て廻らされ、要害堅固、守  
るに易くして攻むるに難き要地であれば、位置をかへて考へて  
見た處、敵は此要地に據りて我軍の前進を一防ぎせんと、計  
を立て、居る事は火を看るよりも熾かな事實である。だから安  
州を退却したる以來は、前衛の主力を此地に集中し居る事は疑  
ひなければ、我前進軍は是非とも是れを一掃して敵の肝玉を奪



からしめ、又た此處を撃ち拂つて了はねば、勿論夫れより北に  
は前進が出来ぬ譯であるが、能く敵が之迄になしたる斥候  
偵察のヤリ口を覗てみると、一々兵術にかなつて居て、一日に  
十里進んだかと思ふと十五里も退き、十五里も退いたかと思つ  
てると、今度は廿里の其上も南下して来て直ぐの目前に現はれ  
ると云ふ如うな有様。實に神出鬼没、其進退が自由自在で、  
んな風であつたら容易に油断は出来る譯のものではない。前云  
つた如く地形其他から觀察すると、ドウしても定州は先づ敵前  
營の據點とは思はるゝが、果してソウであるか、又た果して定  
州に集中して居ると仕た處で、其兵力はドレ位のものである  
かを、今一應委細に偵察するは最も必要なる事と本官は信する  
付ては今回こそ將校斥候位々の間ぬるき事では、到底目的を達  
する事は困難であると思ふから、断然強行偵察を執行して、定  
州城の模様及び敵兵力の優劣如何を判断せねばならぬと思ふ。

と。熱誠面にあらはれたる加瀬中佐殿の言葉に、何せう誰一人  
として異存を唱ゆる者が無いませうぞ。議は忽ち強行偵察を断行  
する事に一決し、別けて若手の將校方になりますと、朝鮮に上陸  
せられました後には一日も早く敵と戦争と云ふものが仕て見た  
て堪まらず、俗に申します腕が夜泣きを仕て居ると云ふ如うな有  
様で、いますので、ドウか此度の強行偵察は自分の隊に命令があ  
つて呉るればよいが、イヤ是非とも自分の小隊を行つて貰ひたい  
ものど、中佐の御命令のあるのを今か、と待ち構へて居らるゝ  
と云ふ、實に御威勢な事で、升、コ、で少し計り讀者諸彦  
に申上げて置きたいと思ひます。此強行偵察と云  
ふは、從來は強偵察と思ひます。此強行偵察と云  
も直さず騎兵で申しますと、一個中隊か、敵の兵力次第場合に依り  
ては一個聯隊でも二個聯隊でも、優勢なる部隊が斥候偵察の任務



の下に續々乗り出し、敵軍と衝突する迄ドシ／＼進んで参り、若し敵が抵抗したら直ぐに戦闘を開始し、敵と戦争を仕て居る間に敵情の如何又た兵力の多少を確めようとする偵察の方法を講じて尤も何十萬と云ふ大軍の對抗であつたら、時と場合では旅團又は師團を以てする強行偵察もムいさうで、コンナ時は名目は偵察であつても其實は立派な戦争でムいさうです。たゞ少く違つて居る處は、外でもありませんが、目的が敵情の如何兵力の多少を知るのであるから、夫れすら達すれば如何に激戦最中でも機を見てはサツとひき揚げまするさうですが、斯る威力偵察の方法を従来は強襲偵察と稱えてありましたが、今回の日露戦役から強行偵察と變更してムいます。今回の日露戦役から強行偵察は前申上ました如く、加瀬聯隊若手の將校方は今かくと、頻りに強行偵察の命令の下たるのを待ち構へて居られましたが一、日

の事、愈々名倉、箕田の兩少尉に、各々配下一個小隊宛の騎兵を引率して、定州城の強行偵察を爲せよと云ふ命令が下たり、勿論本隊も亦別に歩兵の若干部隊も、引き續ひて平壤城を乗り出し續々北進を開始すると云ふ事に決定致しました。ソコで名倉、箕田の兩少尉は、「サア此大任を授つた以上は、コノ迄も任務を全ふして自分等手始めの手柄を爲さねばならぬが、敵は名に負ふ世界の強國露西亜である計りか、當の相手は列強無比と稱えらるゝ有名の哥薩克騎兵だから、一同十二分に注意して行かねばならぬ。殊に今度の前進は、陸上敵と始めての試合はせなれば、一同決して不覺をとるやうな事があつてはならず、否が應でも目的を達し勝利を占めて歸らねばならぬぞ……。」と、練り返へし、配下の總てに周到綿密の訓示を致されて、時しも三月の廿七日、勇み立ちたる二個小隊、六十有餘の勇士等は、初春風に吹かれつゝ、駒の足がきもイト軽く、「思ふ儘なる手柄して



歸へり來たるを待つぞよと、サも羨まし氣に送られて、先きに行  
くのは氣の毒だが、後は宜しく頼むぞと、交はず言葉の勇しく、  
鞭聲肅々相呼應じて、平壤城をば乗り出し、行手を急ぐ野路山路  
廻ねり曲ぐれる羊腸の、葛折りをば乗り進み、四方に心をおく山  
の、谷又谷と乗り超えて、敵地に深く進りけり、日本里程の約  
五里餘、ソコ順安と云ふ所まで、到着なして晝餉を濟まし、それ  
より猶ほも進み行き、平壤と安州の驛路なる、肅川と云ふに到着  
し、此處に一夜を徹されて、明けば三月廿八日、其肅川を出發し  
敵兵不意の襲撃は、警戒殿に怠らぬも、氣は張り弓の大和武士、  
いよ／＼駒の足掻きを早め、安州超へて清川江流れの河岸に着  
きにけり。

ソモ／＼此清川江と申しまするは、朝鮮でも五本の指に數へら  
るゝ大河であつて、廣ひ所ろは半里の上もあり、狹まき所ろです  
ら小十丁もあらうかと云ふ位ひ、斯くて曩きに九尾中尉の一行が

將校斥候として出かけられました時は、三月九日でまだ氷が川一  
杯はり詰めて居りましたから、一行難なく駒を乗り入れて無事北  
岸に到着せられた如うな次第で、ムいしましたが、僅か廿日計りの間  
ではあるも陽氣の代はり目は早いもの、此時は早や結びし氷は録  
けて了ひ、所謂雪解の水で大分と嵩も増し居る如うに思はれ升の  
で、名倉、箕田の兩小隊長は馬をならべて河の岸に佇立ち、「サア  
困まつた、ドンな具合にして渡河を仕やうか……」。『サウだねえ  
見渡す所ろ橋とてもない如うだが、勿論小さな渡舟を利用すると  
云ふ事も出来ないし、眞箇に困まつたものだなあ……』と、御兩人  
居る場合でもなし、眞箇に困まつたものだなあ……』と、御兩人  
は暫時途方にくれて居られましたが、やがて名倉少尉はニッコと  
打ち笑まれ、「箕田君、何ぼう大きいからとて上流か下流かに、必  
らず一個所やそこらの淺瀬がない事はなない筈だ。直ぐと通譯に行  
つて貰つて一番土人に案内さそうじやないか。『さうだ夫れより



外に方法はないよ」と、兩少尉の相談は一決しましたので直ぐと通  
譯官に御命じになると、暫時して此地方の故老とも覺はしき二人  
の老人を、連れて來られての通譯官の話に、少し計りの上流今の  
やうに水量がまして居る時でも、深さ馬腹に及ばぬ渡り場があつ  
て、尤も水勢は少く急ではあるが、用心さえして渡りたら大丈夫  
と云ふ淺瀬があるとの事、ソイツは何より跳へ向きぞと、二人の  
少尉殿には直ぐと配下を指揮せられて其渡り場に赴かれますと、  
果して士人の言の如く二隊は何事もなく渡り河が出來ましたので、  
一同は大喜び、爲めに士氣は一入振ひ起つたと云ふ如うな次第で  
ムいました。  
探て之れからは愈々敵地も同然だからと云ふので、いよいよ戰  
術の教への通り一隊が進みまする數丁の先きには、チャンと尖兵  
と云つて、軍曹が伍長かに二三名の兵をつけて道案内をさせ、不  
意に敵兵の襲撃など受ける事なきやう大事をとつて進軍されます

ので、ドウしても味方の勢力範圍を行軍するやうには擧取りませ  
ぬ、之れから第一着に十分の偵察を遂げねばならぬ定州城は僅か  
五里足らずではあるが、日も早や西山にうすづきたれば不知案内  
の敵地に、夜の行軍は危険此上なき事なればと、唯ある名もなき  
小さの一部落に急警舎營をなし、或は利慾に迷ふ露探韓人もある  
に相違なければと、村の四方には交代にてチャンと殿しき歩哨を  
立てられ、警戒オサ／＼懈らぬが間だに大膽にも一夜を徹されま  
した。

第 貳 回

音に名だかき露西亞の、陸軍部隊の其中にも、別けて強しと傳  
えらる、哥薩克騎兵の奴輩と、明日は始めの手合せなり、日露兩  
國陸軍の、これを戦争の序幕かと、思へばいとゞ氣は張り弓の、



さすがに長き春の夜も、何時かは更けく、曉に近かく、時はなれし明鶴、東雲告げて二群三群、鳴ひてわたれば夜はホノボノ。イザ之れからだ進軍ぞと、名倉箕田の指揮官始め、五十勇士の面々は、ムックと跳ね起き、馬に飲かい秣かい、名もなき寒村立ち出で、北へくと進まる、其軍勢ぞなかく、勇々しかりける事どもなり。

此日は三月廿九日、一天澄み亘りて吹き送る初春風の心地善く俗に申します日本晴れのお天気だつたさうで申します。何時迄も来客諸君に御記憶を願つて置きたいと思ひ升のは、此日ぞ即ち日露兩國の陸兵が、其名もたかき定州城外に衝突して、始めて激戦が演ぜられましたる紀念日で申します。閑話休題、名倉、箕田兩少尉の引率せられまする二個小隊の強行偵察隊は、前日にも増して要心堅固、肅々として馬の足がきを進められました。隊の中程なる名倉少尉は、行く、傍らなる清末特務曹長をふりかへ

りて、清末君、ドウだらうねえ、敵は愈々定州に構へ込んで居るか知らんて……。折角樂みに到着してみると、敵は風を喰らつて退却した後なと、来ては、張り詰めた勇氣もゆるんでガツカリするよ。若しソウでもなつた場合には、僕が何より残念に思ふのは陸軍の方では兎に角まッぱじめに戦闘が出来来る好運を捕へて居り乍ら、夫れが駄目になつて了ふからの事だ……。左様でいいますねえ、だが加瀬聯隊長殿の御訓示もアンなでしたから、如何に露助が順馬でも、一サかに平壤除れば北部では二と下らぬと申します、要害堅固の定州城を放棄して退却して居る杯とは思はれませんねえ。少くも百やそこらの監視兵は残して居るに相違ムいませんよ。夫れも左様だなあ、シテみると日露戦争勇頭第一の陸戦は、矢張り相互でする事が出来るのだなあ。傍で聞いても心地善き元氣なお話で申します。

行き、く、三里餘り、ソコには五百米突計りの前方に何も險岨



と云ふ程の事も無いが、一寸した雪崩の獨立高地がふいて、附近の状況は一切わかりませぬ。若しも敵が伏兵でも置いて居て、味方の近寄るを待ち構へ、急射でも浴せかける如うの事があつてはと、箕田、名倉の兩少尉は相談をされて先づ増淵軍曹に四名の部下を率ひさせ、下士斥候を派遣されまします。暫時経つて軍曹の一行は歸へり來たり、敵と云つては一人も見へず、至つて静穩な事であり升との報告に、コンな屈竟な高地の、展望も頗る自在な所に、一人の監視兵も置いて居ないと云ふは、思ひしよりも戦術に暗き露助哉と、一行は難なく其獨立高地を乗り超へられます。時は早や午前十時に垂なんとして、箕田少尉は双眼鏡を手にとり上げられると、遙か五千米突計りもあらんかと思はしき彼方、後方にはグルリと山を廻らしたる高地に、遠目にも美事に築きなしたる城壁が見へて居りますので「オヤ、名倉君、名倉君、向ふに見ゆるはありやあ、屹度定州城に相違ないと思ふが

若如何だらうねえ……」と申されまします。名倉少尉も問はれて同じく双眼鏡をとり上げ、暫時は睨と熱視めて居られました。無論左様だよ、チなくてはコンな所ろにアンな立派な城壁のある所はないもの、兎に角嚮導に聞かして見やう。と、名倉少尉は通譯を以て韓人の嚮導に質されまします。果して定州城に相違ないの答へに、漸く來たか一行五十勇士の面々は、宛然寶の山にでも來た如うなお喜びでふいふ。斯くて夫れより、強行偵察隊の一行は、一倍の勇を越して雪崩の高地を下られました。定州城迄はザツと五千米突、其又た三千計りの南方に、左程高くはあらざるも、海鼠の如く横にはえたる高地脈ありて、展望を碍ぐると妙からず。扱て其高地に達する迄の間は、一望さえざるものなき開闢地、ヨシ尖兵を出しても聊か功力なく、如何とも詮術がふいませず、其二千米突計りの間は、ヨシ敵が前面の高地に據り待ち構へて居るとしても、他に危すべ



さ策もありませんで、兩少隊長殿は行く、軍議を凝されまし  
 たが、さし當り之れと云ふ名案もなく、コ、が即ち強行偵察隊の  
 任務じや程に、若しか前面の高地脈に澤山の敵が待ち構えて居る  
 として、味方に五十の鐵騎あれば、何せう恐るゝ事のあるべき  
 や、イアやブツかゝる所ろまで平推しに推し蒐けん、勇む指  
 揮官勇む配下、一段と駒の足がきを早めつゝ、峯と峯との其間、  
 僅に二千米突を上ばらざる、野原の中の一筋道、何恐れ氣もなう  
 進まれまする。  
 前方に見ゆる海鼠形の高地を越ゆれば、定州城は僅に三千米突  
 足らずとの事、目的地が近くなれば戦争するものも近まつた譯、君  
 愉快じやあないか、オ、愉快だ。と、之れだから皇國の軍隊の強  
 いのも無利はムいません、敵と出ツくわすのを宛然多年の懸人と  
 ても出會ふ如うに、勇みく、野中の一筋道を辿られつゝ、前  
 方高地の約五百米突位い手前まで進まれましたが、真先に立ち

て居られました箕田少尉は、駒をどめて能く、前面の小山を  
 望まれますると如何しても氣配が怪しふムいますので、直ぐ其  
 後から進んで居る小宮伍長をふり願へり。「小宮伍長、今度の高地  
 こそ眞箇に怪しいぞ、若し定州に少々でも敵が居るとなつたら、  
 此丘にはドンな事があらうと兵を出して居らねばならぬ、若し居  
 ないとは仕たら寧ろ夫れが嘘だ」と、申されますると、小宮伍長は  
 「アモ、少尉殿、手前の高地にさへ一人の監視兵だに置いて居ら  
 ぬ位ひですもの、此丘陵にもマサかに部隊を出して居るやうな事  
 もムいますまいよ。」  
 「それ左様だなあ、蕪念をいれて又た辛勞  
 損をするよりも、今少し進んで見やうかねえ。」  
 「夫れが宜ふムい  
 ませう、何せう一刻も早く定州城迄潜ぎつけて、一戦争やツて見  
 たいものですなあ」と、矢張り一行はボチ／＼と百米突計りも進  
 まれ、高地との間隔が僅に四百米突計りになりたかと思はれまし  
 た時、不意に少し右方によつた方面からしてボン／＼とウチ出し



ました。夫れ敵と云ふ間もあらせす勿論覺悟は十二分てムいます  
れば。

「下馬戦闘！」

の號令は一聲高く野原に響いて、箕田、名倉兩小隊長の口から  
前後して叫ばれますと、一同即時バラバラと馬上から飛び下  
れます。一寸説明を致して置きました通り、騎兵が馬上ながらに射撃をし  
て戦闘するなどの事は決してムいませぬ、夫れは馬と云ふ動物は  
如何に平常馴らしつけて置きましたも、元來が物や音には怯ぢ易  
ひ性質のものですから、何れ十何百騎と隊伍を組んで居る時などは  
若し其中にソんな間違ひが起りますと隊列も自然亂れます。し  
又た其飛び出しましたる馬は山川溪谷の區別なく驅けり出します  
ので、之れ程危険な事はなく、夫れ計りか馬上ながら隻手に手綱  
を操つり、隻手小銃の狙ひを定め發射するなどの事は思ひもより

ませぬので、騎兵が戦闘を開始する時は、ドンな場合でも必らず  
下馬戦闘と云ふ事に定められてあります。ア此時も敵が撃ち出し  
ますと直ぐに此號令が加ふり、次ぎに、

「散開！」

と云ふ號令が再び兩小隊長の口から叫ばれますと、茲に始め  
て引き續き、

「散れ——！」

の號令が曹長、軍曹又伍長と各分隊長達が口々に指圖をなされ  
ソコで各兵士達は三尺位宛の間隔を置いて伏せの姿勢をとられ  
コ、に始めて戦闘隊形を爲すのであります。夫れからお話が少々  
枝葉に移りて御面倒ではムいすが、後の御参考にもなります  
ので、少しく説明を致して置きたいと思ひます。ソレが  
ソは穴勝ち普通の講談師計りでなく、新聞や雑誌などに筆をとら  
るゝ立派な記者の方々迄が、此散開と展開と云ふ兵語をゴソチや



交せに使用して居られますが、其實は大變な違ひがありますので、散開の方は前申上げたる如く、各兵士方が直ぐに三四尺宛の間隔を置いて、バラ／＼と即時伏姿をとりて戦隊形を成されるのを申しますかねれど、展開となると夫れとは大分の違ひがあつて、例へば一個中隊の騎兵が進行して居られます際、遙かに敵を發見し、まだ十分の餘裕がふみます時此「展開！」と云ふ號令がかゝりますると、一個中隊の騎兵は直ちに縦隊横隊で隊形を變じ、普通の場合には第二小隊の中央隊が前進して敵に向はれ、ソコで始めて小隊長からして「散開！」の命令があり、愈々戦隊形に移ると云ふ順序になつて居りまして、若し敵が左翼に優勢なる時は第三小隊が延進増加、又た右翼が強さうな時は第一小隊に延進増加の命令が下り、更らに散開の號令ありて後戦隊形となるときは前同然、サリ乍ら僅に四百か五百米突位のの間隔に於て不意に敵と衝突したと云ふ、丁度只今のお話の如うな急場な時に

は寸分の餘裕もふいませぬから、即時「散開」又は「散れ」で以て戦隊形を成さるゝ次第であり升。  
 今のお話の如く「散れ」の號令に各兵士達は規定の間隔をとりての伏姿、イツ何時戦隊を開始しても聊か差支へなしと云ふ準備が出来ますと、未だ六七百米突も敵と隔たり居りて左程際をき對抗でない時は、「普通に撃て——」或は「静かに撃て——」の號令がかゝり、矢頭を計りてボン／＼と撃ち乍ら戦機の熟するのを待つと云ふ順序になりますものゝ、處が左様でなく此時の如うな不意の急場には最初からして、  
 「急射撃！」  
 或は又た、  
 「連發撃ちかゝれ！」  
 と云ふ號令がかゝります。スルと敵との間隔によりて狙ひを定



お話を横道にそれて御怠屈痛み入りましたが。扱て強行偵察笑  
 田、名倉の二個小隊五十有餘の勇士の面々は、「散開」「散れ」  
 の號令に、バラ／＼と伏姿に變じ、宛然水をうったる其如く  
 勇氣は面にあらはれて、靜かに待ち構へたる其態は、平素の練兵  
 に異ならず、やがて「連發射撃」の命令に、待ち構へたる勇士  
 等の、得たりや應と撃ち出せば、敵もサル者先途と戦ひ、互ひに  
 射交はす彈丸は、宛然煙の飛ぶかごとく銃聲は山野になり響きて  
 物凄しくも物凄し、之れぞ日露陸戰の序幕でゐる。  
 斯くて味方の強行偵察隊は、一生懸命ボン／＼と撃ち出して、  
 少しでも敵の銃火が衰へた時は、直ちに前進突撃せんと待ち構へ  
 て居られまするも、ナカ／＼ソンの騒ぎではなく。敵は頗る優勢  
 らしう、夫れ計りか格好な地物を利用して居る上に、高地からの狙  
 ひ撃ち、味方は之れに反して唯平地に伏姿を仕て居られまするの  
 で、戦は如何しても有利ではなういませぬ。此時切りに配下を督勵

しッ、奮戦して居られた沼倉伍長は、「小隊長殿、小隊長殿」と名  
 倉少尉を呼びかけて。「敵は大分優勢の如うにゐますが、何百位  
 ひ居りませうかねえ」と、四方を憚り戦争最中ながら極々の小聲  
 に話しかけられますると、名倉少尉は之れに答へて、「左様だ、敵  
 の射撃はすい分激しい、夫れも時々刻々に猛烈となりて、今は始  
 めの二倍位ひは増して居ると思はるゝが、シテ見ると敵は頗る優  
 勢だ。ドウしても三百騎より下らぬと思ふが、沼倉伍長、貴様の  
 考へはドウシや。」左様でゐます、私も三百内外と見當を立て  
 居る處です。「夫れに味方は二個小隊足らず(約五十騎)加ふ  
 るに地勢は甚しく不利と來て居るから、己れは先刻から心配して  
 るのじゃ、沼倉伍長、何とか今の間で作戦をせねば、愚圖々々し  
 てる辛い目に逢はされるか知れんぞ……。」と、御兩人は切りに  
 心配して、他の者には聞へぬ如う小聲で話を仕て居られますると  
 十間計り隔てゝガクリとツツ伏した一人の兵がある、名倉少尉は



ヤラれたなあと思つて見て居られますと、其中にソロ／＼動き始めたから四間計りの所で切りに射撃を仕て居た一人の卒が、バツタリ倒れた限りムンジリ動きも致しませぬ、今度こそは戦死だなあと思つて居られます途端、隣りに伏して居た戦友が、「小隊長殿、矢作二等卒は頭部を撃たれ戦死でムいます」と叫び立てましたので名倉少尉始めて部下を殺し、胸中宛然張り裂く思ひではムいます。が、此際士氣に影響する事ですから一段と聲張りあげ、「貴様は何を憚てるのか、馬鹿野郎、軍人が戦場で討死をするのは本望じやないか、矢作爲作は實に名譽の戦死の一番乗りだ」と叫ばれましたので、成程尤もな小隊長殿のお言葉と、士氣は一入に奮ひ起つたと申す事でムいます。

有繁は名倉小隊長、表面では叱り飛ばして全隊の士氣を鼓舞し乍らも、心の中には時々刻々形勢が悪しくなる計りですから切り

に心配をされ、コリヤ愚圖々々仕て居る場合ではない、今の間に如何にか計畫を仕て置かねば、取り返へしのつかぬ如うに相成るぞと、不圖傍へを御覽になると平素物事に機敏な性質の續保と云ふ一等卒が、切りにボン／＼やツて居り升ので、此奴屈竟と名倉少尉は「續！」と叫びかけられ、「貴様は之れから傳令に行つて来い」と申され升と、續一等卒はオトシもつけず。「傳令に行くのは宜しふムいます、コンな激戦最中後方に下りましたら直ぐに撃ち殺されますが夫れでも宜しければ行きませう。」馬鹿！。生きる死ぬるは時の運だ、又た戦場で軍人が死ぬるのは當然だ、名譽じやないか……。」

「勿論戦死は名譽です、私も出征當令の任務が……。」

「コンな急場に臨み乍ら、ツマらぬ小理屈を併ぶる者ではない。早く行け、く。」

名倉少尉も此奴頗る落ちついた希氣の奴じやなあと、心中では感心し乍ら、「第三中隊長朝永大



居たから、後續部隊を引率して、ひき續き出發する、事に決定して  
會するに相違ないと思ふ、兎に角出ツくわす迄馬を飛ばし、其上  
で敵は三百以上と認むるに味方は二小隊足らず、苦戦の有様故  
急に援兵願ふと、己が云ふたと報告せよ………。叮嚀に命令致され  
ますると「承知致しました、夫れでは直ぐと成るべく撃たれぬ用  
心して行つて参りませう」と、雨、敵と飛び來る戦線に、伏姿か  
らしてスツクと佇立ち上りたる續一等卒、なか／＼にお元氣な事  
でふい升。  
之れからして名倉、箕田の強行偵察隊は愈々苦戦に陥りて、今  
にも優勢の敵の爲めに包圍全滅せらるゝかと云ふ大激戦のマツ最  
中、恰も好し續一等卒の傳令に、朝永大尉殿は配下なる二個小隊  
半計りの騎兵を引率して驅けつけられ、大尉が激戦最中にも關は  
らす、スノソ／＼と煙草を吐かし乍ら號令叱咤致さるゝと云ふ壯

快な物語り、又た小隊長加納中尉殿がマツ先きに立ちて奮闘中、  
不幸敵弾飛來して頭部に命中し、天晴れ名譽の戦死を遊ばすと云  
ふ悲壯なるお話、更に回をかへてお伺ひ申上ぐる事に致しま  
する。

第 三 回

敵と甚しく接近し双方伏射で激戦のマツ最中、獨り立ち上りて  
後方に下ると云ふは實に決死の仕事で、射撃も標的が大きくなり  
計りの間に一人起ち上りますと、射撃も標的が大きくなり、死を省みず  
りか、傳令か何か極めて重大な任務故へでない、死を省みず激  
戦最中戦線を下ると云ふとは、道理上あるべき理由のもので、  
いませぬから、ンな場合敵の方では寄つてたかつて狙撃を試み  
面白半分是非とも撃ち倒さうと致しますので、續一等卒が名倉少



尉の命令を聞くに直ぐ、オトシもつけず「死んでも宜ういいますか」と云はれましたのも尤も至極。十人の七八人迄は戦死か負傷かに定まつて居るものなさうです。

「こんな急場の時小理屈ごころの騒ぎじやない、早く行け、行け」と云ふ小隊長の命令。「承知致しました」と云ふ答へと共に續一等卒は猛然つツ起ち上がり、二歩三歩後方に向ひ戦線を下らんとせられますると、案の如く同一等卒を目標として撃ち出す銃丸は實に非常なもの、アス／＼と左右前後に落ちて土砂をウチ上げ居りますので、名倉少尉は氣にかゝつてならず。此奴あ危ひものだからあさふり願へりて居られますと、有繁は續一等卒でムいまする一息いるゝや疾風の如く駆け出されたが、敵は益々焦慮つて筒口揃へ、續氏を標的として撃ち出しましたから堪りません、實に雨霰の如くでありますが、運の好い時は不思議な位ぬ、續氏はトウ其弾雨の中を美事に駆けぬけるや、遙かの後方危険でない所

ろに一同の馬を集めてありますので。一等卒は直ぐと其場に駆けつけ自身の愛馬をひき出し、ヒラリと跨り拍車を入れるれば、駒はモト來し南を指して、一目散に走せいだし、鞍上人なく鞍下馬なき有様、實に勇しさの極みなる。

扱て加瀬騎兵隊の第三中隊長朝永大尉殿には、箕田名倉少尉の強行偵察隊が平壤城を出立に相成りたる其日の正午過ぎにマサかの時を慮かり後継部隊として配下の一個中隊を引寄せられ一同勇みに勇みて北進の途に就かれましたが此日は早や定州城を去る四里餘り五里足らずの所まで進んで居られ、朝永大尉は左右を顧みて、「名倉、箕田の斥候隊は敵と衝突した如うな模様もないが、露助奴、要害堅固の定州城迄放棄し、風を喰らつて退却しやがったか知らん……。」と、四方八方の話をもされつゝ徐ろに駒を進めて居られますと、圖らずも遙かの前方定州城の方角にあたつて、バラ／＼と宛然豆を煎る如うな小銃火の音が、風に



に送られ聞え始めて参りました、大尉はハツと思つて俄に時計と  
り出し見られますと、針は將に今正十一時を指んとし、前方銃火  
の響きは益々激しくなつて参ります計りで朝永大尉は馬上ながら  
暫時は耳を傾けて居られました、傍へに進んで居られたる配下  
の小隊長加納中尉殿を呼びかけて、「加納君、強行偵察隊は愈々敵  
とブツつかつて居るよ、聞いて見玉へ、あの銃聲では敵は餘程優  
勢らしいじやないか。」左様でムい升、私も直ぐ夫れを考へまし  
たが、ドウもあの銃聲では敵味方合して三百を下る如うな事はあ  
りませんよ。」然うだ、シテ見ると味方は餘程苦戦に陥りてるに  
相違ない。戦場は近いぞ、兎に角一驅けに驅けつけやう……。  
足！」と大尉は一聲高く叫ばれますと、配下三人の小隊長は直  
ぐと又た夫れく部下に傳えられ、一隊揉みに揉みて宛然疾風の  
如く戦場指して驅けられます。

朝永大尉の一族は二里餘りも一生懸命に驅けられました、前

方の銃火は時々刻々激しくなり参ります計りです、大尉殿心は心  
でムいませぬ。遂には自身がマッ先きに立ち馬を飛ばして居られ  
ますと、遙かの行手より汗馬に鞭をあげつゝ空を飛んで走せ来た  
る一人の日本騎兵が居ります。「夫れ、傳令がヤツて来た。」と云  
つて居らるゝ間に件の傳令はチャツと朝永大尉の前に駒を止め、  
姿勢を正して敬禮を致します。之れ取りも直さず名倉少尉が急を  
告ぐる爲めの傳令、即ち騎兵一等卒續保氏でムいました。同一等  
卒は敬禮し終るや、

「騎兵小隊長名倉少尉殿より中隊長殿への傳令。」  
と前置きして。

「我騎兵二個小隊は定州前面の敵に向つて戦闘中、敵は次第に  
増加し味方苦戦の情況に陥る、依りて速かに援隊を乞ふ。傳  
令報告終り。」

續一等卒の傳令文言は果して一字一句も違はず、右の通りであ



つたか否かは素より保證出来ませぬが、請援傳令と云へば十中八九迄、普通でしたら前のやうなものでムいいます。之れを聞き終られたる朝永大尉殿には、馬上ながらに打ちうなづき。

「ヨシ、分つた！」

と申されまして、直ぐと後方をふり顧へり、「驅足！」の號令を下されまして、自らマツ先きに立ち愈々戰場に駆けつけられた時が、丁度正午だつたと云ふ事ですが、其時は早や大分の負傷者が後方にさがつて居りましたものゝ、幸ひな事には戦死者とては矢作二等卒の外未だ一人もムいませんでした。ソコで朝永大尉殿は何の猶豫もあればこそ、野山に響く聲張りあげ。

「下馬戦闘！ 伍間増加！」

と云ふ號令をおカケになりました。

話頭一轉、名倉箕田の強行偵察隊は、圖らず敵と衝突し戦闘を開始して見ると、味方に五倍し或は十倍もせんかと思はるゝ優勢

夫れ計りか地の利は敵にありて味方は不利、戦死は矢作二等卒計りであるが負傷者は頻々として、一時間經たぬ間に卅騎餘り四十騎足らずにウチなされて了ひ、非常の大苦戦に陥りて居られます。と敵は早くも見ぬきましたらしく、今にも銃剣突撃を斷行しうです。一隊を併せて戦死をしても、退却したとあつては始めて二個小隊が枕を併せて戦死をしても、退却したとあつては始めての手に合せに加瀬聯隊イヤ日本の騎兵、イヤ日本陸軍の耻辱ぞかし。人は總て死すべき時に死せざれば其死にまさる恥ありとは、ふるき俚諺にもあるものを撃てよ彈丸の盡きる迄生命のあらん限り戦へど、有業は日本男兒でムいます。苦戦難闘頗る努めて居られますと、思つたよりは早く、朝永大尉指揮の下に第三中隊の全部は土煙りをあげて駆けつけ來たり「伍間増加」の指揮命令、即時戦闘線について射撃を開始されましたので、名倉箕田隊の一同は、俄かに勇氣が百倍したと云ふ如うな次第でムいま



斯くて朝永大尉は「伍間増加」の命令で以て、取り敢へず配下  
 一同を戦闘線につけて置き、自身はツクム敵味方の員数から、  
 戦争の大勢を観察して居られました。敵は如何しても其数五百  
 に近かく、連發の急射に面も向けられぬ有様。ヨシ配下の一個中  
 隊全部を参加させても未だ三分の利を獲取し居るのみならず、  
 に據り地物を利用して十分形勝の味方を取り圍まんとするの模  
 りもあり、若し迂回行動を起して小勢の味方を取り圍まんとするの模  
 様あり、若しかソンの事になつた時は、側面より射撃を蒙る模  
 如うになつて、前面の敵と相應じ所謂眞正の十字火を浴せらるゝ  
 事になれば、一時間待たずに全滅の不幸を見るは必定なりと、名  
 倉少尉も御協議の上、戦ひの一伍一什を聯隊長殿に報告し、ナ  
 ラば歩兵の救援を乞ふことに決定せられ、其傳騎として再び撰み出  
 されたるは續一等卒、實に名譽の事であります。尤も加瀬聯隊長

は一個中隊半計りの部下を率ひ、朝永中隊の後續部隊として平壤  
 城を出立に及び、若干の歩兵部隊も引き續き出發、北進の途に上  
 ぼるべく確定し居りましたので、其事を知つて居られた朝永大尉  
 は、加瀬聯隊長は勿論の事、多數の歩兵も必らずや三里とは隔た  
 り居らぬ地點迄北進し居るであらうと推察せられ、續一等卒を傳  
 騎として差し立てになつたので、此定州の役が日露兩國陸軍始  
 めて幾度も申し上げました如く、敵味方に必死となり、コ、を先途と  
 の手合せで、いますので、敵味方に必死となり、コ、を先途と  
 戦はれますので、時々刻々其激しさは増す計りであり、  
 がて卅分餘りも経つたかと思ふと、敵は味方の小勢を見てと、  
 早や後方には續く豫備隊もないと思ひ定めたのでせうか、三百米  
 突の間隔迄一齊に進んで参り、今にも突撃を試みさうな氣配が屢  
 次、ホノ見へます、其中に敵の中央部隊から左翼にかけての射撃  
 が、一層激烈になつたかと思ふと、味方の左翼につひて居た下士



の何某が俄に叫び出しました。「小隊長殿、小隊長殿、敵騎の襲撃が見へまする……。」と、其時左翼を受け持つて居られましたのは他にもあらず、加瀬聯隊中にも名高き勇將の加納中尉、惜しい事はには、此定州の役でトウ、名譽の戦死を遂げられたお方でしたが。此報告をチラリ耳にして、「マサかにソんな事もあるまいよ、が無茶をやるからと云つて、然うまで無謀でもあるまいよ。」と、折敷の姿勢となり、双眼鏡をとり上げて前面を熱視せられます。すると、成程来る事はヤッて来ました。徒歩だ！と云つて居られる間に皆徒歩でふいます。「徒歩だ！徒歩だ！」と云つて居られる間に早や二百米突進接近して参り、切り、「ウラー、ウラー」と十八番の喊聲をあげつゝ、猶ほも前進肉迫して参り升ので、加納中尉は之れを見て、己れ小癡なる敵の振舞哉、目に物見せて呉れんぞと直ちに叱り一奮。

「二齊射撃！」

と號令し、「ネ……、テ……」の懸聲にド、ンと響きは山野に轟き亘りました。がコンな時は如何しても一同氣が逆上切つて居りますので、狙ひは外れ一向に命中致しませず、敵は得たりや賢しと一段の勇氣をふり起し相變はらず「ウラー、ウラー」で益々肉迫し來たり、何時の間にか百五十米突進一寸八十間足らずの所に迄推しかけて來て、早や一人の容貌までが見ゆる如うになりました。たので、評判も高き勇士の加納中尉は愈々慄へ切れず、宛然阿修羅王の怒り立ちたる如く、傍らにありて射撃し居たる久保一等卒に打ち向ひ「何だ、貴様等の撃つ弾丸は一ツも中らぬじやないかドレ、己れに其銃をやッて見ろ。」と、奪ふが如くオツとりて十分に狙ひを定めズドンと一發撃ち放されると、マツ先きに立ちて指揮しつゝ、切りに進撃して居た、將校らしき奴がバツタリ撃ち倒されました。ソコで味方は萬歳を叫びて大喜び、再び士氣は興奮



して参りましたが、敵もサル者其屍体を乗り超へて他の將校が躍り出し、配下を指揮しつゝ進んで参り升ので、「今度は私が……」と、久保一等卒は加納中尉に代りて直ぐと小銃の狙ひを定め、今しキツて發さんとしてる處に、ビューンと呻りをうって飛び来たつた敵の一弾、不幸にも美事久保氏の頭部を貫通致しましたので「残念ッ」の一聲が此世の袂別、天ッ晴れ名譽の戦死でいいます。

部下は目前に戦死する、敵は小嶺にも百五十米突かソコらまで進撃をして参りましたので、加納中尉は憎ッくき敵の振舞かなど烈火の如く怒りて直ぐと再び久保一等卒が形見の小銃とる手も早く、連發をばこめかへに相成り、狙ひ定めて的は眞ッ先に進み來たる將校らしき大の男、トン／＼と續けさまに狙撃されたが、悪運強くも二發ながら中らなかつたものと見え、相變はらす「ッーッー、と叫びては味方の士氣を勵ましたしつゝ、切りと突進

して参りますので、「之れでもか」と加納中尉は更らに第三發目を發されますと、命中！一向に躍進して居りました敵の將校はモンドリウツて仆れます。これを見たる味方の將卒は思はず知らず萬歳を叫びました非常のお喜びにひき代へ、有聲に敵も二人迄續けさまに頼み切りの隊長を撃ち仆されたには避易したものと見へ、パツタリ躍進を止めまして伏姿に移り、同時にバラ／＼と急射撃を致したので、飛び来る矢玉は雨か殿か。「コ、大事の瀬戸際ぞ、勝負のわかるゝのは此一刹那の辛抱比べ、夫れ撃てッ、何故撃たぬか。急射！急射！」と渾身膽かど疑はるゝ加納中尉は配下の士卒を勵ます爲めに、身の危険は十分に知りぬぎ乍らも伏射の間に獨り折敷きの姿勢をとり、聲をからしツ號令をかけて居られますと、不運なる哉敵弾飛ひ來たりて中尉が眉間の只中より、後頭部にかけて貫通致したので、何かは以て堪まるべき、聲をもたてずパツタリ後方に倒られます。



あまりと云へば大膽不敵の振舞、雨殿と飛び来る敵弾の間には宛然敵の目標になる如うなものと、其直ぐ隣りに指揮を仕て居られた名倉少尉は、「加納中尉殿、危険ですよ」と幾回か聲張りあげて、遙かに注意を促して見られたが、激戦の最中其注意も中尉の耳に這入らぬ前早やバツタリ倒れたので、斯くなりては名倉少尉身の危険をも忘れて了ひ、「仕舞った」と一聲高くカッパと跳ね起き、直ぐと中尉の傍に駆け寄りて抱き起し。

「加納中尉、負傷ですか……。」と呼べど一言の返辭だになく、再び耳に口をあて、「加納君、加納中尉」と叫べども、何の答へもあらばこそ、見れば頭部の貫通にて、美事眉間の唯中より、撃ちとらしたる致命の重傷、満身腫かど疑はれし、有繋不敵の加納氏も何時かは三寸息絶へて、名倉少尉に抱れながら、日本陸軍幾千の將校中、先登第一の名譽の戦死、實に勇しの極みとは云へ、身も

戦争も之れよりぞ、花も開けば實に結ぶ、大事の時に戦死とは例令戦場の習ひとは云ひ乍ら、恨みは残る定州城、哀れも深き事どもなり。

第 四 画

扱て前段を受けまして名倉少尉は加納中尉の屍体をかき抱き乍ら暫時茫然と仕て居られました。斯くてあるべき事ならねば、遙かの彼方にありてイト氣配はし氣に熟視め居られた朝永大尉に打ち向ひ、「中隊長殿、残念ながら加納中尉は戦死でいますと、云はれますと、有繋は朝永中隊長、激戦マッ最中隊長の戦死なき部下の兵卒に聞かしては悪ふいますので。」何、戦死じやない、負傷だ、負傷だ、早く後方に運んだが宜ひ。」と命令され、ソコで加納中尉の屍体は難なく後方に運ばれましたが、第一戦争は



苦戦の處に生憎此騒ぎ 如何も全軍の士氣がフリ立ちませぬ。ソ  
 コに持つて来て、彼れ之れしてると今度には彈藥缺乏と云ふ大變が  
 持ちあがつた。『何だ、彈藥缺乏、此激戦最中に彈藥がなくなッ  
 ては、到底後方から運搬すると云ふ譯にも行かぬが、容易ならぬ  
 事ではある哩』と、朝永大尉心密かに心配して居られますと、  
 全軍の士氣は益々沮喪する計りでムいます。  
 この現象を直ぐと看破せられたる朝永中隊長、何か士氣を興奮  
 せしむる如うな好案がありさうなものど、種々考へ廻はして見ら  
 れましたが一尙ムいませぬ。さうだ、ユンな危急の時は一同が己  
 れの顔色計りを伺つてるものだから、自分が先づドツシリ落ちつ  
 き拂つて皆を安心させぬばど、忽ち一計を案じ出して徐ろにポッ  
 ケットを探り、一本の巻莖をとり出し、更らに燐寸をスリて夫れ  
 に火を點け、雨霰と飛び来る敵彈のマツ唯中、戦争は何處にある  
 かと云ふ如うな面色して、バクワ〜と喫つて居られますと、第

一番に氣注いたのは小宮伍長、『戦争は餘程苦戦のやうではある  
 が、中隊長殿を見てみる、平氣な面で眞でも吸つて居られる處を  
 見るとドウせ大丈夫であらう。必らず勝つと云ふ胸算があるに相  
 違ないぞ……』と部下分隊の兵卒等に話したので、一同注意  
 を仕て見ると、成程朝永大尉は平氣の平左にバクワ〜白い煙を  
 吐き出して居られますから、一同も不安心ながら幾分かは落ち  
 つき、大尉の計略美事圖に中りて多少は士氣も興奮致しました。  
 とは云ふもの、朝永大尉、如何に元氣なお方であつても多數の  
 部下を引率し、今にも大苦戦に陥らうかと云ふ大事の場合、馬鹿  
 ではなし無神経ではなし、頭腦の中に種々の新作戦計畫にかき  
 添され、一本の巻莖何時の間にか喫みつくして、果ては吸口計り  
 煙りもあがらぬのには些しも氣注かず、依然スバリ〜とやツて  
 居られますのを、今度には増淵軍曹が逸早くも見出しまして、  
 『中隊長殿、煙草はコンな忙はしい時でも甘うムいませぬ』かと、皮



肉な質問を持ちかけます。大尉はソんな事とは心もつかず、「オ、甘いよ、幾許前面の敵が優勢であつても、今に味方の後継部隊が現はれて来て、ヒト蹴散らしに蹴散して了ふかと思へば、敵が優勢である丈け夫れ丈け愉快が多いと云ふもの、自然煙草迄が平常の二倍も三倍もの味がある哩……。」オトシもつけず朝永大尉、負けぬ口を利かれます。増淵軍曹心中可笑しく、「大尉殿、チモ貴官の煙草には火はついて居りませんよ、夫れでも矢張り甘いのですが……。」美事お面にウチこまれ乍らも、大尉は一向に平爲なもの、「左様だ、火がついて居ない事は吸つても煙も来ぬからチャンと知つてる。處が己れは大の煙草好きで、吸ふと云ふ方より寧ろ喰ふと云つて差し支へない位だから、此通り吸口丈けシヤブツて居てもヤツ張り甘いのジャ。ソんな事が貴様達にわかるものか……。」ドコ……迄も強情なるに、果ては兩人の此問答をジツと傍へ聞きして居た兵卒等も、愈々堪まりかねてワツ

と一時に笑ひ與じ、爲めに全軍の士氣も幾分か立ち直つたと云ふ次第。斯る苦戦のマツ最中でも、コンな滑稽なお話があると云ふのは、有繁に日本軍隊、實に餘裕のある結構な事でムいませぬ。味方の左翼に對して敵右翼の一部が突撃を爲さんと試み、健氣にも百五十米突計りの近距離迄一時は躍進して参りましたが、加納中尉が天晴れなる働さ振りに、前段申上げましたる如く、マツ有繁に立ちたる敵の將校二人迄も續けさまに射付されやしたので「ヨシ、加納中尉が負傷を仕たら其跡埋めには此幸村がなつてやるから安神せよ……。」と、後方からノサノサ進み出で来られ一生懸命配下を指揮しつゝ、奮はぬ士氣を鼓舞して居られます。と、一息吐いて居た敵も、再び急射を始めて無茶撃ちに撃ちます。其の一弾が、幸村中尉の足部を貫通しましたので、小隊長殿、御負して後方に倒れられる。ソを見たる沼倉伍長は、「小隊長殿、御負



傷のやうでムいすが、私が綱帯を仕て上げませう……と云ひ  
 半して直ちに駆け寄り、準備の綱帯とり出し漸くまきかけた時  
 不幸にも敵弾胸部を貫通して召倉伍長はバツタリ其儘戦死でムい  
 ます。夫れや之れやで彼方此方に、將校を始め下士卒にも大分  
 の戦死傷者が出来て来て、我軍は愈々益々苦戦の状態に陥る計り  
 なのに、有繋は敵も此模様を見てとりましたものか、やゝもす  
 れば優勢を頼みて、左右の翼を推し擴げ、今にも包圍攻撃の態度  
 を執らうとする素振りが見へますので、朝永大尉胸中では一方  
 ならぬ御苦心でムいします。  
 話頭一轉、朝永中隊は優勢の敵に對し苦戦願する努めて居られま  
 する間に、前段お話致しましたる如く、續一等辛は二度目の傳騎  
 を仰せつかり、本隊の加瀬中佐殿に一時も早く援兵をとの傳騎を  
 帯びまして、再び駒の足掻きを早め、宛然強を放れし飛箭の如く  
 南を指して駆けつけられますると。尤も此時加瀬中佐は配下の聯隊を

引率し、ひき續き平壤城を出立に相なり、既に途中迄来て居られ  
 ましたので、前同然戰場から四里餘り隔てた所では、早や豆を  
 煎るが如き小銃火の音が聞へる。「ソリや朝永中隊は早や戦争を開  
 始して居るぞ、進め、駒足！」と云ふ中佐の號令に、一隊は負け  
 じ劣らじと拍車を入れ鞭を加へ、揉みに揉んで駆けりて居られま  
 する。遙かの前面切りと鞭をあけて、一目散に馳せつけて来た  
 のが即ち朝永大尉の傳騎たる續一等辛、やがては駒を止めて馬上  
 「騎兵中隊長殿より、騎兵聯隊長殿への勅令」。  
 と前置きして、定州城の戦ひ味方苦戦に陥りしより、急ぎ援兵を  
 乞ふの一條は前段お話し致しましたのと略ぼ同一の意味合ひでム  
 います。『ヨシ、分つた』と加瀬中佐は即時配下の聯隊に命令し  
 て、全速の駒足に戰場指して進まれますが、騎兵聯隊は三個中隊を  
 置きますのは、我國の陸軍の御制度では、騎兵聯隊は三個中隊を



以て編成せられ、其一個中隊が員數を云へば僅に九十騎餘り、だから一個聯隊と申しても漸く三百騎には充てぬ御人數でございました、既に其中から朝永大尉の一個中隊は先發として戦争マツ最中残り、の二個中隊の中から更に一個中隊半計りは、別に勢をわけ、淺田旅團に隨屬せしめ、即ち加瀬中佐は黒川大尉の配下一個中隊にもつて来て、外の一個小隊半計りの手勢を引率し、驅けつて居られれますので、其勢力から申しますと百三十騎餘り、實に僅かな御手勢なので、夫れで以てドン／＼驅けつけて來られまして、前申上げた如く味方惡戦に陥る計り、有繁の朝永大尉も如何はせんと思案投首の体、況んや下士以下になると長時間の激戦に彈藥は缺乏を告げて來た、少からの戰友はアチコチにバタリ／＼と死傷の爲めに倒れると云ふ危急の場合、ふり起した勇氣も自然挫け勝ちの處に、恰も好し新手の精兵一百餘騎、而も聯隊長加瀬中佐の指揮の下、塵埃を蹴立て、到着致しましたから、取

りも直さず大早に雲霓を望む否な急雨を得たる心地して、思はず知らず一度にドツと鯨波をつくられましたので、扱てこそ本隊が愈々ヤツて來たなと思ひましたらしく、敵も躊躇して氣を呑まれ一時射撃も緩漫と相成りました。氣は張弓の加瀬聯隊、一百有餘の勇士連味方の苦戦を見聞さして、扱ては加瀬中尉を始めとし、沼倉伍長以下數十名、天皇陛下と御國の爲め、身を亡き者としたる忠死者の、吊合戦イザ之れよりぞと、始めて敵と相對しては、勇氣日頃に百千倍し、宛然燃へ立つ氣配にて。

「下馬戦闘！ 延進増加！」

と、一聲鋭く叫ばるゝ、加瀬中佐の號令に、待兼ねましたとバラ／＼と、馬の脊中を下るや否や、合して茲に二個中隊半、生を鴻毛の輕さに比したる、二百の勇士一線となり、戦闘配置に就かれたる。其敏捷さは電光の比喩、石火も斯る事をやと、實に勇



しさの極みなる。戦機愈々熟してイザ之れからだと中隊長黒川大尉は、同じく下馬ノソリと戦線に進んで居られますと、後ろの方から加瀬聯隊長殿が「ねえ黒川大尉、黒川君」と呼びかけられ、「アノ華族さん達は如何した？」と問はれました。夫れは外でもムいませぬ、黒川大尉の部下に小隊長として南部中尉(伯爵)長岡少尉(男爵)の御兩人が居られますので、黒川中隊の事を他の隊では華族中隊と稱へて居へ升位を、だから加瀬中佐にはサア之れからが激戦と云ふ場合、俄かに華胄の御身の上なる兩小隊長の事を心もとなく思ばされ、黒川大尉に御聞きになつた次第でムいますが大尉は直ぐと後振りかへり、「左様です。實は私も兩人の御身を氣遣ひ若し萬一御兩人の中の一人在が不幸御戦死なさる如うの事ありても、他の者とは些しく事情が違つて居り升ので實は困まると考へ、如何かして旅團か師團かに残したきものと其事をお話すると、健氣に

も御兩人ながら大の御不平。ヨシ多少生れが違つて居ると云つて決して布團見計りではない、自分達二人が伯爵とか男爵とか華族の端くれに列して居るからして明日が日にも戦争が出来る云ふ瀬戸際に、居残りせよなどと甚だ以て情けない御相談、若し命令でもつてタツてどの事なれば、本國の一家一門には勿論の事、舊臣一統に對しても合はす面目なきに依り、一層の事何卒唯今からして、自由な御願ひではあるが送り歸へして頂きたいものと、御兩人とも熱心な面にあらはしての議論に、私も何と申し上げる言葉なくお連れ致す事にしましたので、アレ、あの通り後方からツマひて来られました。……と、黒川大尉が話を仕て居られます中に南部中尉と長岡少尉の兩華族には、ヒラリ乗馬より飛び下られてノコノコ戦列に加はれました。一時緩慢であつた敵の射撃も、此時又もや激しさを加へ、射交はす彈丸は雨霰、あるは趕の飛ぶにも似て、前後左右にバツ



と砂埃をうち上げ、普通の家に生ひたつたる將卒の多数でさへ、あまり好い心地もせぬ激戦最中、感心な事には御兩人、華族だからと云つて部下も他の將校達も、一層自分達の進退行動に注意して居るに相違ないから、夢戦止んだ其後で、寸分でも非難を受くやうの事ありてはならぬと云ふ、何となしに御邪氣が胸一杯にありますので、御兩人は平氣の平左最前線にありて部下の下士卒を指揮されつゝ。

「聯隊長殿、一體戦争と云ふは之な位な位なものであり升か……」

實に華胄の御身と生れ玉ひしに似もやらぬ目ざましき御働き、加瀬中佐も黒川大尉もいと、御身の上を氣遣はれ、此接戦に立ち居られては危険であり升からと、交はるゝ幾度か注意して見ても一向に平氣の御模様。

「ドウせ戦闘だから危険な事は勿論、畏くも 天皇陛下につくし奉る上からも、生命と云ふ點から云つて見ても華族と平民とに

聊か差別もない譯のものなれば、自分共二人をとり隔てし氣遣はれては迷惑千萬。日露陸戦の手始めに、自分等兩人の中一人が若し萬一名譽の負傷か戦死でも仕たら、夫れこそ士氣は一段と奮ふであらうと思ひますから、兎にも角にも止めだてせずと私共二人に任かして置いて下されよ……」

夫れこそ熱心こめたる御兩人の御言葉に、加瀬中佐も黒川大尉も共に大感服。コンなお方々があつてこそ、華族は確かに皇室の藩屏たる名に負かぬ譯のもの、尊き華族の御身ですら、斯る健氣の御覺悟、斯る勇しき御働きであるから、況んや其下に立つ普通將卒に於てをや。此戦争は愈々勝ちだ、否や今回の日露戦争も十年前の日清戦争同然、我國の大勝利で業出度終局するに相違ないぞあゝ有難き事ではある……」と、加瀬聯隊長、黒川大尉の兩人は激戦最中にも話をなされ喜び餘りてはホロ／＼と趙涙を溢ばされたと云ふ事でありませう。



第 五 回

身は名門華胄の家に生まれ、戦争は日露陸戦の手始めなるに、此  
 時此場に奮闘し、不幸敵弾にふれて名譽の戦死、よしや異域の土  
 となる迄も、若しか遅れをとりて、戦友一同に後指さるゝやう  
 の事ありては、槍一本の力で美事一國一城の主人となり、英名を  
 唄はれ玉ひし祖先の威靈、まつた何十萬と數多き奮臣輩に對して  
 も、會はず面目あるべきぞ。死すべき時に死せざれば、死に優る  
 耻ありとは、古人の金言偽りならず、イテや戦友將士の龜鑑と唄  
 はるゝまで、殊死奮闘なさんづものと。南部中尉に長岡少尉の兩  
 公主は、互ひに勵まし勵まされつ、前段申上げたる如くなかく  
 の御奮闘でございましたが、別けて長岡公主の如きは、戦場の第一  
 線に立ち走られて、部下の下士卒を指揮督勵され、宛然鬼神のあ

らるゝが如く、雨と飛び來る敵弾の間に奮戦して居られます御模  
 様を、遙かに見てとられたる加瀬聯隊長殿には、長岡公主の脊丈  
 けが高く、一層目立ちて居るのを氣づかはれて、傍への黒川大尉  
 をふり顧へり。「オイ黒川君、長岡少尉は第一線でノソリノとあ  
 り無難作にやつて居られては、眞箇に危険だ。如何に戦場の習ひ  
 とは云へ、若し萬一の事ありては相互が困まるから、如何だ、今  
 少し整飛せらるゝ如う君から御注意しては……。」と申されますと  
 黒川大尉も依然左様考へて居らるゝ矢先きでありましたから。「承  
 知致しました、答へて即時スタ〜と、長岡公主の傍邊まで進ま  
 れまする。  
 此黒川大尉と云ふお方は肥後國山鹿在の出生で、長岡少尉殿  
 爵ではあるが、實は五十四萬石の肥後藩主、細川侯爵家の嫡々に  
 生をうけられ玉ひし公達。御家系の都合上叔父御の長岡男爵家に  
 養子の身分となつては居らるゝものゝ、黒川大尉とは取りも直さ



す昔からして因縁淺からぬ主従の關係もムいませうので、大尉は一  
 層に公主の御身の上を氣遣つて居らるゝ矢先、聯隊長から特別  
 の注意があつたので、直ぐと一線なる長岡少尉殿の傍まで飛び  
 つけ、抑る急場となつては官位の事何かは勿論忘れて了ひ、依然  
 昔の主従關係同然、黒川大尉は一生懸命セキ切つて、護全様  
 お危なふムい升。コンな接戦の折柄、公達のやうに全身を暴露し  
 居られては危険此上ない事です。せめてもに伏姿の儘で御指揮を  
 ……、伏姿！伏姿！と申されます。感心なは長岡少尉殿で  
 す。ふり願へりて莞爾と打ち笑み。「中隊長殿、お氣遣ひ下さるな  
 よ。コンなに敵弾は飛んで居りますが、たゞのカスリ疵も蒙りま  
 せぬのは寧ろ不思議な位です。此實際から推してみると、餘程  
 武運に拙き者でなくては、望んでも名譽の戦死などする事は出来  
 升まい。兎に角今日は日露陸軍始めての手合せ、此戦争に勝つ  
 と負けるのは、今後味方の士氣は勿論の事、我同胞全体の英氣を

挫く事は非常なものと、小癩の申分ながら私は確信し居りますか  
 ら、大尉殿にはドウか私の身の上を氣遣はずに、思ふまゝ働かさ  
 して下さる如う。若し萬一名譽の負傷か戦死でも致しましたら、  
 心好く退却も仕ませうし、又た君の御爲め國の爲め笑つて永眠の  
 床にも就きませうが、何せろ夫迄の處は思ふ存分戦争さして下さ  
 れよ、不肖ながら數年軍隊の教育も受け、小隊長と云ふ重任も授  
 かつて居る以上は……、サア黒川大尉。一緒に奮闘して敵兵を撃  
 退仕やうではないか。と夫れは、お元氣な申状に、大尉は勿論  
 附近に展開し居た下士卒一同は、長岡男爵の此勇しき言葉に勵ま  
 され、全隊の士氣は一層に奮つたさうにムい升。  
 折柄此時が激戦のマツ最中、敵は前面の高地から計りでなく、  
 後方の城壁に據つてる奴も盛んに急射撃を開始し、其射撃に依り  
 兵數を推算して見ると、ドンなに少く見積りても八百名を下ら  
 ざるべく、夫れ計りか前段にお話致しました如く、全極戦争の仕



よい高地に據りて見下げ撃ちにボン／＼とやツて居りますし、味方は五分一か四分一かの小人数なる上、何一ツ利用すべき地物とてもなき開闊地にあり、戦争を仕て居られますので、其苦戦は到底言葉にはつくされませんが。左様なると黒川大尉も一生懸命です、長岡男爵とは僅に三尺餘りを隔てたる後方に佇立ち乍ら、同少尉の助けに依りて配下一同を督勵し、所謂勵聲疾呼しつゝ奮戦して居られます。ヒュツと厭な唸りを發して飛び來たつた敵弾が、端なくも大尉の右手を貫通し名譽の負傷を蒙けられました。が、其敵弾は最初大尉の前面に居られた長岡少尉殿が右手の手袋を貫通し、其小指に若干の擦過傷を與へ、取りも直さず一彈二將を傷つけたのでした。其間に清末特務曹長は戦死、増淵軍曹、小宮伍長は負傷をせられ、又た兵卒側では里井、馬場、山下、金輪、沖野、近藤、初澤、倉島等の勇士を始め、約廿有餘の死傷者を出したのでした。

加瀬聯隊とは云ひ乍らモト／＼二個中隊と一個小隊半計りから編成せられた小人数に以て來て、戦争の始めから云ふと一時間餘りの悪戦健闘に、加瀬中尉以下清末特務曹長等十名近くの戦死、黒川大尉以下長岡少尉等之れ又廿名近くの負傷に、死傷合すれば卅名に垂んとし、幾分かは士氣も鈍れて來た計りか、敵と比較すると五分一にも六分一にも少数となつて了ひましたので、有繁に敵も機を看ると早く、暫時の後射撃が少しく緩漫になつたかと思つてると、豈圖らんや己が優勢なるを利用して左右の翼を推し擴げ、何時とはなしに包圍の態をとりましたので、加瀬聯隊長を始め三四の將校方は、炯眼逸早くも「此奴あ失敗つた……」。と心配して居られます。矢先、果敢、暫時経つと前面と左右兩翼の敵軍は俄かに急襲の如き激しき射撃を浴せかけ、小勢の我軍を射すくめて置いて、其内の一部隊は健氣にも例のウラーを聲高に叫びつゝ、白兵戦を交へて愈々最後の勝敗を決する心算でも



あるのか、將校をマツ先きに立て銃剣突撃に移りて参りました。之れを見て取られました。加瀬聯隊長には、「勝敗の決、名譽と不名譽と較ぶるゝは此一刹那にあるぞ。撃て！撃て！照尺は三百米突、銃身熱して火の如うになる迄、兎に角撃てよ、急射撃！連發射撃！若し考へ違へして負傷でも何でもなきに、臆病風に誘はれて退却する如うな奴が半人でもあつた時は、俺がコゝに待ちは受け斬り殺して了ふから左様思へ、日本男兒が大和魂の見せ時は即ち今であるぞ、進んでも全滅、退いても全滅だから、奪る進んで思ひ／＼好き相手とひき組み、刺し違へて天ツ晴れ名譽の戦死を遂げ、天皇陛下の御爲めに立ち千載の後ち迄も靖國神社に靈魂を祭られた方が宜いではないか。サア一同氣をオチつけて一斉射撃ッ！と恰も悪鬼のあらるゝが如く加瀬中佐は全隊を敵舞臺に勵し、僅に二百卅米突の照尺にて今し躍進を試みつゝある敵の部隊に對し、三回迄連続したる一斉射撃を送られました。何分

露助の事とて六尺大の標的は大きいし、距離は百間少しの所迄接近し居りましたので、俗に所謂將校倒し見る／＼バタ／＼と打ち仆され、大りの奴輩に負傷者は勿論戦友の死屍迄も運ぶやら何やら、見るも愉快なる大ゴタをつき乍ら呆々の体に退却致しました。さうです。夫れから十分餘りは敵も有繋にこり／＼致しましたものか。漫なる射撃を爲して居りますので、味方も亦た何よりの幸ひ、眞の僅かの時間以後方からして彈藥の補充もつけ、漸くに一息吐きて露助奴今にも再び小癪極まる振舞を爲したる時は、今回こそ美事に全滅さして呉れんづものぞ、ソコが我日の本軍隊で上い升、若しか他國の軍兵に致したならば、斯く迄も長時間の徒歩戦に疲れ切つて居る鼻頭を、優勢の敵の爲めに銃剣突撃を受くる如うの事がありましたら、一も二もなく總崩れの退却と云ふ事になりませうが、皇國の將士は有繋に大譯違ひ、怖ぢず臆せず落ちつ



き拂つたる三回の一斉射撃に、物の美事大優勢の突撃隊を御撃退  
 になりました計りか、一息入れて己れ今一度来て見よと云ふ、其  
 不敵サは實に威服の外は無いませぬ。  
 處が敵もナル者、第一回の銃剣突撃に美事失敗して少からぬ損  
 害を蒙りながら、徳性もなく味方の優勢を頼みとして再び第二回  
 の突撃を試みました。夫れも其筈です、幾度も申上げました如  
 く何せ此定州城の戦闘は、日露兩國が陸上に於ける始めての手  
 合せで、いいますから、我軍がヨシ全滅の不幸を見るまでも一寸一  
 分退却せず、イヤ亡霊計りでも目前の定州城を乗りとらずに置く  
 ものかと云ふ決心がムいす如く、敵は又たコ、北韓軍の前衛集  
 中地。若し此定州城の要害を日本軍に明け渡す時は、夫れこそ  
 ゆゝしき一大事。さし當り鴨綠江以南の韓國領土内には然るべき  
 足どまりもないと云ふので、即チ八百有餘の哥薩兒騎兵が一生懸  
 命の大奮闘、こゝに第二回の銃剣突撃を企てましたのも無理から

ぬお話で。例の如く後方から一斉の急射撃を加瀬聯隊の頭上にあ  
 びせかけ、ウラーの喊聲山野を響かして、二百名近き哥薩克  
 が勿論徒歩の儘潮の如く躍進して参りました。尤も我軍でも斯く  
 あるべしとはかねて期したる事なれば、思ふ存分敵軍をひきつけ  
 三百米突の地點まで来た處で、一斉の急射撃をドドン／＼と御見  
 舞ひ致されたので、何かは以て堪まるべき敵は櫛の齒をかきた  
 る如く、多数の死傷者を出してアチコチにボロリ／＼と打ち下れ  
 る。サリ乍ら敵も今回の突撃は最後の決心で参つたものと見え、  
 指揮官らしき三四の將校等は、雨と注ぐ我軍の彈丸のま中に佇立  
 ちて少しも臆せず、切り配下の士卒を勵まし立てば、又もや一  
 躍進五十米突計り進撃して参りましたが、我が將卒は愈々心を  
 ちつけ、之れでもか之れでもかと連続したる一斉射撃、距離は極  
 めて接近して居ります事故、何かは以て堪まるべき、バタリ／＼  
 と打ち倒るゝ敵の損害は實に面白ひ位わ、有繫頑強なる哥薩克も



之れには避易したものと見へまして、又もや列を棄し後方に退却  
 之れで接戦互ひに白刃を交ゆると迄は行かず、敵は多数の死傷者  
 を出しながら遂に突撃の目的を達すると能はずして、幸ひにも戦  
 争は一段落、暫時小休み双方一息吐く事となりました。  
 斯くて敵は此二回の突撃に失敗して勢からぬ損傷を蒙り、確か  
 に士氣も一頓挫致したには相違ふいませんが、夫れに比較すると  
 一割にも當らぬとして味方にも多少の新死傷者を出し、加るに一  
 時間廿分以上と云ふ殆んど歐米各國の戦争にも殆んど前例なき長  
 時間騎兵徒歩戦に、我軍如何に強しと雖も身は金鐵にあらざれ  
 ば一般に大分と疲れ氣も見へて参りましたし、加ふるに彈藥の補  
 給が如何しても不十分でムいますから、早くも此氣勢を見てとら  
 れたる加瀬中佐殿には、コリヤ斯ふして居るべき場合ならずと。  
 愈々最後の決心を爲して遙か彼方の聯隊旗手を招き寄せ、懇々と  
 最後の時の手段を御訓令に相成りまする。

「敵は要害堅固の城壁と形勝の高地に據り、而も其兵數は味方に  
 三倍し四倍し居る事なれば、士氣はなかく、に旺盛にして、既  
 に之れ迄三回も四回も銃劍突撃を企てた位。之れに反し味方  
 は開闢地に暴露し、加ふるに差し當り續く増援兵とでもないか  
 ら、戦闘力は時々刻々に減少する計りか、實は彈藥の補給も不  
 十分であるから、今一回最後の突撃を蒙くる事になつた場合  
 從來の如く之れを撃退して美事勝利をしむると云ふ事は、到底  
 望んでも協はぬ話である、夫れと云ふて今更ら退却を始めた  
 敵は勢ひに乗じての追撃に、味方の全滅は之れまた疑ひなしで  
 あれば、加瀬聯隊が最後の血の一滴でも流るゝ迄は、に踏み  
 止まり、激戦奮闘すべきは勿論であるが、扱て左様なつた場合  
 の第一の要務と云へば、取りも直さず神聖なる聯隊旗の始末に  
 や、左様な、優勢の敵は、コ、廿川分間、一息入れて十分に氣勢  
 を恢復したらば、此度こそ猛烈なる最後の突撃を開始するに



相違ないから、若し味方にして敵の躍進を防ぎ止むることが出来ず、二百米突以内の線に進入したと見たら、申す迄もなく、どんな事情があつても敵手に委する事のならぬ神聖の聯隊旗、俺が一同を指揮して防戦し居る間に、貴様は手早く聯隊旗を焼きつくして、了はねばならぬぞ。ヨイか、辨かつたか、若し萬一手配が狂つて聯隊旗を敵手に渡すやうの事がありては、決して俺計りではない、加瀬聯隊に属する將士一同の家族は、到底世間に面出し出来まいぞ、敵は今にも最後の突撃を始めるかも知れぬから、貴様達も早く真逆の時の準備をせよ……」

加瀬中佐殿が健氣にも亦た悲痛なる最後の訓令に、聯隊旗手は逐一畏まりて二、三の兵卒に命令を下し、附近の枯草や木の枝をかき集めて、愈々云ふ時は直ちに火を點け聯隊旗を焼きつくし、加瀬騎兵聯隊將卒一人も残りなく、天晴れ名譽の全滅を遂げらるゝ御準備が出来たさうで。

旗手に迄聯隊長の下されたる此最後の訓令は、戦争最中誰れも其内容を知らずとも、いませなかつたと云ふが其附近に戦場配置を仕て居た將卒は、前後の模様で略ぼ夫れ位かの想像をつけ、全隊残りなく最後の決心を定められましたるより、肅として宛然水をうちたるが如く、コ、ぞ日本軍人の勇しき最後を見する時ならんと、互ひ／＼に誓めつ戒められつ、己れ來て見ろ、露助の哥薩克奴、イザと云ふ場合はヒツ組んで三人五人宛は冥途のお供をさし呉れんぞと、手グスネひいて待ち構へ居りますと、敵は前後四回の突撃運動に美事失敗して、多少は兵氣も銷沈したものか、あるは又た最後の大突撃を爲さんと其準備に忙しき爲めか、兩軍三百五十米突計りを隔て、睨らみ合ひの体、従つて銃火も暫し止みの姿となりました、山雨來らんとして風先づ樓に滿つ此最後の血戦如何になり行きますものか、ソは一服して又た次ぎの段に申上ぐる事と致し弁。



第 六 回

話頭一轉、野戦近衛師團歩兵第一聯隊長山田大佐殿には、其配下たる吉原少佐の率ゆる第一大隊の全部を引率し、先づ定州城に向つて前進したる加瀬騎兵聯隊の後継部隊として引き續き平壤城を出發し北進の途に上り、騎兵隊は既に數里の先きを進み居れば、さし當り敵に對して左程注意警戒を要するでもなく、行軍に疲れが來ては勇しく軍歌をも唄ひつれ、ドン／＼前進して時は三月廿九日の午前十一時過ぎには、早や定州城を距る南方三里餘り云ふ某部落に到着なし、之れより北方定州城迄の間にはさし當り部落とてもなし、又た畫餽をつかふ時刻にも迫まりたれば、山田大佐殿には部下一同に命じて畫餽をつかはれつゝあると、端なくも北方定州城の方面にあたりて、ポン／＼と宛然豆を煎るが

如き小銃火の響きが、吹く風に送られて聞へ始めました。ソコで山田大佐は俄かに畫餽の箸を止めて傍への吉原少佐に打ち向はれ、「やあ、前進部隊は悉く敵と衝突したねえ、アノ銃聲に依りて鑑定すると如何しても定州城附近に相違ないと思ふが、果して敵は定州に前衛を出して居つたものと見へ、到底斥候や監視兵位わではなく大分と銃聲が激しいぞ。オヤ、一齊射撃をやつて居るぞ。ウム餘程激しくなつて來たが、アの銃聲で斷定したら吉原少佐君はドレ位の兵數と思ふか」と云ふお尋ねに吉原少佐も暫時耳を傾けて居られますと、實に銃火は時々刻々に其激しさを増す計り。「左様でいます、あの銃聲で判斷を下しますと、敵は到底百や二百の小銃ではいませす、敵味方を合はしめてドウしても千以上ある事は確かであらうと考へまする。」左様だ、僕の考へも矢ッ張り夫れ位は確かだらうと思ふが、左ヲ見ると、我々の隊より先きに進んで居るのは、僅に加瀬中佐



の率ゆる騎兵の二個中隊半計りの少数ではないか、夫れが意外に優勢の敵軍に衝突して苦戦最中に相違ない。吉原少佐、コリや斯ふしては居られない、晝餉どころの安閑な事して居る場合でないぞ、サア直ぐと戦場に駆けつけて見やう……」

と、山田大佐は即時喰ひ半しの晝飯の箸投げすてヒラリと乗馬をひきつけ打ち跨がるよと、無論吉原少佐も御同然、直ぐと乗馬をひき寄せてヒラリと計り打ち乗りて「警急集合！前進」の號令をかけられました、第一中隊長は林田大尉、第二中隊長は大枝大尉、第三中隊長が福田大尉、第四中隊長で齋藤大尉、夫れ號令をかけられますと精兵撰ぐつて八百名、サア行け行かんといふ、前にお話致しました如く、山田中隊長殿すら晝飯は喰ひさしの儘、ヒラリ勇む春駒に打ち乗りて御進發に相成りたる位、まして下士卒の面々には漸つと飯盒の蓋を開らきて、之れから晝餉の

箸をつつけやうと仕て居られた計りの時、間には未だゆつきり構へて背囊から飯盒をとり外しにならないお方もムいしました、警急集合！駒足前進と云ふ事になりましたから夫れ處の騒ぎではななく、半分喰つた、間には未だ一箸もつけぬ飯盒を再び背囊に結びつけ、勇みくッ駆け出されましたので随分と奇談もムいしました、が、其中には佐藤何某と云ふ軍曹の方が居られ、此人は平素が幾許駆けつけても先きは矢張り夕立が降つてるからと云ふ如うな、頗る緩ッくり構へのお方であつて、此時も漸ッと飯盒を背囊から解きはなした計り、未だ蓋をとつて居られなかつたのに銃聲豆を煎るが如く俄かの進發、ト云ふて腹は大分と空いて居て之れでは到底大敵とぶつかつた時、十二分の働きを爲る事が出来ぬと云ふので、大事なく、真逆の時のトツて置きたる一本の饅頭を背囊の中からとり出し、行く行く、其節を咬ち乍ら、「あゝ堅い……、あゝ甘い……、あゝ豪らい……」と調子面白く拍子をととりつゝ一同



と共に駆けりて居られますと、何やら可笑しき掛聲に中隊長福田大尉は氣注がれました。

「誰れた？ 誰れた？ ツマらぬ掛聲を仕て居るのは……」

と云つて、ワザ／＼後歸へりを仕て見られますと、佐藤軍曹が變な面付きをして、節を咬ちり乍ら一生懸命カケ足をして居られますから、行く／＼話を聞かれますと前言上致した通り、同軍曹は糞落着きに落着きて未だ飯盒の蓋もとらぬ時に進軍の命令が来ぬから、夫れと云ふて空腹ではイザ戦争と云ふ場合に十分働く事が出来ぬから、止むを得ずトツて置き、大事な大事な節を咬ちり始め、見て見た處、成程甘い事は甘い、大事な大事な節を咬ちり、こわりて了、眞箇に豪らうムい、辨り、辨りましたので、福田中隊長も大笑ひ。『まあ大それた所、所謂自業自得、誰れを恨むる譯にも行くまい、掛聲を致しましたと、一伍一什が辨りましたので、福田中隊長も大笑ひ。』

が。節と云ふ事は之れより戦争と云ふ場合何よりの縁喜だ。今度の戦闘には第一大隊必らず勝つに相違ない、味方大勝利に間違ひないぞ……と、有繁は福田大尉殿でムい、味方大勝利に間違ひない縁喜をとりて部下一同を勵まし立てに相成り、佐藤軍曹は勿怪の幸ひ、馬鹿口を利いて中隊長から目玉を頂戴すると思ひの外大變に喜び賞られましたので俄に元氣づき、一同が大爆笑ひで、生命のとりやりを始めるので、戦争を爲さねばならぬと云ふのに、中隊長始め下士卒一同コンなに落ち着き拂つて居られると云ふに、有繁に日本の陸軍、速戦速勝たゞの一回も敗をとられぬは益し無し、斯くて吉原少佐の近衛歩兵第一大隊は、山田大佐指揮の下、戦場に、向けて風揺して駆けり居られますと、コンな時は早いもので、います、一時間足らずの間に道の二里餘りも駆けつけられました。



を招きますので、黒川、朝永の兩騎兵大尉と御熟議の上、三度目に出されたる歩兵救援の傳令保と云ふ騎兵一等卒でありました。續一等卒は漸く山田大佐殿及び吉原少佐の第一大隊と運送致しましたから、宛然天へも昇る嬉しき心地馬上ながらも最敬禮を施し先づ。

「騎兵聯隊長加瀬中佐殿より、歩兵聯隊長山田大佐殿への傳令」と先づ口を開らき、山田大佐殿が「ヨシ」と云ふ御返辭ありて後ち更らに

「定州城の敵と戦闘中我騎兵は敵の圍みに陥り全滅せられんとす速かに歩兵の援隊を乞ふ、傳令終り。」

山田大佐殿には勿論味方苦戦の事は十二分御推察に相成り、例令加瀬中佐よりの救援傳令なくとも今し戦場に向け駆けつけ居られまする處で云いますから、何せう御異議のあるべき譯もなく。「ヨシ承知仕た」と即時御返辭あり、續一等卒は直ぐにキリ、と

たが、前面の戦場は彼我兩軍の激戦最中と見へ、連發撃ち方時に或は一齊射撃、間には大浪の寄するが如き突撃の聲迄が不明瞭ながら聞へますので、山田大佐を始め將卒一同早や氣が氣でなく、エイ／＼聲をあげつゝ駆けりて居られますと、遙か前方より始めは豆の如く、よく／＼視ると一人の我騎兵が切りと汗馬に鞭を加へつゝ驅けつけて参りました。「ヤア傳令が来た、之れは必定味方苦戦に相違ないぞ……」と山田大佐と吉原少佐の御兩名は馬を先登に立て、一入續く味方を急がしつゝ、暫時するとハツタリ件の傳令と御出會に相成りましたが、之れは皆さん御記憶でムいませう、加瀬聯隊長殿が未だ左程苦戦に陥りては居らぬが、優勢の敵は隙さえあれば味方の小隊を侮りて切りと其兩翼を延張し、如終包围攻撃を試みんとするの氣配が見へ、若し萬一ソんな事になつて前面と左右の敵軍から十字火を浴せかけらるゝ場合、僅か二百騎足らずの加瀬聯隊長は大事な手始めの陸戦に全滅の不幸不覺



馬首をひき廻らし、先頭に立ちてモト來し道を戰場にと御案内致されますると、山田聯隊長、吉原大隊長を始め林田、大枝、福田、齋藤の四中隊長は、何れも部下を勵ましつゝ一層驅足の歩調を早め、所は定州城外、加瀬騎兵聯隊の苦戦地指して、地煙りあけつゝ驅けつけられますが、コ、で一す説明して置きたいの傳令の事、大佐への傳令續一等卒が言葉の如き、私が其時山田大佐殿の傍らに從ひありて、片ツ端から傳令の文句を一々手帳に扣へたりたると云ふでもいませねば、一言一句前の言葉に間違いなしと云ふ理由、由合ひのものではありませぬが、結局其大要を御紹介致したに止まり、卒總て其御心地で御聞きを願ふて置きます。

黒川大尉、加納中尉を始めとして卅餘名の死傷者は出來るし、彈

藥の補給も思ふやうには續かぬし、只弱りに弱りて居る處に四回迄も優勢なる敵の爲めに突撃を蒙らんとし、其都度漸つとの事に擊退は仕ても又た幾分の死傷を増し加へ、士氣何となく疲れ切つて實に累卵の危さ。今一回最後の突撃を蒙り、夫れこそ美事に事に擊退する見込みはつかず、依りて加瀬聯隊長は全滅を期して心密かに最後の手段を講じ、聯隊旗手を呼び招きて真逆の時吐き差の間に聯隊旗を焼き棄て了ふ爲めに、枯芝枯木の準備迄も待ち構へ居らるゝ時、ドウやら後方に來るかと思はれ計り心配してな氣配が致しますので、若しや歩兵第一聯隊が救援に來たのであるまいかと、加瀬中佐は直ちに雙眼鏡をとり上げ後方を熱視せられますと。果然、果然、四騎の騎馬武者を先頭に立て、約一個大隊計りの歩兵が、宛然湖の湧く如く此方を目標に立て、約一個

升ので、之れを見てとりたる加瀬聯隊長殿には、御自身は勿論命



を邦君に捧げ聊か惜まる、如うな事はいませぬが、此歩兵の増援の爲めに何よりも嬉しきは二百名近くの配下將卒を殺さずに、而も戦争は大勝利となつて目前の定州城も美事に占領し、北韓駐屯の敵軍に一撃を足だまりをなくせしめ、遠く鴨綠江を渡りて九連城方面に退却すべく餘義なくせしむる理屈となりて参り升ので、其時のお喜び心の中の嬉しさ云つたら到底口や筆には表はす事は出来な位位、加瀬中佐殿には思はず知らず躍り上りて、

「南部中尉！ 南部中尉！ 後方を御覽なされよ……。」 味方歩兵の増援隊がアンなに澤山、皆が私共の事を氣づかつて一生懸命駆けつけて居る模様です……。一番先に駆け寄り居るのが吉原少佐續であらう、二番目の騎馬將校は山田大佐で次ぎのが吉原少佐かしら、四番目の大隊副官が聯隊副官として、少くとも第一大隊の全部八百名丈には受合たな。あゝやッこの事之れで安んずる加瀬聯隊二百名近くの忠勇なる將士は漸く生命拾ひを仕た

計りか、形勢一變、戦争は我軍の勝利となる事疑ひなしだ。……。」

と、加瀬聯隊長殿が餘りのお喜びに、南部中尉を始め將校一同何れも双眼鏡をとり上げ能く後方を御覽になると、果して加瀬中佐のお言葉の如く、約一個大隊計りの歩兵が宙を飛ぶかの如く此方を目指して駆けつけ居り升ので、

「漸つと来たよ……。」 「之れからは愉快だぞ……。」 「今度こそ勝利疑ひなしぞ……。」 「一番加瀬中尉や清末特務の吊合戦をやッつけやうしやないか……。」

將校一同非常の御喜び、暫時すると救援隊の駆けつけて居る有様が、肉眼で視ても明白となりましたので、下士卒一同の目も映りて勇氣は俄に百層倍し、思はず知らず伏姿の儘で同音に萬歳を叫び、武運の芽出度を祝されますると、救援の吉原大隊の方でも遙かに此喊聲を耳にして、又もや萬歳を三唱し相和せられ



第七回

ましたと云ふ事で、實に武運芽出度も勇しさの極みであつたらうと思ひ弁。

山田聯隊長殿は續一等卒からして加藤中佐殿の傳令を聞き終るや、心は矢猛にはやりて真先きに立ち一層騎の足掻きを早めらるれば、後に續くは吉原少佐を始め近衛歩兵第一の一個大隊、土煙あけて只走りに驅けつくること、名にし負ふ定州城の城壁もアリアリと視へて加藤騎兵聯隊が苦戦の場は眞の目の前、更らに一段の勇を鼓して戦友互ひに相勵まし合ひ、エイ、聲して韋太天に驅足の歩調も知らず、早くなりましたが、暫時すると騎兵聯隊の方でも氣注いたるらしく、遙かながらも風がもて来る萬歳の嬉しうなる叫び。夫れ早く安神させよ、増援隊が驅けつけて居る事

を知らしてやれと云ふので、内川計手が當意即妙、直ちに猿の如く傍への松の木に攀ち上ぼりて梢の頂上に日章旗を掲げ、之れを合圖に八百餘名の歩兵將卒は、走る、聲を限り三回迄も萬歳を絶呼されましたは、實に勇しさの極みでムいます。此有機を視てとりたる露兵の方では、俄かに多數の増援隊も平常が其名を聞ひては怖ぢ恐れて居た皇國の陸軍歩兵約千名近くが、宛然潮の湧き出るが如く不意に推し寄せて参りましたので、僅かに二百騎足らずの加藤聯隊を相手に戦ふてすら、一時間三十分もして撃退し得ざりし程の強敵なりしに、何かは以て堪まるべきは、未だ之れ以外如何に多數の歩兵部隊が、不意に何れの方から現はれて来るかも知れず、コリや愚圖ついで居てはドンな計略に乘せらるゝかも知れねばと、元來意氣地なき露助の面々、我吉原大隊不意の來援に怖氣だち、定州城の前面なる高地に據りて戦鬪し



居たる哥薩克の徒歩兵等は、早くもソロク定州城指して退却を開始すると云ふ騒ぎ。此時は山田大佐を始めとして吉原大隊の將卒は、僅か一時の間廿分あまりの間に三里足らずの長途を駆けつけられ、山田聯隊長は逸早くも敵が定州城内指して退却せんとする氣配を視てとられ、約八百米突を隔て、猶豫もならねば、即時縦隊を横隊に變じた計り、約八百米突を隔て、號令勇しく一齊射撃を御命に命になりますと、吉原大隊長は更らに其命を配下の將校に傳へ、林田、大枝其他の各中隊長達は、能く敵との間隔を計り、一齊に「八百米突、一齊撃ち方……ネー、テー……」の號令で、配下の下士卒一同は號令の儘に照尺を定め狙ひを定め、テリーの號令待つ間遲しと八百名の兵士達が一齊射撃をされ、響いたので、銃火の響きは實に天地を動かし、連なる山々峰々に反響して勇しくも物凄く、此一齊射撃を連続五回迄もうち放され、たから堪まらない怖氣つき逃足出したる露助輩に少からぬ死傷者を

出さしめ、其結果一時間四十餘も加瀬中佐の騎兵聯隊を、腹散々壓迫して苦しめたる敵軍も、愈々以てチリチリバラバラ。兵語を以て申上げると潰亂とて我を先に列を正す暇とでもなく、つ以ての根據地定州城指して退却を致しました。何事なくウチ負かす事が出来る如うに致すと敵は大變の弱虫で、決してクソ負かす事合のものはなく、露助が強くして執念な事は、其都度少からぬ損傷を出しながらも屈せず恐れず、加瀬聯隊に對して四回迄も突撃を試み、最後に二百五十米突即ち百卅間位の間に隔て接し、雙方とも其面色がアリくと見ゆる邊りまで進撃して参りま

四十分間も大苦戦を仕ながら持ち休へられたのは、とりも直さず我陸軍が敵に數倍お強ひからず、意外な時意外な所ろから増退却致しましたる原因は外でもな意外な時意外な所ろから増



援隊が現はれ、夫れも平常から日本の歩兵はと哥薩克の奴輩が怖ぢ恐れて居た、吉原少佐の近衛一個大隊で美の、で、コリやあまゴくして居たらば直ちに迂回行動をとりて美の、包圍せられ、遂には全滅かすからとも全部をあげて降服せねばならぬ如うな一大事を惹き起すからと云ふので、我歩兵大隊の姿を視るや直ぐと動搖を始め、僅か五回の一斉射撃を喰つた計りで隊形を紊しソコく定州城内指して逃げ込んだ次第と云ふ事であ

休戦政され、今度歩兵隊の方々、朝鮮に上陸以來待ち焦れて居た露助に始めて出ツくわした計りか、加納中尉や清末特務曹長等の吊合戦、夫れのみか美事定州城を乗り取りて敵に北韓での足マリを失はせ、美事鴨綠江以北に驅逐せんものと、始め第一より第四に至る四個中隊は夫れく展開して戦隊形に移り、殊に大隊の右翼と左翼は咄嗟の間延伸して迂回行動を執り、敵軍では思ひも設けぬ高地の崖の上からドシく急射撃を浴せかけられ、出まされたので、元來が怖氣のつきたる露助ども、要隘堅固して一支出るも出まされ、直ちに總崩れとなりまして、委棄したと稱へられたる定州城の守りも打ち棄て、二個の死体を委棄した儘潰亂して北の方九連城方面に向い、我れ勝ちに逃げ出しましたので、新銳氣振の我歩兵部隊にありてはソコ寸分の猶豫がな



弄出度定州城にと御引揚げに相成りました。此時は既に我騎兵隊の面々で定州城は占領になつて居りましたから、戦争と云ふは忙しいもので、茲に始めて歩兵第一聯隊長山田大佐殿と、騎兵聯隊長の加瀬中佐殿とは最も愉快氣に握手の禮をなされ、

「山田君、實に結構でした。御覽の如く我軍が展開した地點は止むを得なかつた爲めではあるが、敵から見下げ撃ちにされて最も不利益な所ではありましたが、其上敵は約八百名もあつたかと思はるゝ位ひ猛烈な射撃のやり方で、前後四回迄も突撃を企てましたし、今一回最後の突撃を受ける時は、愈々聯隊全滅と心密かに覺悟して居りました處、思つたよりも早く貴官方の増援隊が現はれた時は、臍の緒切つて始めての愉快を覺へたです。左様です、今井分間貴方の來援が遅れたら、私の聯隊は確に全滅の不幸を見る處でした……。」と、加瀬聯隊長は誠實面にあ

らわれてお喜びになります。『イヤ、如何して……、僕の駆けつけ方が遅れた爲め非常の苦戦をさして寔に濟まなかつたです。兎も角も思ひの外味方の死傷は妙くして、容易く定州城の要害を占領する事が出来たのは、取りも直さず君の聯隊が勇敢に戦闘し、一步も退かず殊死奮闘せられた結果です。實に結構な事でした……。』

と、御兩人ながら少しも己れの功に誇らずして、他に譲らるゝ處は實に日本軍人の美風唯感服の外はムひません。他に譲らるゝれ、斯くて歩兵、騎兵の兩聯隊長殿には馬の頭を併べて先登に立たせ、定州城は露軍の占領に歸して居りましたので、彼方此方に鐘詰めのカラや何か散らがつて随分難ではありましたが、開戦以來の申した如く委棄屍体は僅に二ツ限り、銃劍其他の武器も残して逃げた物とてはなく、之れには兩聯隊長も大變に感心されました。



斯る咄嗟の敗軍に急激なる追撃を蒙りつゝ退却の場合、斯く迄も跡を濁さぬと云ふのは有紫に露西亞の陸軍だ、我軍でも之れ丈けは十二分注意して置かねばとお話になつたさうで、夫れから城壁の一隅には大分と生々しき血糊がついてる、翻帶切れが散亂して居た、これから推察して見ると委棄屍体は僅に二名限りであつたも、負傷を蒙けた者は勿論戦死者も他に擇山あつたに違ひない云ふので、其附近の土民を呼び寄せに相成り後で能く御調査になりますると、此時定州城に駐屯して居た露軍は總て哥薩克騎兵計りで、其數は約八百名近く決して七百名を下るやうな事はなく、戦死者の廿卅名はあつたらしく、負傷者を合して五十名計りは擔架を以て北方に運んで行つたと云ふ事で、此戦争に蒙けたる敵の損害は割合に多大であつたのが辨りました。

ソコで山田、加瀬の兩聯隊長は配下の騎兵及び歩兵の總てを御集めになりまして、將卒一同の奮闘を御賞讃に相成り、又た實戦

に就ての一場の講話もなされたる後、歩騎双方の喇叭卒は君ケ代の譜を吹奏し、其間一同は捧銃して最敬礼を爲し、終りて、天皇陛下及び日本帝國陸軍の萬歳を三唱し、定州城の占領を祝して後、負傷將卒は夫れ、即時衛生隊の方で叮嚀なる應急の治療を施し居られますので、加納中尉、清末特務曹長を始め名譽の戦死をされた十數名の將卒の遺骸を、即時假埋葬を致されて兩聯隊長以下各中隊長方の御吊詞あり。コ、で一段落が付ましたので開戦當初から定州城占領に至る迄の一伍一什を、委細淺田近衛第一旅團長に報告に及びましたが、其時平壤御駐屯の各部隊員御一同の喜びは又格別であつたと云ふ事、夫れも其等幾度も申上たる如く日露陸軍始めての手合せに斯る大勝利は實にお芽出度事で

重要とては此の定州城を外しては北韓に於て敵軍にとり據るべき江迄ドン、前進が出来ぬ事となりましたが、之れからの斥候隊



偵察の模様、鴨綠江の渡河戦、九連城の大激戦等は後日に譲り、順を追って海軍は旅順口第一回閉塞の壯烈なる講談を一服致して更らに言上致し升。

第 八 回

前の第七回迄に、陸軍の方では加瀬騎兵聯隊の方々が言葉につくせぬ苦戦を遊ばした末、山田大佐殿の指揮の下吉原大隊に属する歩兵の方々が御助勢に、美事定州城を占領なされてイザ是れからが黒木大將指揮の下、三軍勇しく鴨綠江を推し渡りて、九連城にたて籠る露助の奴輩を追ひ拂ひにならうと云ふ大戦争に亙り、一が、引き續きに陸戦の方ばかり伺つて居りますと、自然お話が一本調子になりて面白味が薄まると、自然お話の方に飛び移り第一編に於て委しく言上なしたる仁川、旅順の巻を受け

世界の人の肝玉をヒツくりかへさした、音に名高き旅順港口第一回の閉塞談を言上仕り升。

明かに示しになつた敵港封鎖の大壯舉は、明治卅七年二月廿七日を以て東郷司令官閣下の公報に依り傳はりました。この御計畫は、東郷も直さず、帝國海軍將卒の方々が血と肉とを以て敗れ残り、露國東洋艦隊をば、旅順港内から一寸動さず、さし、この御ふ大膽不敵の御企て、此勇しきお話を言上致す前些しく港口封鎖の説明を致します。

封鎖なされるに付き二機の御目的が、いままさうで、敵軍港の港口を軍艦又は軍港の防禦が十二分安んじ、其の味方ドシ、攻めかけ來たりて軍港内に侵入する處から、敵の軍艦が、自ら自らの港口にこつて置ひても物の役には立ち兼ねる



老朽船を沈めさせるもの。夫れから他のは敵の軍艦が幾十艘となく軍港の深奥く潜みかくれて居て、味方の隙を見ては何處かの他の軍港に逃れやうと企てて居るとか、又は不意に港の外にあらはれ出で、は味方の弱き部分をブチ破らうと機会を待ち構えて居る素振りが見へますので、それ等敵艦隊の進退を妨げる爲め一切其港内から外には出るとが出來ない如うに根拠地と申し軍艦が集合して居る港口を閉塞致しますので、前の方でありましたら一寸物に警へて見ると自分で自分の咽喉を塞ぐと同じ理屈のもので、いふ事になりましたら、夫れこそ戦争の中でも一番危険な又た六ヶ待ら加へて居ります其鼻ツ先きに、軍艦見た如うな防備の設けもめねばなりませぬので、此任務に當らるゝ方々は勿論十の九ツ迄

生命は無きものと覺悟なさらねばならぬですが、ヨシんば生命を的に其任務に就かれました處で目的通り敵の港口を美事閉塞されたと云ふ事跡は之れ迄の各國海戦史上に例題がないさうに、い

ます。

港口第一回の閉塞行動。即ち卅七年二月下旬の頃なる日露兩國の軍情はドウであるかと申しますと、讀者諸君には未だ御記憶にもなつて居られませうが、我海軍の方では既に二回迄も旅順口を撃なされて集集中の敵艦に大損害を蒙らしめになりましたが。また若し勇猛比ひなき敵の海軍將がやッて來て指揮を執りつゝ戦ひを開

らくと云ふことになりましたら容易に侮られたものでも、いませず

夫れ計りでなく其時は既に幾師團の陸兵は京城に駐屯して一日も早

録は早や平壤城を占領し、澤山の軍隊は京城に駐屯して一日も早



く北に進み九連城にたて籠る大敵を追ひ拂はんとは作戦中、夫れが爲め糧食、彈藥其他の軍需品を門司方面から續々仁川の港を指して送り込む爲め、何十艘と云ふ御用船が絶へず海上を往來して居ります計りか引き續き第二軍を御編成になりて別に關東州か或は満州の沿岸に上陸せしめ、旅順口の敵軍を背面から包圍し一方は北上して遼陽、奉天に駐屯する敵の大軍を撃ち破らんと云ふ御計畫も急がれて居りましたので、若し萬一ソンの時に敵の艦隊が味方の艦隊の監視をくぐり脱けて不意に陸兵又は糧食其他の軍需品を搭載致しましたる運送船を襲撃すると云ふ如うな事があつたら夫れこそ大變マルで赤兒の手を捻ぢあぐると同然味方の蒙くる損害は實に莫大なるものですから。と云ふて敵の艦隊は數度の敗戦に怯氣つきて港外に出て來さうにもありませんので、旅順の港口を閉塞して了まつて一寸も外には乗り出させまいと云ふ閉塞の行動を實行するゝ事となりました。

斯くて此敵港封鎖の御計畫は第二回閉塞の折柄美事名譽の戦死を遊ばして、軍神とまで稱め立てられになつた廣瀬海軍中佐方の勇士の面々が主唱者となられ、熱心に御献策になつた結果軍議は成り立ちて實行の運びになつたか、如く、各新聞や雑誌にも書き記してムりましたので世の人々は皆然うと計り思ひ込んで居られます如く、榮りて居らるゝ我海軍部内では、ズツと前から未だ一戦の始まりませぬ時から若し開戦となつた場合には決死隊を募集して戦艦隊の根據地旅順港口を閉塞し、何十艘かの軍艦を一すゝ動もさしまいと云ふ御作戦は立ちて居りましたさうで。現にコンな事實も係致しませぬので、帝國海軍將士のイザ戰場に立ち臨まれても關係致しませぬので、帝國海軍將士のイザ戰場に立ち臨まれて迄も生死を省みず奮闘遊ばす勇氣に富んで居らるゝ計りか、斯う







本船の舷梯を下りて参りましたるは石炭仲仕の組長で親分とたてられ居りますもの。此話を小耳に挟みて「成程お前等には辨るまい、平素は上等炭計り撰り取りの海軍が今度に限りボタを買ひ上げてセツセ此五艘に積み込ませて居らるゝのは他でもないよ。お前達も世間の評判で知つても居やうが、あの露西亞と云ふつが強いのを頼みにして何時の間にか満州を横取りして仕舞、夫れ計りか澤山の兵隊を繰り出して来て今に朝鮮迄も一呑みに呑んで了はうと云ふんだもの。ソコで五体は小さいが決して負けぬ氣の我日本帝國が支那や朝鮮の可哀想な目に逢つて居るのを見兼ね、日暄嘩は俺れが引き受けたと云ふんで去年の始めから日露兩國の間にスツた柔んだの談判とやらが始められたも夫れが一向に擄取らず。露西亞は露西亞で小生意氣にも益々兵隊を繰り込み一方旅順口には何十艘かの軍艦を集めて、小癩な日ツ本奴、若し氣にいらぬ事はあつたら腕づくで来い、イツ何時でも相手になつてや

るからと云ふ如うなシャツ面を仕て居やがる。處が我日本は決して尻ツ尾を下げ罷りさがる如うな弱虫ではないから、サあそこだ、ソコで近い内に必らず大騒動がモチ上らうと云ふんだ……と、仲仕の頭領は早や大得意、後ろの本船の鐵欄には監督將校がもたれかゝりて面白半分笑みを含み聞いて居らるゝにも聊か氣注かす、睡液を狭霧の如く吐き飛ばして一生懸命幾十の乾兒を對手にお鏡舌をするのでした。

「いゝかよ、皆解つたか。ソンな行きがゝりになつてるんで日露の間今に大戦争がオツ始まるに違げえ無へんだ……。其時に此五艘のボタ船が御用に立つんだ……。斯ふ云つた計りじやあお前達にやあ辨るまいが、あの夫れ日清戦争の上りに横合からジャ、張つて露西亞ッポーが横取り仕やがつた旅順口と云ふ、丁度肥前の佐世保見た如うな海軍の港があるだらう。あの港には何十艘と云ふ澤山の軍艦が寄り集まつてイザ戦争と云ふ場合には我國さし



て直ちに攻めかけて来やうと思ひ、準備オサく怠りなしと云ふ事じやが。彼の旅順口と云ふ軍港は丁度瓢箪形になつて居て、港内に這入り込む其入口には老鍬山と黄金山と云ふ二ツの山が左りと右に佇立ち聳へ、岬が双方からつき出して居て丁度くびり切つた如うになつて居るんで、サア戦争となつた場合我日本の海軍では此ボタ船五隻をヒツ張つて行つて其港の入口に沈めて了ひ、内道入つてる敵の軍艦を一艘も港外には出すまいと云ふの計略じや……。

有繫に海軍の参謀方は智慧が逞しいじやないかよ……。

乾兒を相手一心になつて物語り居る頭領の談話を、件の監督將校は始めの程こそ何を云ふとやらとニコニコ顔で聞いて居られましたが。其話が段々進むに連れお了ひ方になると何だか不安神の如うな面色して腕を拱き耳を聳て、暫時は頭領の談話に聞きとれて居られました。愈々終りた處で將校は頭を傾げホツと低き嘆息を吐かれました。夫れも其筈でムいます、其時大急ぎに

ボタ炭を積み込み居られましたる五艘の船は。諸君御承知の通り皆第一回の閉塞船に御使用になりましたもの計りで、海軍部内では若し戦争となつた場合は此五艘の汽船に決死の勇士を乗り込ませ、旅順港口を封鎖して何十艘かの敵の艦隊ムンシリ動きも爲さすまいぞと、御計畫になつて居り乍ら勿論之れは秘密中の大秘密部内でも五六の方を除く外誰れにも知らしてはムいませぬのに、別に軍事の教育とてもなき石炭仲仕風情の身で恰も手にとる如く大秘密の作戦計畫を説明して居りまするで、監督將校殿にはドウも不思議でならず、マサかに部内から此計畫の一伍一什が洩れたと云ふでもあるまいが、と云ふて仲仕風情がアレ程委しく承知して居ると云ふ理由もなし、之れが若し昔の幕府時代でもあつたら何の事はなしソツと何處かにヒツ張り出してウチ首となし、死骸は海中に蹴込んだら一寸の安神は出来るものゝ今の時世ではソレなに亂暴な真似もならず。又た何十人と云ふ他の仲仕にもソレ



程委しく話して居たからには知らずの間に大分澤山の人間に、  
 大事なる大事な海軍の秘密が洩れたと云ふもの、近頃目スキの門司  
 港であるから露探も多敷く入り込んで居るに相違なく、仲仕位い  
 を相手にナマジツカな事をやッて除け却つて世人の注意をひく話  
 の種子となつて蚯蚓かき出す如うのブマを見てもツマらぬ故え、  
 心ありて話した事でもなかるべく心ありて聞きたる次第でもある  
 まじければ、コ、暫時成行きに任かさんものと件の監督將校殿に  
 は漸つとの事に思ひかへして胸撫で下ろし、有耶無耶の間に揉み  
 消して了まつてボタ炭積み込みの仕事を急がせに相成り。其仕事  
 を終はらした處で五艘の汽船は佐世保の軍港にとお廻しに相成り、  
 夫れも港内には一切入れず、沖と港の中間に持つて行つて錨を下  
 ろし、前から乗組船員は一人も上陸を許さず、水兵を附けて嚴  
 重に監督せしめられ警戒オサ、  
 へて居られます。

斯くて月日も段々と進みまして二月の始めには國交断絶にて、  
 之れまでは日露兩國の外交官方が之れならば承諾して我漫して呉  
 れるか、イヤ什麼もソウ迄讓る譯には行かぬと云ふ如うに双方か  
 ら相談を仕て居られたのを、コンな風であつたら何時迄談判を試  
 みても堪あきさうにないから最う協議は止めにするぞ。言かゆる  
 と談判では纏まりつかぬから相互に一戦をやつて大丈夫らしく勝  
 負を決しやうじやないかと云ふ。其旨我日本皇帝陛下の名を以て  
 御通知になると同時に、頃しも卅七年の二月六日佐世保軍港に集  
 中し居られたる聯合艦隊は、東郷司令官閣下御指揮の下進撃の  
 御大命が下るや否や威風堂々船艦相喇みて乗り出され、仁川、旅  
 順の双方ながら大勝利を占められましたが、其時我佐世保軍港に  
 近き第一番目の日本海軍根拠地は朝鮮の「入口浦」と申します  
 一ツの良港で、いまして。お話には前に戻り門司に於てボタ炭をお  
 積み込みになりたる報國、天津、仁川、武揚、武州の五隻は佐世



保 港 外 更 ら に 此 「 八 口 浦 」 に 差 し 廻 は し と 相 成 り、 夜 に な れ  
 ば 悉 く 艦 門 を 閉 ぢ て 一 切 燈 火 の 外 部 に 漏 れ ぬ 如 う な さ れ、 番 兵 の  
 水 兵 方 は 猶 ほ 一 入 に 警 戒 を 嚴 重 に さ れ て 勿 論 乗 組 員 は 此 時 迄 も 一  
 切 上 陸 を 許 容 さ れ ず、 夫 れ は 一 嚴 し き 御 監 督 で あ つ た と 云 ふ 事  
 で あ り 升。  
 其 當 時 の 事 で 一 升 が、 民 間 の 人 々 は 日 露 の 談 判 が あ ま り に 抄  
 取 り ま せ ぬ で 一 体 政 府 が 氣 が つ か ぬ の、 平 素 人 民 の 膏 血 で 育 て あ  
 げ た 陸 海 軍 は 眠 り て は 居 不 い か 杯 と す い 分 毒 舌 を 吐 き 憤 り て 居 ら  
 れ た 際 慨 家 も 居 ら れ ま した 如 う で した が、 此 頃 迄 も 軍 事 上 の 秘 密  
 と し て 覆 せ ら れ た る 閉 塞 船 の 準 備 が、 戦 争 前 の 一 月 中 旬 か ら 斯 く  
 迄 も 整 頓 し て 居 つ た 事 を お 聞 き に な り ま した ら、 陸 海 軍 の 當 局 方  
 が 御 注 意 の 行 き 届 き 居 ら れ た に は 唯 感 心 の 外 は 山 い ま す ま い。 扱  
 て も 之 れ か ら、 閉 塞 隊 出 發 の 御 準 備 談 に 移 り ま す。

第 九 回

お 話 の 順 序 と し て 空 前 無 比 の 壯 舉 と 諸 外 國 の 嘆 稱 を 得 た 第 一  
 回 閉 塞 隊 の 前 に、 時 々 二 月 十 四 日 の 未 明、 吹 く 風 降 る 雪 暴 狂  
 浪 を 侵 し て 敵 の 軍 港 旅 順 口 に 大 襲 撃 を 試 み ら れ ま した る、 驅 逐  
 隊 の お 話 を 少 し 計 り 致 し て 置 き ま す。  
 我 隊 の 合 隊 が 二 月 八 日、 九 日 兩 度 の 攻 撃 に 頼 み の 網 の 大 軍 艦 四  
 五 隻 は 大 損 傷 を 蒙 り ま した の で、 敵 の 所 謂 東 洋 艦 隊 は 港 外 へ と  
 出 け て 來 て 戦 争 を 挑 み さ う に も 山 い ま せ ぬ の で 我 隊 合 隊 艦 隊 は  
 再 び 水 雷 艦 隊 を 放 ち や り て 猛 烈 な る 襲 撃 を 試 み る べ く 御 決 定 に  
 な り、 海 軍 中 佐 長 井 群 吉 殿 に 朝 霧、 速 鳥、 春 雨、 村 雨 の 四 驅 逐 艦  
 を 引 率 し て 出 發 せ し め にな り ました が、 長 井 中 佐 殿 に は 八 日 の 夜  
 第 一 回 襲 撃 の 損 傷 大 連 灣 方 面 に 打 ち 向 は れ た 爲 め 運 悪 し く し て



トウク敵の軍艦にお出逢ひなく、スゴクとして翌朝根據地に御ひき上げとなりました。此時此御命令が下りましたから勇氣は日頃百倍し、同じく勇みに勇む部下の將卒を従へて威風堂々御出發と見へました。此日は生憎の事に寒氣厳しく朔風は吹きつものりて小艇の如き雪まで降り切り殆んで東西の見別けもつきませぬ位ひ。風烈しければ従がつて浪も暴く、恰も木葉を浮べましたる如き驅逐艦の事ですから狂ふ浪は屢次甲板を越へて、乗組將士の方々が一たび此の海水をザツとお浴びになりまると見るく凍りて板の如くになり、其御困難は到底筆や言葉には盡せませぬ次第でございました。爲めに最初の間に各艦一定の間隔をとりて順序正しく旅順を見當に御進航相成りました。暫時すると雪と風と浪の爲めに各自其影を失はれて離れくの姿となられ、朝霧、速鳥の二艘が漸つこの事十四日午前三時の間を侵して目的地の旅順港口まで辿りつけになり、何處に敵の艦隊は碇泊なし居

るかど彼方此方を御偵察中たま〜敵の哨艦から夫れと氣注かれ茲に陸上の砲臺と海上の哨艦からして劇しき砲撃を蒙り一時非常の苦戦に陥られました。何せう之れしきに御退却相成るべき乗組みの將士一同愈々死を決して奮進遊ばされ、折柄一大敵艦の盛に黒煙を吐き居るのを認められて二艦は一齊に數個の水雷を發射に相成り、又た港口の邊りにて他の敵艦にも魚形水雷を放ちかけ、轟然として天地に響く爆發の音に其命中を確かめ全速力を出して無事芽出度御退却に相成りました。最も此夜は前お話致したる如く咫尺を辨せずとも云ふべき闇夜でムいきましたから、愈々何々と云ふ敵艦に命中したのか其結果ドレ位ひの損害を與へたのか夫等は些しも判然致しませなかつたも其後に至りて彼方此方からの情報に兩艦の勇猛なる襲撃に、セバストポール、メトロパウフスクの兩一等戦艦が大修繕を施さねば殆んど役に立たぬ位の撃破せられた事が明白となり、一同萬



も敵が其虚を窺ひ知りて全力をあげ逸出を企つるか或は残りの艦隊に襲撃を試みる如うな場合には夫れこそ由々敷一大事である。ナリ乍ら浦並艦隊の四隻は後ろの方において自由自在に日本海沿岸に出没し、思ふままにあらし廻るとも出来る位にあれば一方我第二軍の上陸も妙からず急いで居るで、不日其の護送を爲すと同時に無事上陸せしねばならぬと云ふ一大任務もある事なれば、何時に出かけて来るやも判然せぬ敵艦隊に備へて此ル一バ根拠地計り全艦隊が集合して居る譯にも行かず。我々海軍の盡すべき任務は頗る多く且つ何れも急を要する事計りなるに、敵艦隊は出て来る又た味方の艦隊を分つと云ふ譯には行かず。然うだ、斯る時の大計書として敵の軍港艦隊集合地旅順港口を美事に閉塞して残りて居る敵艦をば港外には一寸動きも出さざる如うになし置きて根拠地を乗り出して思ふ儘味方の艦隊の勢力を分ちこゝル！の

歳を叫びてお祝ひになつたと云ふ事でムいすが。此驅逐艦の襲撃のお話には之れ位ひに止め肝腎の第一回閉塞に移りて勇しきお話を言上致します。

斯くて速島、朝霧兩驅逐艦の襲撃が又もや目ざましき手柄を立てられましたで我聯合艦隊の士氣は一入に振ひ起りましたが。夫れに引きかへ敵の艦隊は愈々旅順軍港の奥深く逃げ込みまして、我軍容に怯ち恐れ一向に出かけて来さうにもムいませず、ソコで二月十九日の事、東郷司令長官閣下には各艦隊の軍司令官を始めとし各艦長、各水雷艇隊司令の方々を旗艦三笠に召集と相成り各將領羅星の如く列せられて種々軍議を凝らされましたが、今我々は敵は數回の敗戦に怯氣立ちて容易に出港せられぬと云ふ勇氣もあるまじく、ト云ふて敵艦隊に一番近き此根拠地ルーパー（七哩）の速力を以て僅か四時間に旅順口に到達し得る地點）から我聯合艦隊が離れて他の任務に就くと云ふ事も出来ず。若し



う 戦闘力なからしめ、一方は第二軍を護送して美事上陸を了へし  
 り 戦闘に盡力せねばと。此時の御軍議で始めて日頃御計畫の閉塞  
 行動を御實行に相成る事に決定したもので、いよいよ  
 前申上げたる如く此會議で敵港封鎖を實行すると云ふ事になり  
 ました。が、其閉塞用に充つる五艘の汽船は開戦前早くも門司に於  
 てボタ炭を満載し、其他の準備全く成就して早や第一の根拠地に於  
 鮮の入口浦迄差し廻しになつて居ります。イッ何時御實行に  
 難なるは其閉塞船に乗り組んで敵の港口に闖入なされる、乗組員で  
 勿論敵は我艦隊を回の大襲撃に大艦を破られ怯気立ち居ります  
 丈けに一層警戒を嚴重になし、陸上の砲臺から終夜何萬燭光と  
 云ふ探海燈數基を絶へ間もなくふり照らし、加之海上の各軍艦  
 から負けず劣らす探海燈を照らし出して我艦隊の襲來を發見す  
 る事に努め、又た陸上砲臺も海上の各艦も、今回こそは寄らば撃た

んと警戒オサ、意なく防禦準備に餘念も、なませぬので、武  
 装も聊かなく殊に船足遅き老朽の汽船に打ち乗りて敵の港口に突  
 入し、敵前に於て閉塞作業を致しますのは、必らずや敵の探海  
 燈に照破せられ、霧の如く大小砲彈を注ぎかけられて、閉塞船  
 と諸共海底の藻屑と消え去る事は言はずと知られた事、夫れで五  
 隻の閉塞用汽船に乗り組む將士は十人の九人迄死ぬると云ふ事  
 極まりて居り、舟の成程其當時の應急策として閉塞行動を實行  
 すると云ふ事は御議定になり、その、平素部下を愛し慈心  
 に富む事一倍なる東郷中將閣下には、マサかに自身を口からし  
 て死しに行けと命令する譯にも行かず、最後の乗組員と云ふ問題  
 になつてから、流石にハツタと行き詰まりて頭を傾げ暫時は深  
 思ひに沈んで居られましたが、  
 東郷中將閣下の此有様に併み居る各司令官、各艦長の方々も其  
 胸中を量り兼ね、暫時は誰れあつて口を開らくお方も、なませぬ



宛然水をうつたる如く静寂とした事であつたが、良久ありて遙か下手の座席に佇立ち上り、恭しく意見の陳述にかゝられました。は数多勇將ある中にも鬼と呼ばれた海軍中佐有馬良橋殿と相見へました。

「小官熱々考へまするに唯今の處差し當りての急策は旅順港口の閉塞と軍議一決しなから、一向に軍議が進みませぬのは今回の閉塞船に乗り込むと云ふ事は幾許か危険でもあり名譽でもある處から、閣下にも諒れと指名して直接に御命令もなく心を悩まし居らるゝ事かと察しまするが、多数の先任長官を差し置き不肖良橋が斯る事を志願致すも不埒とは存じまするなれど御信認下さらば何卒良橋を以て閉塞船乗組みの一員に加へられん事を切願致しまする、什麼か御異存なくば御命令下されたし……」も熱心に現はれて切なる有馬中佐の御申状に、東郷中將閣下にも其心を酌み取りになりたるらしく俄に喜色を帯び直ぐと其場に

於て有馬中佐に御命令遊ばれました。

「君が左様云ふ決心で行つて呉るれば何よりも安神であるが、實は任務が任務であるから差し當りて誰れに命令をするか云ふ譯にも行かす心密かに心配を仕て居た處じやつた。君が今の話で十分得心が行つたから君を以て閉塞隊の總指揮官に任じ此行動に關する一切の事は君に任かす事とするから、ドウぞ陛下の御爲め國の爲め十分の働きを爲し敵港閉塞の大壯舉を成功して貰ひたいものだ……」

と云ふ司令長官の仰せに有馬中佐殿は喜色滿面に溢れ。

「有難ふもなまする、直ちに御承知下されて小官の名譽之れに過ぎたる事はなまませぬ、勿論骨を粉にしても必らず成功しお目にかけたいものと存じます」。

と勇しき御返辭を遊ばされ、之れで旅順港口閉塞隊の總指揮官は有馬中佐殿に決定致しましたで。サラば外の四艘に乗組む指揮官



官は誰れが宜からう、誰れに仕やうかと差し當り各艦長方の御推  
 薦をば參謀や幕僚の方々が更らに御協議御撰定になりましたのが  
 先づ第一に彼の名高き勇將の廣瀬少佐殿、夫れから齋藤大尉、正  
 木大尉、今一人は各新聞や各雑誌には能く島崎だの島村だのと記  
 してゐるますが、島村保三と申さるゝ中尉の方と此四人の勇將達に  
 極まりましたのが、之れで五艘の閉塞船の指揮官は決定してしま  
 したで今度は其船の進退を司さざるゝ機關受持ちの將校を撰出  
 せねばならぬと云ふ事になり、之れ又た各參謀、幕僚、艦長方の  
 御協議で大機關士の南澤安雄、同山賀代三、同栗田富太郎、中機  
 關士の大石親徳此の方には有名な政治家大石正巳氏の命令ださうで  
 夫れから今御一人は少機關士の杉政人と云ふ方以上五人で別れ  
 一五艘の閉塞船に乗り組まるゝ事と極まり、ドウせやるからに  
 は一日も早く決行した方がと議は一決して差し當り二月廿一日と  
 定まりましたが、如何にもお仕事がお仕事で軍人としては此上な

き名譽の御任務でゐりますから、前の閉塞船乗組みの將校や機關  
 士の方々を御撰定になりすに任せても、自分の部下からイヤ自分  
 の艦からと各艦長の方々が切りとお争ひになる結果、澤山な聯合  
 艦隊の將校や機關士の内からアレならばと目星をつけて島村聯合  
 艦隊參謀長殿が御撰定に相成つたと云ふ事で、前の申上げた十名の  
 將校機關士方の御名譽は實に大したものでも、良橋殿を始め外四艘  
 斯くして閉塞隊司令官として海軍中佐有馬良橋殿を始め外四艘  
 の閉塞船にお乗り込みの將校と機關士の御撰定は立派に相済みま  
 した。申す迄もなく將校と機關士の御撰定が出来たからと云つ  
 て、僅かに二人や三人で何千噸と云ふ大流船を運轉し、甘く旅順の  
 港口迄乗りつけ美事に爆沈さするとソンの出来る譯合のもの  
 方々が乗り込まれて諸種の任務に就かれねばなりませんので、  
 乗組下士卒の人撰は如何したものかと云ふ事に相成りましたが、



其時、東郷閣下の申さるゝには、

「左様なつて来ると又た困まる、普通の戦争であつたら上大将より下一兵士に至る迄誰れも同じ事、國家の爲め大君の御爲めに生命は無きものにして激戦奮闘せねばならぬ事は勿論であるが、九人迄は先づ戦死の覚悟を爲さねばならぬ、特別中の特別任務で十人のがあつて物の道理を辨へて居る將校や機關士であつたら、今度の如うな困難な任務には自ら進んで服し見やうと云ふ決心もあらうが、自分の口からムザムザ死に行けと云ふ如うな命令を下すと云ふ譯にも行かぬが、コリや困まつた事に成つて来た哩……」

「成程閣下の御配慮は尤もな次第でござりまして、任務が任務でござりますから誰れも行け彼れ行けと命令する譯にも行きませぬ、夫れと云ふて一方から考へて見ますと今回の如うな大名譽の任務をば、何萬とある水兵機關兵の中から誰れ彼れと撰抜するもの後でかえつて不公平と云ふ議論のないとも限られませぬから、如何でござりませうか、此方から命令や撰抜と云ふ事にせずして今回コンな特別任務があるが希望の者は各艦艇長迄申し出でよと向ふ任せに志願をさすと云ふ事に致しましたら、其結果が善くても悪くても何一ツ不公平はござりませぬと云ふ事にはござりませぬか……」

「ソリヤあ島村參謀長の考へは至極善さうなが、如何だらう勝手に志願をせよと云つた處で任務が任務だから希望者は必要の人員だけ出て来やうかねえ。」

と、東郷閣下には容易に安神なされませぬで、御一同其人撰抜方



に就て種々心配なされ協議を凝らされましたが、結局五十餘艘の軍艦、十九隻の驅逐艦、百隻に近き水雷艇を合して何萬と云ふ水兵機關兵に汎ねく募集したならば、マサカに百や百五十の閉塞隊員希望者が無い事はあるまい。夫れは大丈夫でムい升、必らず志願者は續々ある事と信じますと。東郷閣下も亦た各艦長方も差し當り他に良案もムいませんで、島村聯合艦隊參謀長の募集説に議は一決して御散會と相成りました。

第拾四

前回は御伺ひ致したる如く二月十九日早朝より旗艦三笠に於て催されたる各司令官、各艦長を召集しての御軍議に於て、愈々二月廿一日に旅順港口閉塞の壯舉を御決行相成る事に定まり、五艘の閉塞船に乗り込まるゝ將校及び機關士の方々は有馬中佐殿を總指揮官として夫れ御人撰も相済みましたものゝ、扱て閉塞船一艘には少くも水兵、機關兵の方々十四五五人位は御乗り込みにならねば爆沈などの御仕事が出来ず、五艘で一七八十名の乗組員は必要と云ふ事になりましたが、其撰定と云ふ一段になりました時何うも仕事が出来ず、其撰定と云ふ一段になりました時任意の募集と云ふに御協議纏まりて、各艦長や驅逐艦司令の方々は夫れ御ひき上げと相成り、何れも早速乗組員一同を上甲板に召集せられて概略閉塞行動の御話あつた後にて希望の者は夕刻迄に艦長若くは副長の手許迄願ひ出でよと云ふ意味の御訓示がム



配。は 氣を 休め 其 他 東 郷 閣 下 を 始 め 各 幕 僚 各 參 謀 の 方 々 も 決 死 隊 募 集 の 結
 う の 事 は 有 る ま じ き か 若 し 萬 一 七 八 十 の 希 望 者 も 出 て 來 ない と
 心 せ ね ば 鬼 神 も 恐 れ ぬ 我 海 軍 兵 も 閉 塞 の 話 を 聞 いて は 二 の 足 踏 む や
 中 佐 殿 が お 殘 り に な り て 島 村 聯 合 艦 隊 參 謀 長 殿 の 種 々 閉 塞 作 業
 に 就 いて 御 協 議 遊 ば して 後 ち 何 せ う 十 九 の 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄
 果 如 何 ならんかと案じ切つて居られます。扱て第一に旗艦三
 笠でムいします、同じく乗組の水兵、機關兵一同を上甲板に集め
 られて艦長殿が閉塞作業の簡短なる御話があつた後、決死隊募
 集に付て若し志願者が此中にあつたら申出で、然るべしと云ふ御訓
 示を遊ばすと、二三十分も経つたかと思ふ早やボチ／＼口頭又は
 志願書を持参して決死隊編入方を希望して参る水兵や機關兵が
 い升。此分であつたら全艦隊の乗組員を合はした中から百と二
 の希望者は必ずあつたら相違なしと喜んで居られました。
 間餘り過ぎた頃からは希望者が續々推しかけて参り、旗艦の附
 人に假泊して居りました各艦からは短艇又は小蒸氣を飛ばし志
 人名簿又は志願書等を持参致しまして、二時間計り後には三笠
 艦計りからでも早や二百餘りの決死隊志願者が出て参つたと云
 有様。其日の暮れ前になりまして、僅かに七十餘名の募集人員に對
 し希望者は二千有餘人になりましたので、東郷閣下、島村參謀長

配。は 氣を 休め 其 他 東 郷 閣 下 を 始 め 各 幕 僚 各 參 謀 の 方 々 も 決 死 隊 募 集 の 結
 う の 事 は 有 る ま じ き か 若 し 萬 一 七 八 十 の 希 望 者 も 出 て 來 ない と
 心 せ ね ば 鬼 神 も 恐 れ ぬ 我 海 軍 兵 も 閉 塞 の 話 を 聞 いて は 二 の 足 踏 む や
 中 佐 殿 が お 殘 り に な り て 島 村 聯 合 艦 隊 參 謀 長 殿 の 種 々 閉 塞 作 業
 に 就 いて 御 協 議 遊 ば して 後 ち 何 せ う 十 九 の 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄
 果 如 何 ならんかと案じ切つて居られます。扱て第一に旗艦三
 笠でムいします、同じく乗組の水兵、機關兵一同を上甲板に集め
 られて艦長殿が閉塞作業の簡短なる御話があつた後、決死隊募
 集に付て若し志願者が此中にあつたら申出で、然るべしと云ふ御訓
 示を遊ばすと、二三十分も経つたかと思ふ早やボチ／＼口頭又は
 志願書を持参して決死隊編入方を希望して参る水兵や機關兵が
 い升。此分であつたら全艦隊の乗組員を合はした中から百と二
 の希望者は必ずあつたら相違なしと喜んで居られました。
 間餘り過ぎた頃からは希望者が續々推しかけて参り、旗艦の附
 人に假泊して居りました各艦からは短艇又は小蒸氣を飛ばし志
 人名簿又は志願書等を持参致しまして、二時間計り後には三笠
 艦計りからでも早や二百餘りの決死隊志願者が出て参つたと云
 有様。其日の暮れ前になりまして、僅かに七十餘名の募集人員に對
 し希望者は二千有餘人になりましたので、東郷閣下、島村參謀長



殿、有馬閉塞隊指揮官殿を始め總ての方がヤツと安神の胸を撫で下ろされ非常の御満足でムいしました。

其の中に有馬中佐殿が詰め切つて居らるゝ島村參謀長殿の室の扉を推し開いて、「決死隊の願書でムいます、何うか是非とも御採用が願ひ度ものにムいます。……。」と、恭しく一通の願書を卓子の上に差し出してひき下りました。一人の兵曹がムいますので。有馬中佐殿には直ぐと其願書を御とり上げに相成り御覽になりました。たが何だかハッキリせない墨附きの上に、外面は早やソロソロ暮れかゝつて居ります。爲め讀みかぬるが確かに「願書」と記してある。ア封紙を開らきて本文をよく御覽になりますとコンなる。意味の文字が記してムい升。

意味の文字が記してムい升。

私儀目下決死隊募集相成り候に付ては志願致し候條御撰振相成度此段血書を以て奉願上候也。

三笠艦乗組二等兵曹 林 紋平

「あゝ血書だ！血書だ！林紋平と云ふ男は實に豪い奴ですわえ……。」と、有馬中佐殿は斯く申されまして感涙を呑みこみ居られまする。何だ、血書……と島村參謀長殿は中佐の手より件の志願書を受け取りて逐一目を通されました。成程心の真意をあらはしたる鮮血淋漓の血書一通。「林は感心な男だ、平素は柔和にして到底コンな沈勇のありさうにも見へぬが、有馬は日本海軍の兵曹丈けありてコンな時にはドレ程勇氣があるか伺ひ知られぬ位ひ、真箇に感すべき奴だ……。」と島村大佐も共に感涙に咽びて居られまする。處に丁度東郷中將も御出になりて此話をお聞きになり、件の血書を御取りになりて一應御熱讀になりましたが眼中何時しか感涙を浮べられて。「實に感心な男ではある、コンな人物が居るか切りに御喜びの模様であつたと云ふ事です。」と

切りに御喜びの模様であつたと云ふ事です。」と

コンな有様で御一同が心配されて居られましたに關はらず決死



隊募集は非常の好結果で、愈々締め切りと相成りました時志願者の  
 の總數は二千二百餘名に達し、數ある志願書の中には若しも今回  
 の決死隊に加はる事が出来ない如うであつたら、故郷の父母兄弟  
 を始め知己朋友に達はする面目がないから自殺を致しますから杯  
 と云ふ添書き迄してあるものすらふいまして、何れも其熱心  
 は驚く計り。處が實際閉塞船乗組員にして必要であるは七十名餘  
 り八十名足らずですから、其二千二百餘名の希望者中何れを採用  
 してよきものやら何れを却下すべきか、最初は其數に充るか何う  
 であるかを心配して居られましたに、斯ふなるに至るか何う  
 が之れ程熱心であるからには自分等の手限りで取捨選擇した場合は  
 には如何なる不公平が持ち上らぬとも限られれば、此上の人は  
 什麼しても閣下に御願ひ致すより外に陸術はない。東郷閣下の御  
 目鏡で御取捨相成つたとあつてはヨシ却下せられて人選に洩れた

からと云つて誰一人不平不満に思ふ者もあるまいから、と御兩人  
 は志願者名簿と志願書とを一纏めになされて東郷閣下に其事をお  
 謀りに相成りました。  
 處が閣下のお言葉には、不肖平八郎は聯合艦隊の司令長官であ  
 つて見れば、一兵卒の事迄關係せぬばならぬとあつては少々驚き  
 入るが、成程事情を聞いて見ると尤もであるから自分の名を出し  
 ても厭はぬソコは君達が程よく取り計らつて後で希望者間に不  
 がない如う仕たが宜しからう、と云ふお許しが出ましたので御兩  
 人は畏りて御退出。夫れから各參謀や幕僚の方々が御集まりにな  
 つて二千二百餘名の希望者の中から愈々閉塞隊員として撰り出し  
 になつたのは、七十七勇士と傳へられてありますかなれど其實は  
 八十一勇士だと云ふ事も聞きました。今閉塞隊の編成と此名譽  
 ある猛將勇士の方々が姓名を言上致すと。

▲第一 天 津 丸



(數) (朝) (朝) (朝) (數) (數) (朝) 機 指  
島) 日) 日) 日) 島) 島) 日) 關 揮  
長 官

△ 第 二 計

十 七 名

一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 二 等 機 關 兵 二 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 大 海 軍 少 佐 三 等 機 關 兵 三 等 機 關 兵 二 等 機 關 兵

日 竹 三 大 塚 角 大 栗 廣 青 谷 室  
高 澤 富 山 本 間 沼 田 瀨 木 田 梅  
金 由 鐵 本 千 今 富 瀨 志 梅  
左 彌 太 助 助 朝 太 武 勲 廉 市  
衛 彌 太 助 助 朝 太 武 勲 廉 市  
門 七 郎 郎 市 藏 郎 郎 夫

(三) (富) 千 千 初 初 (三) (三) (三) 初 淺 淺 機 指  
笠 士 歲 歲 瀬 瀬 笠 笠 笠 瀬 間 間 長 官

三 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 二 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 一 等 機 關 兵 上 等 機 關 兵 大 海 軍 中 佐

深 坂 田 高 高 坂 田 加 林 大 內 上 山 有  
山 田 中 本 橋 口 中 儀 野 田 信 賀 馬  
長 良 太 郎 運 力 三 榮 一 之 音 代 良  
作 吉 郎 松 治 松 郎 儀 平 郎 助 藏 三 橋



指揮官	(吉野)	(淺間)	(出雲)	(吉野)	(出雲)	(八島)	(出雲)	(八島)	(淺間)	(出雲)	(出雲)
△第四	野	間	雲	野	雲	島	雲	島	間	雲	雲
計	三	二	二	二	二	二	二	一	一	一	一
武	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等
十	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
六	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關
名	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
海軍中尉	曹	曹	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
島村保三	藍原善七	宇野虎三	三島謙六	三村千萬	伊豆香松	梅原健三	安原助藏	土屋勝次	林政吉	貝塚六郎	青木五郎

(八島)	(淺間)	(八島)	機	指	(朝霧)	(笠置)	(笠置)	(朝霧)	(敷島)	(敷島)	(敷島)
島	間	島	長	官	日	置	置	日	島	島	島
三	二	一	大	海	三	三	二	二	二	二	一
等	等	等	機	軍	等	等	等	等	等	等	等
機	機	機	一	大	機	機	機	機	機	機	機
關	關	關	等	機	關	關	關	關	關	關	關
兵	兵	兵	兵	關	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
曹	曹	曹	士	大	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
寺岡寅市	增田平馬	山田仲次郎	南澤安雄	齋藤七五郎	石井銀次郎	盛田隆義	城戸隆清	高井清	佐藤七郎	光野敬次郎	藤本金太郎







右の通り二千二百餘名の志願者の中から七十七勇士を御撰抜に相成りて公布になりましたが、何せう東郷閣下の御人撰と云ふ事でもヨシンば撰抜に洩れた方々も一人として不平をならさるゝ事にも行きませす、前言上致しましたる如く有馬中佐殿が天津の指揮官を兼ねて全閉塞隊の總指揮官と云ふ事になり、閉塞隊の第一の根拠地「八口浦」迄廻はさしてあつた五艘の閉塞船には、軍艦にするから五艘とも卅分間以内には鼠色に塗り替へよと云ふ御命令が参りましたで、斯ふ云ふ老朽船を假裝巡洋艦になさるとは同一暫時は驚きの口をふさがなかつたと云ふ事でした、何時と云つても立派な御命令であり升から總がりの大急ぎで其時

(初)

通計 十四名

二等機關兵

六

松

間内に五艘とも綺麗に塗替へを終り直ぐと最後の根拠地「ル」指して御廻航に相成りました。又もや話頭一轉、船の準備から乗組員の御撰抜御編成も立派に出來てイツ何時閉塞の作業にとりかゝられても聊かの故障なしと云ふ事になりましたが、二月廿日の午前十時に有馬、廣瀬、齋藤、正木、鳥村の各指揮官と山賀、栗田、南澤、大石、杉の各機長を旗艦三笠に御招きと相成り、各艦隊司令官及び各艦長、各艦隊司令の方々八十餘名御集まりになつて訣別の宴を張らるゝ事となりました。一同艦の上甲板に整列致された時東郷司令長官殿は静々と御出かけになりて、

「今回の事は萬死ありて一生なき壯舉であるが、其任に當らるゝ諸氏は、陛下の爲め又た國家の爲め十分に努力せられん事を希望する……」

と云ふ意味にて一場の挨拶をなされ、之れに對して有馬中佐殿



は閉塞船乗組將校及び相當官を代表して下の如き意味の答辭を御陳述に相成りました。

「不肖等閉塞船乗組員一同は謹んで司令長官閣下の御訓命を奉じます。勿論今回の舉に參して死するのは一同の十分に覺悟を極め居り升事で、如何様の事がありませうと、決して日本海軍の聲譽を汚す如うな行動は致しませぬ故え其邊は御安神を願ひ升。事は善つて成功致す覺悟で申しますが、私共生前に於て各閣下を始め各戰友諸士と對顔の榮を得ますのは恐らく之れが最後かと考へて居ります……」

と述べられました時は有聲に併み居る各將士何れも深き感に擊たれ玉ふて満座は宛然水を撒つたるが如く實に悲壯極まる光景であつたと云ふ事であり升。

ソコで三笠の大食堂には御宴會の準備が整ひ東郷閣下を先きに御一同着席と相成りお定まり通り先づ三鞭酒の盃をあげて閉塞船

乗組員一同の武運と成功とを祈られ、夫れより酒池肉林の大宴會は開かれて實に御勇壯な事でもいたしましたさうなが。其宴會の最中に廣瀬少佐は幾多の先輩に取り圍まれて成功を豫じめ祝せられて居られます處に、突然後ろの方から「廣瀬少佐、廣瀬少佐」と云つて脊中を叩く人がいます。何氣なく後振りかへりになると誰れあらう華頂宮殿下で申しました。少佐は驚ひて御座にお着きにならん事を切りにお願ひ致されたさうですが一向御閉入れになりませず、殿下には隻手に洋盃隻手に麥酒燗を提げて居られました。

「廣が酌をするぞ、成功を祈るぞ」と仰せあり、少佐が恐惶再拜切りに御辭退申上げても御許しがありませぬので、少佐は双眼よりハラ／＼と感涙を流し殿下の御酌に巨觥をあげられたと云ふ事ですが。元來廣瀬少佐殿は一滴も酒は咽喉を通さすと云ふ規限をたて居られましたか、此



時計りは十分に盃をあげられたと云ふ事です。三笠艦上談別の御宴會は丁度三時間餘り夫れこそ悲壯極まる御酒宴だつたさうですが、愈々閉塞となりて各艦隊司令官、各艦長方は夫れ／＼おひき揚げとなり、閉塞船乗組みの方々も一應御自分の艦にと歸へられて、受持ち／＼の閉塞船には其日の夕刻迄に乗組まるゝ事となりました。

第拾壹回

之れらかお話に及ぶは各閉塞隊員七十有七士の方々が夫れ／＼悲壯なる訣別を致されて受持ち／＼の老朽船にと御乗組みに相成り、勇しく「ルーバ」の假根據地を御出發にならうと云ふ一段に／＼いますすが、其前に少しく軍神とまで賞讃を受けられたる海軍中佐廣瀬武夫殿の御事を言上致して置かうと思ひまする。

今は故人となられましたる廣瀬中佐は露西亞と云ふ國が地廣く兵多きを持みて數十年前以前から始終東洋各國をツケ睨ひ、明治の初年には小さな千島を我國にあてがつて大い／＼樺太を無理遣に自分の有としたる如き、又た廿七八年日清戦争のおさまり方に横合からジャ／＼／＼ばツて来てどう／＼遼東半島をネジあげたる如き事等を、深くも憤りて心友の人々／＼ソんな事をお話になる時は廣瀬中佐慷慨悲憤の涙を流された事も屢次であつたと申す事です。すが、深き考へがあつて大尉の時特に志願されて露西亞に留學され、其國柄を研究なさるに連れ益々露國の憎むべき個所を見出され、其のたのでコリや如何しても一度は露國と戦争して一切手を出し得ぬ造いちめて置かなかつたら、到底東洋の平和と云ふものは及ばもつかぬ事と考へられまして絶へず先輩の八代大佐や有馬中佐方に話して居られたさうで、旅順口閉塞の計畫がウス／＼海軍部隊にモナ上りますと、其時は是非とも一方の指揮官にと日頃願懸の



有馬中佐方に御相談になつて居ましたから、事急ぐ實行と云ふ段に至りた處で廣瀬少佐は先づ第一に指揮官として報國丸をお預りになりなす事に相成り少佐の御喜びは大變だつたさうです。

廣瀬少佐は心の蕪り床しく實に昔の武士の如うな方でしたから、二月廿日も暮れ近くなりて愈々報國丸に御乗組みの時間が切迫致した時、全身をば綺麗に洗ひ清められ積鼻禪からシャツ迄新らしき分をとり出して着服致されたさうですが。ホワイト、シャツのカフスの釦は露西亞の國旗たる大鷲の其目玉を弓の箭が射ぬきたる様を彫刻しある、少佐が時勢に感ずる處あり特に注文してお拵へになつたる分をつけられ、曾て自分の意氣を歌はれたる、「正氣歌」一篇を今生の記念のお心算であつたのか朝日艦内の自身の室にお書き記しになりましたさうですが。其「正氣歌」は、

死生有命不足論。鞠躬唯應酬至尊。奮躍赴難不辭死。慷慨就義日本魂。一世義烈赤穂里。三代忠勇楠子門。憂憤投身薩摩海。

慷慨就刑小塚原。或爲芳野廟前壁。遺烈千年見鐵痕。或爲管家筑紫月。祠存忠勇不知冤。可見正氣滿乾坤。一氣磅礴萬古存。嗚呼正氣畢竟在誠子。嗚々何必要多言。誠哉誠哉猶不已。七生人聞報國恩。

書き終られてから長くも 皇后陛下の御手をふれられ玉ひたる手巾に亡き兩親の寫眞をば正しく包みて推し戴きつゝ肌身につけられ、八代大佐の履物たる尺八を携へ兩眼鏡に朱を以て「紀念」の二文字を記され、勿論心には十二分戰死を覺悟され乍ら勇み進んで出立なされましたさうですが。又た有馬中佐殿は一たび自分が艦長として乗込み居られたる音羽艦に歸へりて最後に三笠艦を訪問されたる時、愈々訣別を終り再び音羽艦に歸へらるゝ時島村參謀長は舷梯迄送り出して來て始めて中佐が惜氣もなく髯を剃りおとして居らるゝのを見出され。

「君はまあ如何したのだ、あの秘藏の髯を何故に剃つたんだ？」



と問はれますと、有馬中佐は仰ぎ見て笑みを含まれ、  
 「髯はねえ剃つて了つたよ……」。僕はねえ、今度こそ死ぬる方が  
 真箇だから東京の家族に何か生前の記念物を送つてやらうと思  
 つて余程考へたが何も心當りがなく當惑して居る處に端なくも  
 フツと考へついたのは髯よ。冥路の旅に髯を燃りて出かすど  
 もとスツクリ剃り落して遺物に送る事と仕て置いたが、大事大  
 切な髯を思ひ切りよく離れして了まつた理由はソモソソ  
 行きがよりからだ」  
 「成程左様云ふ考へで髯を剃つちまつたんだねえ。處が有馬君、  
 君にして武運非出度立派に事を成功して歸へりて来た場合は、  
 可哀想に髯は再び呼びとりてやり玉へよ。あッはッ」  
 果ては互ひに洪笑ひしてお別れになりましたさうですが。勇士  
 と勇士の御訣別胸の思ひは千萬無量であつたらうと考へます。  
 ソモソモ、萬死を決心されての御出陣でムいします處から、七十

有七士の方々が總て勇壯なる御訣別やら御紀念の詩歌など吟詠し  
 て居られますがなれど、其當時の新聞や雑誌に委細紹介してムい  
 ましたで諸君も未だに御記憶になつて居る事柄が多いのだらうと思  
 ひ。ソゾと答へて御一同が華々しき御實戦の講談にとりかゝら  
 うと存じます。其中の一ツ是非とも概略をお話し申たいと考  
 へ舟の艦長方の中でも最も有望の御人物淺間艦長の八代大佐殿  
 が、部下の閉塞隊員イザ出陣と云ふ時に餞けられた一場の訓示  
 演説でムいます。大佐は同艦隊の出陣の五勇士を送り出されま  
 す時、特別に東宮賜ふ處の大銀盃に清水を満酌して俵められ、且つ熱心  
 物語られました事は、  
 「自分が今卿等をはなちて萬死の間に送り敵港閉塞の壯舉に就か  
 しむるのは丁度血を分けた愛兒を死地に就かしむるのと一も異  
 らぬ感じがするも。其感念はとりも直さず婦人の仁であつて若  
 しも自分に百千の愛兒がありたら悉く此壯舉に就んとを希ひ、



又左様なつた場合自分にはこれに増したる大慶はないのである。あゝ可憐なる愛見よ、行け、行いて千古未曾有の壯舉に従へよ。脚等若し右手を失はば、左手を以てし、左右共に失はば、足を以てし、手足共に亡なつた時は即ち其黒鐵の如き頭顱を以て働さ、而して皆が能く指揮官の命令を選率すると云ふ事に十二分注意し、狼りに功を争ふて勝手自儘の行動をとりてはならぬ。更らに一言云つて置きたい事は、自分は脚等を以て死地に就かしむるのであつて、故に脚等は必らず死するの覺悟を以て事に従はねばならぬが。サリ乍ら吾愛兒等よ、自分は決して脚等に對して死を輕んせよと云ふのではない。又死して千古不滅の芳名を得よと云ふでもない。結局死を決して生きて還へらうと云ふ事を念頭に置かず、各自受持ちの任務を行ふて敵港封鎖の計畫を完全に成功せよと祈るのである。自分は今別に臨み、茲に酒に代ゆるに清かなる水を以てする譯は軍艦淺間の武勇を

代表する脚等が、今これより死地に就かんとするに望み、酒の力を借りて勇氣の足らざるを補ふたと云ふ議あるを避けんが爲め、脚等も能く余の微衷の在る處を体し小にしては軍艦淺間大にしては日本海軍の名譽を發揮して貰いたきものである。行け！吾愛兒等！淺間代表の勇士よ！一意天佑を確信して生死を神々の心に托し、確乎たる大安神を以て行ひて此大任を遂行し成功せよ……」

淺間艦長八代大佐の訣別の辭は實に右申し上げたる如き意味のもので、之れを謹聴したる五人の勇士は勿論聞く者悉く感極まつて泣かれたと申す事でもいいます。

此行生別と死別を兼ねたる御出發でいますから、七十有七の勇士と他の戦友方との間に斯る悲壯なる御別は至る處に行はれたのでした。前言上致したる如く其當時の各新聞雑誌に悉しく記載してありましたし又た餘りにくだしくしういいますから、講談の



筋を急ぎます爲めグツと器して了まつて急々之れから御出陣に移  
 らうと存じます。最う何も彼も御準備が出来ました處で有馬  
 指揮官を始め七十七の閉塞隊員御一同は夫れ各御乗組みの軍  
 艦から九州と申す船に一應御乗り移りに相成り、更らに其九州  
 九で五艘の閉塞船に御編成通り御乗り込みになつた處で、各指揮  
 官方は従來の各船長始め乗組員一同に對し上甲板に集まれと云  
 ふ御命令を下され、皆が寄りました上、今御實行になる旅順港  
 口閉塞に關する概略を御説明になりました。此五隻の汽船  
 が即ち其閉塞船に用ひらるゝ事となりたる旨御訓示あり、依りて  
 之れから直ぐと九州九に乗り移りて艦の命令次第内地に一應歸  
 還せられよと云ふ意味にて懸々と御話ぐいしました。今迄此五  
 隻に乗り込んで居りました各船長や乗組員の中には五年も七年  
 も十年も、間に居りました各船長や乗組員の中には五年も七年  
 で、皆が我家も同然此食堂は自分が改造したもので此機關は自分  
 が

据へつけた杯と種々の履歴がいますから、無理からぬ事には各  
 方が船其モノに御煩惱がついて居ります。今更らに別れを惜まれ  
 まして、此船と共に沈没するのであつたら生命は聊か惜しくない  
 から遠反ではあるが自分達を連れて行つて下さる譯には行きませ  
 むかと、熱心面にあらはれて懇願なしたる船長や船員の方もある  
 たさうですが。何せう殿しき御軍律ではあるし若し後でソんな事  
 が判然りて、日本海軍は決死隊とあつて希望者が少なくなつた爲め  
 非戦闘の汽船乗組員まで連れて行つたであつては不面目此上なし  
 であるから、ソコは能く御説諭がありまして、詮術なくも船員  
 り移りて貰ひたしと懸々御説諭がありまして、詮術なくも船員  
 一同は汽船の構造や機關に就て委しき御説明あり閉塞隊の人々に  
 引きつぎを致され、決死の勇士と船体とに深くも名残りを惜まれ  
 て悄然と九州九に御乗り替へと相成りました。深くも名残りを惜まれ  
 斯くて廿日は種々の御準備があつた爲め各指揮官の命令の下に



立ち働かれて夜の八時過ぎ始めて御出の仕度が一切纏まりまし  
 たから、各船の指揮官からは其旨有馬總指揮官に對し御報告にな  
 ります。佐殿には天津丸乗組の十六名を一室にお集めになり、今  
 回の閉塞行動に關して一場の訓示を致され夫れが済むでからお茶と煎餅  
 とを御取り寄せになりて殿下に申し渡されたる事は。  
 「今から一同茲に打ち集ふて心計り別れの會を開らかうと思ふが  
 皆が知つたる如うに酒は洋酒でも麥酒でも日本酒でも思ふま  
 とり寄せる事も出来るかなれど、若し萬一我々が最後にあたり  
 て酒の匂ひがする如うの事ありては日本軍人の耻辱になるから  
 ワザと取り寄せざりし故へ、今晚茲にお茶と煎餅とを以て訣別  
 の會を開く事に仕たのである……。」夫れから今茲に能く話  
 を仕て置く事は、今回の壯舉は一同生命を投げ出しての行動で  
 あるから皆が安神して一身を指揮官たる此自分に任して貰はね

はならぬ故、余を以て若し生命をあづくるには不足に思ふ者が  
 あつたら、決して遠慮はいらぬドシ〜歸へりて貰ひたさものだ……。」  
 と、有馬中佐何と考へられたるものか今更らにヨソ〜敷相談  
 をモチ掛けられました事とて、十六人の中の一人は臆面もなくツ  
 カ〜と進み出で、  
 「今更ら乍ら事新しき中佐殿の御言葉と覺へたり、今となりて女  
 々敷も生命を惜み後すざりする如うな臆病者は一人もいません  
 ぬ、若し中佐殿に御疑念もありましたら之れ此通り私が此場で  
 死んでお目にかけますから……。」  
 と云ひ半して短刀ズラリとぬき持ちて、血相かへつゝ今にもつ  
 き立てんと仕升のを見てとられ有馬中佐は満足の御模様。  
 「オイ〜早まるな、慌てるなよ、心体確かに見届けて自分も安  
 静した。」



と、夫れから壯快な四方八面のお方に夜を更かされて一同急ぐ。他の各閉塞船にも夫れのお催しがあつて七十七勇士は出發の時、今や遅しと待ち構へて居られます。

斯くて明れば二月廿一日、閉塞船出發の御當日です。勇士達は殆んど喜びの餘りに夜の目もあはさず待ち明されました。天候俄に一變して風強く浪暴らくコンな天氣廻りでは到底乗りつけ。ても仕事の上には萬事困まるから、如何はせんと有馬總指揮官は其旨信號以て旗艦三笠に訓令を仰ぎに相成りますと、之れに對する三笠艦よりの御返辭は斯うでした。

「閉塞の事は一に貴官に任かす。」

と、夫れで有馬中佐は作業の際の萬一を慮りて大事の上にも大事をとり、廣瀬少佐殿を始め其他の指揮官方にも信號其他で能く御打ち合せあり、結局今日一日だけ出航を見合はして天候の如く

何を見据へたる上にせんと協議一決し、其旨再び旗艦に復命され。て一日だけ延期されましたさうですが、翌けて廿二日は前日にう。ツて變はりて風波は強き、冬には珍らしき快晴となりましたから。午前十時より徐ろに航進を起し御出發と云ふ事に相成りました。

第拾貳回

前段言上致したる如く豫じめ閉塞隊御出發と定まりました。二月廿一日は、前夜からひき續きて風暴らく浪が高ふりましたので。指揮官の有馬中佐殿にはヨシ行くとは行つたとしても若し萬一風浪の爲めに作業が思はしく運ばず、勿論生きて歸らすとは決死隊。七十有七士悉くの決心ではあるが、犬死する計りが戦争の上から。して何の益にも立たぬ事なればと御自分の考へを信號もて旗艦に御尋ねになりますと、早速「閉塞の事は一に貴官に任かす」と



云ふの御返事であつて、コ、即ち東郷司令官の長官たる處一た  
 び其人物を信じてお任せになつたるからには進退共に其指揮官に放  
 任して聊か驟を御入れにならぬ寛仁大量、實に將に將たる御人物  
 と申さねばなりません。  
 夫れで有馬指揮官は他の指揮官との御協議の上兎に角翌廿二日  
 風波のなぐのを待つて御進發と云ふ事に決せられました。扱て  
 明けて見ますと果して風もなき従つて浪も静かになりました。愈  
 々其夜を期して閉塞實行と云ふ事に御計畫は逐一纏まり、其夕刻  
 には聯合艦隊の全艦艇悉く最後の根據地「ルーバー」に集合せら  
 れました。前にも一寸申し上げたる如く「ルーバー」から敵  
 の軍港旅順口は餘程近く、一時間七哩の速力で御出になる。僅か  
 五時間足らずで御到着になる位の距離でありませすから、同夜の  
 十二時過ぎ少ししでも敵の警戒が緩んで居る真夜半に御到着になる  
 には自然其日の午後六時過ぎ根據地御出發と云ふ順序になります。

ので全艦隊は閉塞隊出發に程好き時刻が参る迄の間ソコに假泊し  
 て御待ち合はせと云ふ事に相成りました。  
 時計の針は日露兩國海軍の運命をかけて勇みに勇む七十有七勇  
 士の方々にはもどかしさの極みながら、何時かは定めの時刻午後  
 の六時と相成りますれば、暮るる日に早き冬の日の日輪もトツプ  
 浪の間に落ちこんで了はれ暮れの暮は遠き彼方より次第々々にひ  
 きはえられましたので、時刻は好しと有馬指揮官には愈々出帆進  
 撃の旨信號もて旗艦三笠に御報告を遊ばし、五艘の閉塞船は夫れ  
 ツと云ふなり隣く間に錯の鎖をまき上げ今に御進發と相見へます  
 る。此時旗艦三笠からは各艦に對して登艦禮の御命令が下りま  
 した。此時各艦何れも此海軍禮式を施されました。シテ此登艦禮と  
 申しまするはあらゆる海軍禮式中最高のものださうで平時でした  
 が、天皇皇后陛下御臨幸の時のみ施さるゝ禮式と云ふ事です  
 が、今茲に七十七士の勇將猛卒方が國家の爲めに萬死を覚悟して



壯舉の途に上ばられれまするで、東郷長官特に破格を以て此最敬禮式を施し勇士の行を盛んにされたるは蓋し至當の御所置かと考へまする。

夫れは夫れとして七十七士の決死隊を乗せたる五隻の閉塞船は今將に根據地を出發して壯舉の途に就んとし、艦艇の方では最敬禮式登舷禮を爲さると同時に旗艦三笠の上甲板には海軍音楽隊が一齊に吹奏し始めたるは勇壯儒夫も一たび之れを耳にしては思はず奮ひ起つ程の「進軍の譜」が、浪の上を這ふ如うにして流れ去りましたかと思ふ間もあらせす、今回は三笠の將士が一齊に節勇しく特に閉塞隊諸勇士を送るべく作歌せられましたる軍歌をば合吟されましたが、扱て其軍歌の文句は左の通りであつたと云ふ事です、

敵の軍港封鎖して

旅順の港を閉塞し

制海權を我の手に

唐の仁川、天津も

我が大君に報國の

我が武揚りて世の中に

八百萬の神々も

いさを立てよ大丈夫

勇みて進め決死隊

確かに收むる此一舉

豊けき武州と諸共に

堅き心をあらはさば

譽れは高く立ちぬべし

猛けき勇士を守るなり

勇みて進め決死隊

而うして此軍歌は三笠艦計りでなく敷島、朝日、富士、八島などの大戦艦は何れも盛んに唄はれて、同時に之等の大軍艦十隻あまりは單縦陣の緩速力で五隻の閉塞船の周圍を回轉されつゝ、閉塞船の前に來ると何の軍艦でも「決死隊萬歳」と高く叫ばれるか、其時の悲惨にして且つ勇壯なる光景は今思ひ出しても目前にチラつき到底忘れる事は出来ぬと、第一回閉塞の行動に參加しながら武運に強くして今猶ほ生存し居らるゝ方々は述べられるさ



うにムい升。

斯くて閉塞の決死隊を送るの禮が濟みますと時間も大分と経過して日はトツブリ暮れて了ふ。イザ進發と相成りました。閉塞船は天津、報國、仁川、武揚、武州の五隻と斯ふ順序を以てお進みに相成り、此閉塞船の先頭に立ちて第四驅逐隊の司令たる海軍中佐眞野殿に其配下に屬する發雲、夕霧、不知火、陽炎の四隻の驅逐艦を幸ひ進ませます。此等四驅逐隊の任務は申すと勿論閉塞隊員は美事受持ちの閉塞船を沈めた後で夫れへらるゝ事も一ツの任務ではありませぬ。折柄ソを收容して助けは折柄でもなく五隻の閉塞船が各々目的地點を撰定して進發は閉塞作業の妨碍を試みやうと致します。時に、美事に之れを擧退して閉塞船の爲めに道開らさるる取直さす先拂ひの浪田彦で。夫れ

と又た閉塞船の後からは水雷艇隊司令海軍少佐櫻井吉九氏が配属の水雷艇、眞鶴、千鳥、燕の五隻を率ひ随從せられました。此水雷艇のお役目は前の四隻の驅逐艦とは大に趣きを異にして、前申上げた如く閉塞隊の方々にして夫れ、爆沈更らに短艇にのり移りて退却せらるゝ際沖合に待ち受け片ツ端から收容せらるゝと云ふ御任務であつて、今試みに此閉塞隊一同の御進航の模様順序を申し上げます。

驅逐艦隊

閉塞船隊

收容水雷艇隊

結局斯んな風に都合十四隻の艦艇船で閉塞の壯舉に従はれたのでムいしました。斯くて右閉塞隊の一行は時を見圖らつてソロソと旅順の港の沖合まで御進みになつた時は早や廿二日の夜も丑滿近くでムい



ましたが、先登に立ちてお進みに相成りたる驅逐隊別けて雲艦  
 は一番マツ先きでありましたから間に能くすかして行手を  
 御覽に相成りますと、其日は早朝から風波が穏では居りまし  
 が未だく餘波は大山の艇ねるが如くすい分のシケにも關は  
 敵の方では之迄數回の激しき味方の攻撃に十二分怯たち  
 らでもムいませうか時折り海上の艦隊からも又た陸上の砲  
 から何萬燭光と云ふ探照燈の強い電氣燈の仕掛けで  
 ムいましてサツと一たび其光りをふり廻す時は丁度眞晝の如  
 明るさとなりて數里も先きから敵艦が忍んで襲來するの如  
 に見へると云ふ調法な器械でありますが、敵は斯る風波激し  
 夜半にも關はらず用心オサく怠りなく閉塞艦の一隊がお忍  
 なるのには尤も不都合である其探照燈をふり廻はして居り  
 前申上げましたる如くマツ先きにお進みに相成りました  
 は將校や下士卒の方々が頭をおつめてこれに如何も困まる、

んな風では閉塞隊の連中が賑や仕事をすることに困難であらうに……  
 と種々戦友の身の上を氣遣つて居られます。驅逐隊司令の眞野  
 中佐殿がツカ／＼とやつて來られました。  
 「何だ、アレ位い故障を氣にしてなるものか、十年前の日清戦  
 争の折柄威海衛攻撃當時の事を思ひかへして見ると之れん計し  
 の事は未だ平氣だよ……」  
 と部下の將士を勵まし立て、時分はヨシとドン／＼御進みに相成  
 ります。  
 シモく此眞野中佐殿は日清戦争の當時大尉で五號水雷艇の艇  
 長を務めて居られました。さうですが、あの威海衛に逃げこもつた  
 丁汝昌の統率したる北洋艦隊が何時迄待つても出て参りませぬで  
 愈々水雷艇隊を放ち大襲撃を加へられました。時、眞野大尉（今  
 は中佐）の指揮せられたる五號水雷艇も幸ひにして襲撃隊の中に  
 加へられ、間に紛れて堅固なる防材を乗り超へ不敵にも威海衛の



港内深く闖入なされ、敵が頼み切りの堅艦三艘迄も美事に破壊せられて偉勳を奏しおひき上げになる時不幸にして敵の一弾飛び來たり五號艇の機關部に命中し、一時に機關兵六名迄もウチ仆すと云ふ大變事がモチ上がり、艇は大事の要部を撃たれましたからバツタリ運轉は止まりて了います。塞さは塞し艇は動かす敵の方では今にも追ひかけて來さうですから眞野艇長殿は部下一同に訓令され急を急行かぬときまつたら敵の軍艦なり水雷艇なり乗りに込んで斬死をするか、夫れも出來ぬ時は深く切腹して日本男兒が晴れの最後を見せてやらんと協議は決して居ります處に、天佑とでも申しませうか恰も好し第十號の水雷艇が参りましたから眞野艇長をば曳船致し難なく沖合までのがれ出されましたから眞野艇長を始め乗組みの御一同は思はぬ生命をお助けになりましたから眞野艇長がいますから、年こそ變はれ時も左程違ひませす、敵の軍艦を目前に見て今丁度御襲撃にならうとして居ります處眞野司令

殿には端なくも其當時を想ひ出して味方の士氣を鼓舞せんと「十年前の日清戦争當時の事を思ふてみると之れ位いの事は未だ平氣よ……」と申された次第に云います。斯る間にも旅順口にと次第々々にお乗りかけになりましたから聞ながら名にし負ふ老鐵山や黄金山の砲臺は幽かに見ゆる如うになりましたが。如何した譯のものか哨艇らしき又は監視船らしきものは一隻も見へませんので眞野中佐殿は時間と距離とを能く能く考へ合はされ、時分はヨシと續けさまに汽笛を二回程鳴らされました。之れぞイツ何時閉塞の仕事にとりかゝつても宜しいと云ふ合圖で云いますから閉塞隊司令の有馬中佐殿には何御猶豫なされるべきや、直ぐと、

「全速進め！ ツキ込め！」

と云ふ號令があると同時に後にと續く報國、仁川、武揚、武州と天津丸を合はして都合五隻の閉塞船は宛然弦上を放れし飛箭の如



く、互いに遅れじと何れ劣らぬ決死隊の面々虎の口とも例ふべき  
 敵の軍港旅順口にお乗り込みになり相成りました。  
 お話の順序として閉塞隊指揮官有馬中佐殿がお乗込みに相成り  
 先登に立つて居られた天津丸の戦況からお饒舌を始めますと、  
 天津丸は前申上げました如く閉塞船隊の先登に立ちてズン  
 と老鐵山及び黄金山の間迄お乗り込みになりましたが、不思議  
 な事には敵の哨艦又は哨艇と思はしきものはたゞの一隻も居りま  
 せぬ計りか成程探海燈はチラ／＼と絶へ間なくふり廻はして居り  
 ますかなれど、幸ひにして其光りは一ツも天津丸には届きませぬ  
 夫れで闇の中にも旅順の入口は大概コ、ラ邊りならんと思はるゝ  
 所をズン／＼お進みになつて居りますと艦の方に立ちて居た水  
 先案内からして船体は少しも進まぬ如うになつたと云ふ報告が  
 いたしました。  
 夫れは大變な事になつて來た、今時分未だ十分目的の地點

迄は乗り入りても居ないのに船が進まぬ如うになつたと云ふは何  
 故であるか、何か大した障礙物でもあつてかど一同氣が氣でなく  
 お調べになりましたが其原因は一向明かなりません。淺瀬かサな  
 くは防材にても乗しあげたものでせう幾許ゴ一へを付けてもゴ  
 ースタンをかけても船体はムンシリ動きも致しませず、有馬中佐  
 殿は山賀大機關士とお二人で面見合はせ。  
 「困まつたネー……」  
 「困まつた事になりました……」  
 と同じ事をくりかへして居られます處に闇の間にも機關の運轉  
 する響が聞へまして、ドン／＼ツツかけ参りましたるは第二番船  
 で廣瀬少佐が指揮さるゝ報國丸でいますから最早分時の猶豫も  
 なりませぬ。  
 「沈没準備……」  
 有馬中佐は一聲高く御命令になりましたから各兵曹や水兵、機關



兵の方々は何れも沈没に關する受持ちの仕事をなされ、其中に多量の爆發火薬に點火なされましたから何せう堪まるべき、一發轟然たる響きと共に青、赤、紫等の火焰と白、黄、黒等の烟りが一時に揚りて其破壊口からは潮水がドン／＼渦巻きつゝ這入りて参りますのでした。

我軍がドンな事を仕て居るのかソンの事は勿論承知致しましては兎に角襲來と云ふ事丈けは始めて覺り俄に探海燈の光りをふり向け、天津丸を見かけて一發ズドンと撃ちかけましたを始めとし、砲臺からも各軍艦からも沈みかけて居る天津丸を的に筒先き揃へてズドン／＼と百千發の大砲を一時に撃ち出しましたから、何れの事はない天津丸に乗り組みの決死隊の面々は恰も彈丸の天井彈丸の壁の中に居るやうな心地致され、夫れこそ何と形容も出來兼ねぬ凄じさであつたと云ふ事を承はりましたが、暫時すると何分無

茶苦茶に驚き忙て、敵の軍艦からは發砲致しました故二三同志撃ちを致しましたらしく、夫れに懲りましてか軍艦からは發砲は一時見合はせ陸上の砲臺から計り發砲を續けて居りました。

健氣にもチヨロ／＼と乗り出して參り天津丸の水雷艇が何時に水雷を放ちました處、美事に命致しましたから其破壊口からした。湖水は勢ひよくドン／＼侵入し船体は非常の速力で沈みかけました。何せう沈没が大目的で、決死隊の方々は有馬中佐殿を始めと仕て貰つたも同じ事、不敵の決死隊の方々は直ちに短艇を下ろされ、何れも方が面見合はして打ち笑まれ、直ちに短艇を下ろされ、した。敵弾命中して第一の短艇は破壊せられ一切役に立たぬ如うになつて居ました。が其他の短艇は悉く無事で、一切役に立たぬ如う者も出さず一同無事で夫れ／＼短艇に乗り移らんとして一人の死傷



すると、斯る間に時間は大分と経過して廣瀬少佐の指揮せられたる報國丸が何時の間にか天津丸につツかけて参りましたから、有馬中佐は直ちに命令を下し危険燈を天津丸の後橋高くつり上げて警戒を加へんとされたが運悪しくも敵の一弾は空に呻りて飛び來たりましたから、何かは以て堪まるべき橋は美事申程よりウチ折られ危険の合圖燈は海上遙かにウチやられましたさうで、扱も名にし負ふ軍神廣瀬少佐殿の御奮戦如何になりましたものやら一服して次ぎの段にお伺ひ致しませう。

第拾参回

イザ之れから有名なる軍神廣瀬少佐殿御奮戦の物語りですが、前言上致したる如く先登に進みたる有馬中佐指揮の天津丸は不幸にして其針路を過まり何物かの障礙物に乗しあげて進退

共に一寸動きも出来なくなりましてから、止む事を得ず爆沈せられまして今に至る乗組員は短艇に乗り移らんとして居られますと夫れとは知らず二番船の報國丸が、廣瀬少佐指揮の下ドン天津丸につツかけ参りましたから、若しか再び自分等の二の舞でもやッて除けたらばと気が気でなく、部下に命じて危険を報する合圖燈を天津丸の後橋につるさせになりましてが運悪しくも敵彈飛び來たり、橋の中程から美事ウチ折り合圖燈は海の只中に飛んで了いましたから、詮術なく危険を報する爲めに有馬中佐を始め十七名の方々は身の危きを忘れて報國丸の方に向い佇立ち上がり、一齊に聲ふり立て、  
「報國丸面構ッー」  
と三回程續けさまに叫ばれましたから、幸ひにも廣瀬少佐は其警戒を聞きとりて直ちに楫をとり直し天津丸の爆沈仕かけて居る横手に船首を持つて行かれ、勳々目的の地點になりましたで急々投



船と云ふ事になりましたが、此方天津丸の方では不十分ながらも  
 其目的を達して潮水は早や上甲板迄も洗ふ如うになりましたから  
 有馬中佐を始め一同二隻の短艇に分乗して沖合の收容艇を目蒐け  
 ドン／＼お引き上げに相成りました。  
 斯くて廣瀬少佐の報國丸は大概目的地點に到達せられましたか  
 ら愈々停船投錨と云ふ事になり、其受持ちが二等機關兵の武野敬  
 次と申さるゝ方でムいしましたから、右の武野機關兵は錨を下ろさ  
 んとして居られますると敵の探海燈がサツと光りを投げて白晝よ  
 りも明るくなり、同時に一發の砲彈が空に啣りて飛び来たつたヤ  
 ヅが不運にも其錨鎖に命中して破裂し、破片は武野機關兵の肩に  
 中りて重傷を蒙けられましたで膝々たる硝煙の中に倒れられまし  
 たが勇士の自分シツカと握りたる兩の手はイツカな鎖を放さず。  
 暫時すると氣をとり直して傷手も忘れ一生懸命の切れかゝつた  
 錨鎖をつなぎ止めて投錨に努められました。何分容易ならざ

る重傷に出血夥しく力は次第々々に衰へて錨を下ろす事が大變暇  
 取りますから、旅順港口の潮流は非常に早く船体今にも推し流さ  
 れんと致しますので廣瀬少佐は堪まり兼ね、  
 「武野！ 武野！ 何故錨を下ろさぬのだ……、何を恐圖々々仕て居  
 るのか……」  
 と叫びながら立ち寄り來られますと、不憚や苦しき聲をふり上げ  
 て。  
 「指揮官殿、私は負傷を仕て残念ながら五体が自由に働けません  
 ……」  
 と如何にも口惜氣なる武野機關兵の言葉。此時探海燈の光りは再  
 びサツと閃きて其明りに廣瀬少佐は能く／＼武野の姿を見られま  
 すと、然残や全身唐紅ひの血潮に染まりて容易ならぬ重傷なる  
 に怯ます屈せず双の拳に確乎と錨鎖を握り詰めて勇氣は面に溢れ  
 たるに、少佐も一方ならぬ感に撃たれ、



「ヨシ、負傷を仕ては誰れしも同じ事働けるものぢやない……  
オイ、誰れか来い、武野は負傷を仕たから誰れか早く来て手  
傳つてやれよ……」

と叫ばれましたで、直ぐ其近所に居て働いて居られた藤本金太郎  
と云ふ一等機関兵の方が駆けつけて来られ、武野機関兵に代りて  
直ぐと錨鎖を繋ぎ止めて投錨せられましたから直ぐと爆發準備に  
とりかゝり、間もなく點火致されると同じく色々の火焰や硝煙を  
ふきあげて天地に轟く大きな爆聲と共に報國丸は次第々々に沈み  
かゝりました。

ソコで今度は短艇下ろし方と云ふ段になりましたが天津丸同然  
第一號の短艇は敵彈の爲め打ち壊はされて居りますから、直ちに  
第二號の短艇を下ろした處で一同は廣瀬少佐に打ち向ひ、

「指揮官、早くお乗りになつては如何ですか……」  
促し立てますと少佐は泰然として一向肯き入れられず。

「間違つた事を云ふな……、指揮の任務を持ちてるものが一番に  
本船を放れると云ふ事があるものか。サア一同早く乗つた  
俺は何うせドン尻じや」

有繋は軍神と迄評判をとられました丈けあつて斯る急場にも悠々  
と落ち着き拂ひムンシリ動きも致されせんから、日頃其氣質は  
十二分知りぬきたる配下の人々栗田大機関士を始め一行十六名の  
方々は勇將の下弱卒なしの體裁に漏れず、慌てず騒がす秩序正し  
く二隻の短艇にお乗り移りになりますと。

「武野はドウした？ 乗りて居るか……」

と部下を愛するの念は人一倍なる少佐、重傷に苦しむ武野二等機  
関兵の事を氣遣はれて砲煙彈雨の間にも念を推され、

「乗りて居り升、皆残らず乗り移りましたから指揮官早く……」

と栗田大機関士に促し立てられ、サラばと綱を傳ふて十二分柔道  
の嗜みある少佐は身も軽く短艇に乗り移られましたからイザと計



り本船を漕ぎ放れんとすると、少佐殿には何思ひ出されてか。  
 「暫時待った……、スンでの事俺は大事な物を忘れて行く所ろじ  
 やった……」  
 と云ひ半して佇立ち上りて今に沈没し終らんとして居る本船に立  
 ち歸へらんと致されますから、大沼兵曹は慌しく引き止めて、  
 「指揮官殿、私が行つて参りませう。お忘れ物は何でムいますか  
 ……」  
 早くも綱を握りて今にも跳ね上らんと身構へたるに、少佐は右手  
 をウチふりて、  
 「大沼兵曹、止めさせよ、ドウしても俺れが行かねばならぬ……  
 他でもない。忘れ物は武士の魂じゃ……」  
 「何でムいます、魂とは？」  
 「わからぬ奴等だなる。軍刀じゃ……、軍刀じゃ……、真逆に自  
 分の靈魂を他人にとつて貰ふ譯にも行くまいから俺れが行つて來

る。暫時待ち居て呉れよ……、ハ、ハ、ハ……」  
 と洪笑ひをして少佐は大膽不敵にも船の陰から敵弾と飛び交ふ  
 報國丸の上甲板にと飛び上られた。此時潮水は爆破口及び敵  
 弾の貫通孔からしてドシ、侵入し早くも中甲板は一杯に漲り溢  
 れ。斯なる早ひものださうで見ると、栗田大機關士を始め一同は切  
 りと少佐の身の上を氣遣ふて、  
 「指揮官、少佐殿」  
 と交はる、叫び立て居られますが何の返辭もムいませぬ。  
 ソコで大沼兵曹は愈々堪まり兼ね短艇の中に佇立ち上りて今にも  
 少佐の跡を尋ね本船に飛び上らんと身構へなし居る處へ、少佐は  
 満身に潮に浸り乍ら右手に軍刀提げて上甲板に現はれられます。  
 ソコで栗田大機關士を始め一同のお喜びは例へん方なく急ぎ短  
 艇を本船に漕ぎ寄せんと致されましますかなれど、報告丸と短艇と



の間を流るゝ潮は早や今にも沈没せんとして居る渦巻きの爲め矢よりも早く、一間餘りも隔たりて如何しても曳き寄せせる事が出来ぬのを見てとられたる少佐は、身に十二分柔術の覚えがふいますので、

「ヨシ、俺が飛び込むからワザ、着けなくとも宜いが、ヒツ、くりかへらぬ如う皆が注意を仕て居て呉れよ」  
暫時身構へして大概の見當がついたかと思ふと廣瀬少佐は兎跳ねに駈ねて帽子を右手に軍刀左りに、バツと飛び移られたる其態は昔八島の戦ひに、義経の八艘飛びも斯くやと思ひ合はされて一同嘆聲を揚げたと云ふ事であらう。最うはやヨシと云ふので短艇の綱を断ち切り本船の陰を潜ぎ放れになりますと陸上の砲臺からは例の幾萬燭光かの探海燈の光りでバツと照らし出しては、短艇目覚めて一度に撃ち出す大砲や機關砲の弾は宛然と飛び交ふ如く、凄じな形容するに辭もないと云ふ事だ。其探海燈の光

りを潜り、少佐の短艇は沖合遙かの水雷艇を指しドン、清き出しに相成ります。探海燈の光りは絶えず廻はされ沖合指して潜ぎいつる短艇を目覚めてはドン、とつるべかき大砲をウチ出しますで、其凄じい事は到底言葉や筆にはあらはす事出来ないと云ふ、斯る九死一生の場合にも有難は廣瀬少佐殿でふいます、平常と少しもかはり目なくいろく、と冗談話でもして笑つて居られます。

「ドゥじや、皆とも畢丸は下がつて居るのか……」  
「番長のお尋ねは餘程妙です。我々アラクン男に向つて畢丸は下がつて居るかとは、ソリや一体何の事でありませうか……」  
「おからん奴等だなる、ユンな時、臆病な奴にかぎりて畢丸がチ、こまつて居るのだ……。若しもお前達が眞箇の元氣者じやつたら必らず畢丸はメラリとブラ下つて居るには相違ないよ。ドゥだ下つてるか上がつてるか、探海燈の光りで實地の検査をや



ッて見ないか……」  
 と一同が笑ひ興じて居られまする間にも砲弾は相變はらす雨霰と  
 飛んで参りますが、ドゥした譯のものか皆悉く海水にウチ込んで  
 了まつて中らうとも致しませぬ。  
 「早く撃たぬか……、幾許でも撃つたが可い……、貴様等の彈丸  
 が中るものか」  
 廣瀬少佐は時折り「ふり願へりては切りと搦擲になる。其大膽  
 不敵なる事は確かに底なしジャと一同が此時始めて感心なされた  
 と申す事です。」  
 指揮官の廣瀬少佐が斯る元氣でムいますから部下の面々何れも  
 身は今九死一生の境遇にある事もうち忘れて了ひ、ワア／＼と笑  
 ひ興じて恰も黒鐵の如うな双腕に捻りをかけ軍歌を唄ふ方もあ  
 れば勇しくカケ聲をなさる方もあり沖合さして疾風の如く漕ぎ出  
 され、彼れ之れ二三海里も漕ぎつけたかと思ふ頃開をすかして一

隻の水雷艇が見へ夫れが丁度「燕」のやうでムいますから、一同  
 は屹度味方の收容船に相違ないぞと暫時漕手をやすめ様子を伺ふ  
 て居られますると、先方でも話聲を聞いて居られましたのか、  
 「ソコに來られたのは廣瀬少佐じやないか……」  
 と云ふ聲が突然開の中から致しました。  
 「さうだ！ 君は桑原大尉じやなあ。」  
 と少佐は答へられ、サア短艇を漕ぎつけよと云ふので、一同は一  
 方ならぬお喜びワツと歡聲をあげて一散に短艇を漕ぎつけ、何だ  
 か生命でも拾つたかの考へで先きを争ひ收容艇に乗り込まんとな  
 されますので、少佐は此時憤然として聲あらしげ、  
 「何を貴様等は慌て騒ぐのじや、俺が命令を下さぬのに勝手な真  
 似をするとは實に不都合な奴等じや……、俺が一番に乗り移り  
 て更らに命令を下すから夫れ迄はシタバタ騒ぐ事は相ならん」  
 と嚴かに命令を爲され、先づ自身一番に收容艇に乗りかへられま



したから部下一同はブー／＼こぼして居られます。少佐は平素が部下を愛して何事でも部下からマツ先きと云ふと聞いて居つたが、左様でもないじやないか。『全くだ、指揮官は今になつて俄かに生命が惜しくなつたんじゃないか知らん』などいゝ、いろ／＼下馬評を試み居りますので栗田機関士は聲を厲まし、  
 『ソンの馬鹿な事を云ふものではない、一同静かにして指揮官の命令を待つて居ないか……』  
 と制止して居られます。少佐は再び收容艇の甲板に現はれ出で、  
 『サア之れから乗り移るのじやが、一同俺が、から順番を云ふから其順序で静肅に乗り移らねばならぬ、シタバタ騒ぐと其分ではさし置かんぞ。栗田大機関士から其次ぎは名譽の負傷者武野一等機関兵だぞ』  
 秩序正しく一人宛收容艇に移乗せしめ、夫れが終つた處で一同を

收容艇の甲板に整列せしめ點呼をして人員が一人も缺けて居ないと云ふ事を確められましたから少佐は始めて安神の胸撫で下し、『先程の如うに一同が先きを争ふて亂暴に乗り移るとなつた場合負傷してゐる武野機関兵も居るのに若し萬一短艇が傾斜して顛覆しても仕やうものなら夫れこそ一大事だ。あゝ云ふ時が一同の氣が弛んで却つて大怪我をうち出すものだから以後屹度氣を注げねばならぬぞ……』  
 と、／＼迄も部下を愛し遠謀深慮のある少佐の言葉に今更らぬ如く一同感激し、先きに陰言云つたのを心に恥ぢて斯る智仁勇に富んだる指揮官の指圖の下にはヨシや火水の中と雖も厭ふものかはと協議し、殊に武野一等機関兵の如き此事を傳へ聞きて感慨胸に迫まりホロ／＼と鼻泣きに泣いたと云ふ事であり升。  
 先登に進んだ有馬中佐の天津丸、二番船たる廣瀬少佐の報國丸以上二隻の閉塞環沈の様は之れ迄にお伺ひ致したで、今度は齋



藤大尉の仁川丸、鳥村中尉の武州丸、正木大尉の武揚丸とコンな  
順序でお話を致さねばなりません。各船大異作天津や報國と光  
景まッた閉塞船退去の模様は如きは各船大異作天津や報國と光  
略ぼ同じお話を繰りかへす如き次第にはなりすから之れを省く  
事に致しました。齋藤大尉の仁川丸には燦々沈問際の一隻の艦  
艦がやッて参りて魚形水雷を發射しました。さうで適當の箇所に艦  
沈され先づ第一の御成功。夫れから武揚丸にも同じ敵の艦を逐  
が襲撃を試みました。何分遠方は十二分で自由自在に勝つて衝  
致されました。何分遠方は十二分で自由自在に勝つて衝突を命  
分軍港を乗り廻す吃水浅き小型の驅逐艦にボロ船の速力鈍  
閉塞船を以て衝突を試みるべく云ふ事は元無理な御注意で運  
す。悪事には丁度楫の所を撃ち壊し、其間に敵の巨弾が飛んで  
夫れが爲め淺瀬に乗り上げられ十分目に達せられなかつ

たのは如何にも残念な事に思ひます。  
之れで各閉塞船燦々沈の模様は一通り相濟みましたが。各船とも  
閉塞船を御引き上げに相成りて短艇を操り沖合なる收容艇に向け  
名の退却と云ふ時になつて、武州と武揚の二船には幸ひにも一  
人の死傷者をださず、夜の中に何れも何事なく乗移られました。  
が。齋藤大尉の仁川丸では大尉を始めとして十六名の方々は二隻  
の短艇に分乗し、收容水雷艇を目指してひき上げて流され、其後漸  
如うな間に方針を過りて一晝夜以上も海上に漂流され、其後漸  
く無人島に漂着になる等昔語り的小説よりも未だくズと一面白  
お話を澤山いませう。餘り長いと諸君のお疲れ一服

第拾四回



扱ても之れからが海軍大尉齋藤七五郎殿引率の下に仁川丸にと  
 乗り込まれたる都合十六名の方々が短艇に乗り移りてお引き上げ  
 になるに付き、非常の御困難全で小説にでもありさうな事實を遊  
 ばしたる第一回閉塞行動の中で最も面白き一條のお話に移るので  
 ムい升。

仁川丸も天津丸や報國丸同然夫れく閉塞の作業を遊ばし最後  
 に爆発薬に點火なされて愈々船は沈みかけましたで、齋藤指揮官  
 には早く短艇を下ろせと云ふ御命令、第一の短艇はスルと海  
 に浮びますと一番に南澤大機關士殿が御乗艇、引き續き一等機  
 兵の青木五郎同土屋時次の兩名が乗り移られ今度は梅原健蔵と機  
 之れは二等機關兵の方の乗り移らうとして居らるゝ時敵の一弾は  
 飛び来たりて短艇の綱をブツ切り切斷してしましたから、短艇は  
 は今し沈没せんとして居る本船仁川丸の渦巻きと旅順港口の矢を  
 射る如き潮の急流に推し流されアツと云ふ間もあらせす沖合遠く

流れ出でんとしますので。齋藤大尉は一生懸命早く漕いで今一度  
 漕ぎつけぬかと叫ばれまするが何せう二人やソコらのお力で漕ぎ  
 戻しが出来ませうぞ、見る／＼間に短艇は海に推し流され僅に南  
 澤大機關士と青木、土屋の兩機關兵都合三名の勇士を乗せたる儘  
 沖合遙かの闇の中に陰れて了ひましたで。齋藤大尉は仁川丸の  
 上から此有様を眺められ「今になつて此有様は何事ぞ……」と一  
 タラ三名の勇士を見す／＼殺して了ふとは……」と一方ならず哭  
 げかれまするが詮術とてもムいません。  
 止むを得ず新たに第二の短艇を下ろしかけになりましたが、ア  
 レや之れやで大分と時間もとりましたし仁川丸は早や八分方沈  
 して潮水はザンブ／＼と計り上甲板を洗ふて居ると云ふ騒ぎに齋  
 藤大尉殿は早く／＼とあせり立てられ一同立派にお乗り移りにな  
 りました。二等機關兵の梅原健蔵殿が獨り本船に残り居りて居  
 欄にくゞりつけある綱を切斷せんとして居らるゝ時であり升て黄



金山の砲臺から撃ち出しましたる砲弾が飛んで来て梅原機関兵の胸部に命中致したから堪つたものじやあゝいません、バツとある血煙りが現世の名残り大君への志し、有紫の勇士ながら一言の言葉もエ擧げず海中に落ちて姿は闇に見へなくなりまして、齋藤大尉は、

「天晴れ梅原！ 出来した、出来した。實に潔き最後を任て呉れた

と叫びて恭々敷お吊ひになり、夫れより皆して短艇を漕ぎ出され探海燈の光りを避けて關ひ所ろのみを縫ひつゝ一生懸命に漕ぎ出されましたので暫時すると方角が薩ッ張り分らなくなつて了ひました。デも構はず精限り漕いだらば今に味方の居る方に出るであらうと夫れ計りを樂みに大分と久しき時間を交代にお漕ぎになりましたが一向收容艇の居る所ろに出て参りません而已ならず、漕ぎば漕ぐ程皆目分らぬ所ろに行つて了ふ計りの有様になりました

が、別に鳥村中尉の一行が乗られたる短艇も右同然行衛不明となつたと云ふ事でありませぬ。

ソコで齋藤大尉の一行を乗せたる短艇は何時迄お漕ぎになつても收容艇の影は寸分見へませぬで、之れは何でも針路を過まつたに相違なければ慌てすと夜が明けける迄の間はボチ／＼漕がんとお談合ひになつて居ると道かの彼方に燈火が浪間にホノ見へませぬ。アレは愈々味方の收容艇に相違ないからと云ふので夫れ合圖をせよと一同勇み立たれましたが、其合圖をなさる手段がムいませぬので子供だましの如うな仕事ではあるが詮術つきて隣りに火を點じては幾回となく交はる／＼空中になげ上げ、未だ明けやらの間の中にも萬一を頼みてハンカチ打ちふる方もありワイ／＼と騒ぎながら近寄つて見られますと、件の燈火は航海燈の光りでムいませぬより一或は敵の軍艦ではないかと俄に萬一を氣遣ひ出され、夫れより一同が息を殺して件の船が近寄り來たり今少し様子が見えぬ



までの間靜かに控へんものと協議し乍ら見て居られますと、危  
き事には果して敵の一驅逐艦自分達が無茶に騒ひだのに氣注かな  
かつたのが何よりヒソ／＼話して居られると何だか件の驅逐艦は  
次第々々に近寄り参ります如うな氣配でムいますから、此時藤  
指揮官は部下に對して、

「ドウせ一度は死なねばならず、又た元來が死ぬると云ふ覺悟は  
十二分に定めて出て來たのだから、ドウじや皆が一緒に華々敷  
最後を遂げやうじやないか。衝突準備！之れから此短艇を漕ぎ  
つけて乗り込み露助の奴輩を殺しにして驅逐艦をお土産に持  
つて歸へり閣下達を始め一番驚かしてやらうじやないか」  
「左様です／＼夫れが何よりの上分別。短艇で驅逐艦に衝突する  
なんか一寸酒魔てるじやないか……」  
と勇む指揮官、勇む部下の面々、元來が決死隊の面々でムいます  
から斯る壯快なる命令には誰れ一人尻ごみ致す者もムいません

艦の先きに短刀をく／＼りつけて槍の代用となさるやら實に頼母敷  
事でムいましたなれど、之れが御一同の天運でもありせうか敵  
の驅逐艦は僅に五十間か六十間位ひの所を全速力で通過し乍ら  
斯る勇士の短艇が浮んで居る事には氣が注かすズン／＼と通過し  
て了つたさうにムいました。

斯くて其驅逐艦が急行して行つた方が確かに旅順口に相違な  
いので之れから推して津合の味方收容艇の待ち受けてる方も大  
概分りましたので、一行は俄に勢を得て夫れ漕げ今一息奮發しろ  
よと互ひに勵まし合ひ一生懸命に漕ぎ出されたが、其中に夜もホ  
ノ／＼と明けわたられたれど渺茫たる大海原に收容艇の影とては一  
隻も見へません「之れは大變な事になつて來た、如何したもの  
あらうか……」と頭を悩めて協議を爲されたが一向良案も浮びま  
せぬで、何せう魔のつく迄漕いで見るより外に詮術なしと明けて  
廿三日は終日無茶漕ぎに漕がれましたが、トウ／＼船も腐も見へ



すに名にし負ふ黄海の大海原をマゴくして其日も遂に暮れて了  
ひましたから、茲に齋藤大尉を始め勇士の面々何れも運を天に任  
かせて浪のまに／＼揺られ／＼て眠りながら一夜を明かされ、夜  
の明るを待ち兼ねて廿四日の朝となり、一同が疲れ切つたる双  
眸ひて彼方此方をお眺めになりましたが矢ッ張り船も島も皆目見  
へませぬで、有繋に一同ガツかりせられ俄に腹もへツてくれれば渴  
さも出ると云ふ始末、皆が失望落膽をして居るのを見てとられた  
る齋藤大尉。

「オイ／＼皆如何したのだ、長い事は云はぬから晝迄の處辛抱せ  
よ、皆軍歌を唄へよ、晝迄漕で見ろ……」  
と切り一同の勇氣を鼓舞されますで詮術なく部下の方々は何  
處を的と云ふでもなしに漕いで見られたが、正しく正午になつて  
も船も見へねば陸も見へませぬ、愈々以て最うは駄目と思はれま  
したから齋藤大尉は奮然として、

「最うはや愈々最後の決心を以て相互ひ一緒に切腹して死なふで  
はないか」

と云ふ相談をモチかけられますと。

「其御命令を待ち居りました、コンなに苦しい目を見るよりは  
切腹して死んだ方が餘程本望でいます」

と一同は大賛成、夫れではコ、で皆が大死するのも馬鹿々々しい  
から短艇の中に皆の姓名と其理由を書き記して死なうじやない  
かと。

海軍大尉 齋藤七五郎、一等兵曹 山田仲次郎、二等機関兵曹 増田  
兵馬、三等機関兵曹 寺岡虎市、一等機関兵 貝塚六郎、同林政吉  
二等水兵 安保助藏、二等機関兵 伊豆音松、同三島謙六、同宇野  
虎三、同三村千萬、三等機関兵 藍原善七、  
と記しつけられ萬事の仕度相済みした處で齋藤大尉は軍刀ズラ  
リとひきぬき逆手に膝の上にと推し立て、



「己れが一番に切腹をするから次ぎは山田兵曹、寺岡兵曹と願うに切腹をするが宜い。而うして残つた者が皆の屍体を水葬し、又た船中の鮮血は成るべく洗い清めて扱て後に死なねばならぬで、妙な割方のあはぬ任務ではあるが林と安保の兩人で此跡始末をやつて呉れよ……」

と遺言をされるのですが。此安保と云ふ二等水兵の方は勇士中の勇士とも申すべき人であつて、仁川丸も短艇の時も始終楫取りの任務をなされ願る度胸のすわつた處を齋藤大尉が見てとり斯る大役を命せられたのでした。

斯くて齋藤大尉を始めとし一同は愈々之れから切腹と云ふ間際になり有業の勇士達も何となく心細い如うな氣がし家闈として居ると。寺岡兵曹は續なく、

「指揮官、今先きから私の耳にはドゥしても櫓の音と思はるゝ音が聞へて不思議でなりません。淨世に未練があつて聞き寄せる

と笑はるゝか知らんと思ひ、聞けば聞く程明かに近寄て来る如うに覺へますか……」

「何、櫓の音が聞ゆる……。」

全二日二晩の間船も陸も寸分見へぬのに死ぬる間際になつて櫓の音と云ふのも可笑しいじやないか矢張り貴様が聞き寄せに過ぎないだらう。ワツハ、。

と齋藤大尉は一笑に附して居られますと其中に一同も耳を傾けたが六分通りは確かに櫓を操る音が聞ゆると云ひ出された。夫れではと一同が立ち上りて一同に四方を打ち眺めらるゝと果して浪の間に一艘の小型の戎船が現はれて、夫れには年老いたるチャンの老爺が一人的子供を對手に切りと櫓を操りて居りますので、時折折りも折り一行の人々は如何にも不思議で、堪まりませぬが。齋藤大尉は何せう軍刀はおさめずに此儘一ツ二ツ談話を試みて見やうじやないかと、皆して「オーイ、」又は「ニーや、

「一、」などゝ頼りに聲を合はせ喚き立てられた其聲が耳に還入



つたものと見へ、  
参りました。

来は来ましたものゝ勇士の中に支那語の出来る方は一人も居られませぬので、齋藤大尉は筆談をされますと感心にも件の老爺は多少文字を解する事が出来て「島が陸地はドチラにあるか……」と云ふ大尉の問ひに「自分の船の後から續ひて来られよ、島のあつた處迄左程遠からず」と之れ丈けは漸くに分明致しましたから。一同は「たび覺悟は定められたものゝ今となつて死ぬると云ふのも拍子がぬけて、何せふ試みに老爺の後にくつついて行つて見やうと協議一決、漕手は一段の勇を鼓して三時間餘りも漕いだかと思ふと今迄膝々と深く立てこめて居た霧も次第々々に晴れわたり成程行手にヌツと現はれたるは一ツの島影、能くく地圖や航路を案じられると此島こそ旅順口と威海衛とのマツ唯中、勃海への入口に横はる地城陸島に違ひムいませぬので、黄海名物の濃霧の

爲め展望が利かなかつたからとは云へ三晝夜近くもマゴくと漕ぎ廻はつて居られたる事の如何にも馬鹿々々敷感せられ、ソコで猿田彦の老爺は別れを告げて漕ぎ出しましたから一同も「多謝、々々」をくりかへし、久方振り島影指して漕ぎつけに相成りました。

スルと不思議な事にはソコに一隻の短艇が巖陰に浮いて居りますので、一同はソコに漕ぎ寄せ御覧になると不思議な事には擬ふべくもあらず仁川丸の第一ボートで、夫れには南澤大機關士を始め青木と土屋兩機關兵が乗り込んだ時砲弾は短艇の網をブチ切りて其儘沖合に推し流された譯合でしたのに、今見ると艇中には人影なきにつなぎ止めもせずとやりッばなしでムいますから、「残念ながら三人は果敢なき最後を遂て此短艇のみが流れついたのであらう……」齋藤大尉を始め一同は心配仕乍ら近寄られて能く艇中を御覧になると果して青木機關兵のハンカチが置いてムい